

靈界物語 第六〇卷 眞善美愛 亥の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十卷』愛善世界社

2007(平成19)年08月24日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 天仁和樂 てんじんわらく

第一章 清淨車 しやうじやうぐるま（一五二六）

第二章 神森 しんしん（一五二七）

第三章 瑞祥ずいしやう 〔一五二八〕

第四章 木遣きやり 〔一五二九〕

第五章 鎮祭ちんさい 〔一五三〇〕

第六章 滿悅まんえつ 〔一五三一〕

第二篇 東山靈地アツモスれいち

第七章 方便ほうべん 〔一五三二〕

第八章 土蜘蛛つちぐも 〔一五三三〕

第九章 夜光玉やくわうのたま 〔一五三四〕

第一〇章 玉國たまくに 〔一五三五〕

第十一章 法螺貝ほらがひ 〔一五三六〕

第三篇 神かみの榮光えいくわう

第一二章 三美歌さんびかその一〔一五三七〕
第一三章 三美歌さんびかその二〔一五三八〕

第四篇 善言美詞ぜんげんびし

第一四章 神言かみごと〔一五三九〕
第一五章 祝詞のりと〔一五四〇〕
第一六章 祈言いのりごと〔一五四一〕
第一七章 崇詞あがめごと〔一五四二〕
第一八章 復祭ふくさい〔一五四三〕
第一九章 復活ふくわつ〔一五四四〕

第五篇 金言玉辭きんげんぎよくじ

第二〇章	三五神諭その一（一五四五）
第二一章	三五神諭その二（一五四六）
第二二章	三五神諭その三（一五四七）
第二三章	三五神諭その四（一五四八）
第二四章	三五神諭その五（一五四九）
第二五章	三五神諭その六（一五五〇）

序文 じよぶん

凡てすべ教法けうはふには大乘だいじやう小乘せうじやうの區別くべつがある。一般いつぱん民衆みんしゆうに理解りかいし易やすく説示せつじするを小乘せうじやうと曰いつて、卑近ひきんな例れいを引ひいたり、何人なにびとにも解かいし易やすき言語げんごを以もつて示しめすの類るゑをいふ。多たす數う一般いつぱんの人々ひとびとに對たいして神かみの教をしへを説とく時ときはどうしても小乘せうじやうでなければ駄目だめである。哲學てつがく的てき思索しさくに耽ふけつて居をるやうな所謂いはゆる知識階級ちしきかいきふに對たいしては、又また小乘せうじやうでは馬鹿ばかにして

耳を傾けないものである。何事も難解的の經典を以て、唯一成道の大法と心得て居る自稱先覺者には、靈界の事情は容易には解されない。自然界と全く相反する所の神靈界の消息に對して、科學を基礎とせなくては駄目だと思惟して居る知識階級の人々は、何れも九十五種外道の全部を完備して居ると云つても良い位なものである。大乘を究めむとして不知不識の間に外道に陷落し一も取らず二も取らず、終には昏迷と愚癡とのみを取得するに至る。

凡て天國に昇るものは小乗を聞いて、直ちに神靈界の消息を感知し得る神知識者である。現界にあつて學者と謂はるる人々も神的知識なるものを缺く時は、決して神靈界を窺ふ事は出来ない。凡て大乘教議なるものは、上根者、宣傳使等の所業の教理であつて、一般學者の到底感得し能はざる神祕である。大乘とは一に法大、二に心大、三に解大、四に淨大、五に莊嚴大、六に時大、七に具足大、以上の七大乗は神に選まれたる神知識の所有者でなければ、到底今日勃興しつつある學者間の科學的研究態度にては、假令數百年を経るとも其真相を究むる事は不可能事である。神を信ぜず、その存在を認めず、神を愛せざるものは決してそ

の關門さへも窺ふことは許されない。而して大乘は齒に合はず、小乗は馬鹿にして耳を傾けず、暗中摸索の境界に迷ふものは、科學本能主義の學者の通常迎る處の經路である。之を神諭には途中の鼻高と稱へられてゐる。神を外にして靈界を知らむと如何に焦慮すると、決してそのアナンタニルデーシャ・ブラテスターナ（無量義處）に達することは出来ない。カルバシャーヤ（劫濁）クレーシャガシャーヤ（煩惱濁）サッドワカシャーヤ（衆生濁）ドルスチカシャーヤ（見濁）アーユシカシャーヤ（命濁）の五濁を清め去り、清淨無垢赤子の心境に立ち初めて神靈界の眞義に歩を向くことが出来るものである。この物語も亦神示の所作なれば五濁を除去し、以て之に向ふ時は、神命垂示のマハービジニヤーナーヒアー（大通智勝）を感受し、マハービューバ（大莊嚴）の神理を味はひ、神靈のラトナーワ・バーサ（寶音）に接し、無等々正覺を得て人生の本分を全ふし、不老不死天國の生涯を生き乍ら楽しむ事が出来る案内書となるのであります。

ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十二年四月

古人曰ふ、善願あれば天必ず之を輔く」と。瑞月は神明の隨々病軀を驅つて漸く神示の物語原稿用紙七萬五千枚約八百五十萬言、頁數二萬四千、約九箇月の着手日數を要して、茲にいよいよ六十卷を口述編著しました。斯かる阿房多羅に長い物語を書いて識者より冗長粗漫の文章だと失笑さるる恐れ無きには非ざれども、今日の大多數の人々は古人に比して頭惱の活動力最も劣り、容易に深遠なる教義を眞解すること能はず、且つ何事も上走りにて誤解し易く、爲に三五教の眞相や大精神を曲解し終には忌はしき大本事件を喚起するに到つたのは、返す返すも遺憾の至りであります。

上根の人は一言聞いて其眞相を了解し、至仁至愛の神の大精神や大經綸を正覺すと雖も、中根下根の人々に對しては到底高遠微妙なる文章や言語にては解し得ない而已ならず、却て神意を誤解し、大道を汚濁する虞がある。故に瑞月は現代多數の人々の爲に多大の努力と日子を費したのであります。

現代は古と異つて何事も大仕掛になつて居り更に益々大きく成らむとしつつあるが故に、非常に其間口が廣くて、奥行が浅い人間が多く現はれるのは止むを得ない。故に今後の人々に對して徹底せしめむとするには不斷の根氣が何よりも大切である。たとへ百年掛らうが神の大御心を萬人に徹底させなくては措かない決心である。

現代の人々が只の一人も自分が口述した物語を用ゐて呉れず、又了解して呉れなくても構はない、自分だけ只一人之を信じて大神の大精神を幾分なりとも實行し、正しき信仰の下に人間として生きて行く考へである。現代人の中には斯の如く世間の行事が悪化し獸化するのを見ては、……自分一人が心身を正しくし神の示教を信じる事が出来ようか……と思つたり云つたりして居る人々の考へは餘りの狼狽である。今日の社會にコウ言ふ狼狽へた人々の多いことは如何にしても慨はしいことである。國の滅亡する時は「一人の義人あるなし。又識者なるもの一人もある無し」といふ極端まで行くものだが、國に一人にても、義人や眞の識者のある限り、決して其國は亡ぶるものではない。神諭にも「誠の義人が三人あれ

ば彌勒神政必ず成就すべし」と示してある。今日はお互に最後の一人を以て任じ、
せめて自分だけでも正しき信仰に生き、清き人間として世の爲め道の爲めに盡さ
むとする同じ心の人々と共に、この聖なる團體を擁護し開展し以て斯の世界をし
て眞善美愛の樂土と化せしめ、國祖の神慮に叶ひ奉らむことを希望し、あらゆる
迫害に耐へ、克く忍び以て斯の千載一遇の神業に奉仕せむと欲し、最後の一人と
なるも決して絶望せず、狼狽せず、平靜に生命ある聖き希望を抱いて天下の爲に
竭さむとするものである。故に吾人は世俗の所在非難攻撃にも屈せず、山鳥の尾
のしだり尾の長々しくも撓まず屈せず、口述を續けて後世の軌範とせむことを希
求しつつあるのである。

この世を造りし神直日、心も廣き大直日、唯何事も人の世は、直日に見直せ聞
き直せ身の過ちは宣り直せ。と吾人は日夜この神示を楯としてヒシヒシと押寄せ
來たる激浪怒濤を浴びながら、善言美詞の言葉の武器を以て凡ての外道を言向和
す覺悟である。何程多勢の敵と雖も驚くには及ばない。只一言の善辭、即ち言葉
の善用に依りて強敵は忽ち化して強き味方となり、又多數の味方と雖も、唯一つ

の悪言暴語あくげんぼうごに依つてよ直ちにただ怨敵をんてきとなる。言靈ことたまの尤もつとも慎むつつしべきを明示めいじしたのは本書ほんしょ靈界物語れいかいものがたりを通じてつうの大眼目だいがんもくであります。讀者どくし幸さいに本書ほんしょに依つて言靈ことたまの活用くわつようを味あぢひたまふことあらば瑞月ずゐげつの微衷びちゆうも酬むくはれたりといふべきであります。ア、惟かむ神靈しんれい幸さい倍坐へいざ世せ。

大正十二年四月

第一篇 天仁和樂

第一章 清淨車（一五二六）

東西百里南北二百里、廣袤二萬方里のキヨメの湖は、大小十二の島を泛べて鏡の如く照り輝いてゐる。北方の雲間にボカされたやうなテルモン山が水鏡を覗いてゐる。

饅頭笠の様な大太陽が東の波間より生れ始め、五色の雲の階段をチクチクと登るにつけて其形を小さくして行く。颯々たる夏の晨の風は涼しく人の面を撫で、帆をペタペタと前後に揺つてゐる長閑さ。數萬の鳥族は湖上を前後左右に翱翔し、日の出を喜び祝ふ聲は九天に達するかと疑はる許りであつた。白砂青松のスマの濱邊には山の如く老若男女の羅漢姿が蝟集竝列して其影を湖中に逆しまに映してゐる。

伊太彦が率ゆる二十艘の猩々舟は萬歳歡呼の中にチクリチクリと磯邊に向つて近附き來る。磯邊に立つた群集は鬱金の鉢巻赤襷、太鼓や、摺鉦や、笛、笙、篳篥、羯鼓、月琴等を手にし思ひ思ひの妙技を發揮して、伊太彦一行の無事歸港を祝してゐる。

淡水の湖原は氣分の悪い潮の香もなく、風は芳香を送り、無聲の音樂聞えて人の耳を淨め、天清く海青く、地亦清く、天火水地はいと靜かにいと賑しく、實に理想の天國を現出せし如く、眞善美愛の極地に達した。天地の間に人も人の心にも一點の塵も止めず、和氣霽々として、親子の如く、兄弟の如く、夫婦の如く、敵も味方も一切の障壁を忘れ、其睦まじき事、鴛鴦の番の如し。斯かる平和の天地にも拘らず、猜疑心に搦まれたる心の暗鬼は忽ち畏怖驚愕の餘り、バラモン教のヤツコス、サボールを驅つて、無殘や湖中に身を投ぜしめた。

船中の人も陸上の群集も、猩々隊も此光景を見て、手に唾し、如何にもして彼等兩人を救はむと思ふ至情は一度に勃發し、同情の念に胸を焦した。斯かる所へ、豫て斯くあらむと、玉國別の命に依り葦草の間に小舟を泛ばせ待つてゐた眞

純彦、三千彦はス八こそ一大事と、艦權を操り、水面を飛鳥の如く迂つて、ドブ
ンと落ちた渦巻の上に舟を送り、漸くにして二人を救ふ事を得た。萬一此二人の
中一人たり共、生命を失ふ如き不吉事あらば、至善至眞至美の天地に瑕瑾を印し
光玉に曇りのかかりし如くなるべかりしを、事なくして濟みたるは、實に平和の
祥徴なりと衆人一度に歡喜し、且つ眞純彦、三千彦が仁俠を手を拍つて感賞した。
スマの關守チルテルは、十數臺の猩々車を造り、種々の花を飾りて、數多の兵
士に引かせ乍ら、猩々隊を迎へむ爲、チルテルが先頭に立ち、磯端に待つてゐる。
伊太彦は先づ第一に舟を離れて玉國別の前に進みより、歡喜の涙を湛へ乍ら、固
く其手を握り二三回揺つた。玉國別は感涙に咽び乍ら、稍かすんだ聲にて、
玉國別「伊太彦殿、天晴れお手柄、御苦勞であつた。豫定の時刻に先立つて、無
事歸る事を得たのは全く神の御恵と、汝が至誠の賜物である。サア是からバーチ
ル館に歸つて種々の珍らしい話を聞かして貰はう」
伊太彦「ハイ有難うムいます。然らばお伴致しませう」
バーチル、サーベル姫は美はしき山車を飾り立て、玉國別、眞純彦、伊太彦、

三千彦、デビス姫を搭乗せしめ、自分も山車の前方に立ち、歌を歌ひ乍ら、里人に太綱を以て輓かせつつ歸りゆく。十數臺のチルテルが設備した車には三百三十三體の眷族が搭乗し、キヤツキヤツと歡聲を擧げ乍ら、ヂリリヂリリと輓かれ行く。鐘、太鼓、拍子木、縦笛、横笛、羯鼓、月琴其外種々雑多の音樂に送られ、各唄を唄つて賑々しく大道を練り行く。

チルテルは猩々車の先に立ち、聲も涼しく音頭をとつた。群衆は一節々々其あとをつけ乍ら、手をふり腰を振り、狂喜の如く踊り狂ふ。

チルテル 酒のイツミのアツモス山の ヨーイセ、ソーラセ

パインや樟の繁茂せる 梢に鷹が巢をつくる

鳥の司の禿鷲さまが 千羽萬羽と子を生んで

スマの中空に舞ひ遊ぶ ヨーイセ、ソーラセー

みみづく、梟や山鳩が 又も梢に巢をくんで

バーチルさまの萬歳を 祝ふも目出度き夏の空

ヨーイセ、ソーラセ
千歳の鶴は舞ひ遊あそび

八千代の龜かめは舞まひ遊あそぶ
前代ぜんだい未聞みもんの盛せい典てんに

敵てきと味方みかたの隔へだてなく
天火水地てんくわすいちも結むすび合あひ

世界せかいを一つひとに相丸あひまるめ
三五教あななひけうやバラモンの

神かみの恵めぐみを慎つつしみて
老おいと若わかきの隔へだてなく

仰あふぎ敬うやまふ今日けふの空そら
ヤートコセー、ヨーイヤナ

アレワイセー、コレワイセ
ソーリヤ、ヨーイトセー

カンカンチキチン
チキチン
カンチキチン

ドンドコ
ドンドコ
ドコドコドン
ヒューヒューヒューヒューヒュー

ヒュー

猩々しやうじやうがしまヶ島がしまに流ながされし
三百有餘さんびやくいうよの眷族けんぞくは

天あまの岩戸いはとの開ひらかれて
全まく日ひ出での御代みよとなり

五み六ろ七くの神かみの松まつの代よを
目め出でたく祝いはふスマの里さと

鷹たかの棲すまひしアヅモスの
元もとの屋敷やしきに立たち歸かへり

天王てんわうの森もりの守護神しゆごじんと

再びふたたび仕つかふる世よとなりぬ

ヨ－イセ、ソーラセ

かかる目めで出たき神代かみよをば

招來せうらいしたる神人しんじんは

玉國たまくに別の宣傳使せんでんし

誠まこと一つの賜物たまものぞ

バラモン軍ぐんに能く仕つかへ

朝あさな夕ゆふなに三五あななひの

教司をしへつかさや信徒まめひとを

鵝うの目鷹めたかの目光めひからせつ

片かたツぱしから捕縛ほばくして

苦くるしめ惱なやめし吾々われわれも

轉迷てんめい開悟かいごの花開はなひらき

今いまは全まくバラモンの

軍いくさの司つかさを辭職じしよくして

心こころも清きよき三五あななひの

誠まことの道みちに進すすみけり

あゝ惟かむながら神々かむながら

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何事ただなにごとも人の世ひとよは

直日なほひに見直みなほし聞直ききなほす

神かみの惠めぐみに抱いだかれて

今日けふの祝いはひに列つらなりし

其喜そのよろこびは天地あめつちも

一度いちどに搖ゆるぐ許ばかり也なり

ヨ－イセー、ソーラセ

引ひけよ引ひけ引ひけ引ひけしやうじやうへるま 狸しやうじやうへるま々々車ま ドドッッココイイシシヨヨウウ ドドッッココイイシシヨヨウウ

砂すな敷しきつつめめしし此この街かい道だう 車くるまのの轍わだちののききししるる音おと

引ひ手てのの一いち度どにに唄うたふふ聲こゑ 天てん國こく淨じやう土どかち地ちのの上うへか

例ためしもも知しららぬぬ樂たのししささは 高たか天あま原はらのの天てん國こくのの

其その儘まま姿すがたををううつつししたたる 歡くわん喜きのの波なみはは漂たひひぬ

ドドッッココイイセセーー ドドッッココイイセセーー ヤヤーートトココセセーーののヨヨーーイイヤヤナ

チチヤヤンンチチヤヤンンチチキキチチンン チチヤヤンンチチキキチチンン チチキキチチンン チチキキチチンン チチヤヤンンチチキ

チチンン ドドンンドドココ ドドンンドドココ ドドココドドココドドンン ヒヒユユーーヒヒユユーードドンンドドンン ヒヒユユーードドンンドドンン

清きよめめのの湖うみにに三みつ歳とせぶぶり 漂ただよひひ暮くらししたたアアンンチチーーは

狸しやうじやう々々のの島しまののおお客きやくささま 漸やうくく無む事じにに迎むかへへ來きて

ススママのの磯いそ邊べににつつくくやや否いな 數あ多まのの男なん女にょにに迎むかへへらられ

抔べんぶ舞ぶ雀しやく躍やく魂たましひのの 置おどどここささへへもも知しららぬぬ身みのの

抔べんぶ舞ぶ雀しやく躍やく魂たましひのの 置おどどここささへへもも知しららぬぬ身みのの

抔べんぶ舞ぶ雀しやく躍やく魂たましひのの 置おどどここささへへもも知しららぬぬ身みのの

歓迎車の梶を把り
館へ歸る嬉しさよ

ヨーイセー、ソーラセ
皆さま揃うて曳いてくれ

先方に見ゆる森蔭は
バーチルさまの御館

静まり返った邸内も
今日の生日の足日から

三百有餘の眷族が
老木茂る森の上に

梢を傳ひ飛まはり
キヤツキヤツキヤツと賑しく

宙空に音楽相奏で
イズミの國の隆昌を

祝ぎまつる事だらう
三五教やバラモンの

教の司が村肝の
心を一つになし玉ひ

眞善美愛の神の道
完全に委曲に立て玉ふ

聖の御世とはなりにけり
ヨーイセー、ソーラセ

旭は照るとも曇るとも
月は盈つ共虧くる共

テルモン山は海となり
キヨメの湖は山となり

天變地妖の災が
一度に起る事あるも

神かみの恵めぐみに救すくはれし 神かみの選えらみしスマの里さと
 千代ちよも八千代やちよも動うごかまじ 勇いさめよ勇いさめ里人さとびとよ
 風かぜは自然しぜんの音おん樂がくを 宙空ちうくうに奏かなで百ももの木きは
 手てを振ふり腰こしを曲まげ乍ながら ダンスを演えんじて吾々われわれが
 無事ぶじの歸郷ききやうを祝いはふ也なり 喜よろこび勇いさめ惟神かむながら
 神かみに任まかせて何事なにごとも 日ひ々の業げ務ふむを勤つとめつつ
 バ―チルさまを親おやとなし 神かみの司つかさを師しとなして
 卑屈ひくつ猜疑さいぎの精せい神しんを 科戸しなどの風かぜに吹ふき拂はらひ
 速川はやかはの瀨せに流ながしすて 清淨しやうじ無垢やうむくの魂たまとなり
 永ながく天與てんよの御恵みめぐみを 仰あふぎまつらむ世よとなりぬ
 引ひけよ引ひけ引ひけ御車みくるまの 此この太綱ふとづなの切きれるまで
 ヨイトコセー ヨイトコセー

新あらたに開鑿かいさくされた廣ひろい街道かいだうに白砂しらすなを布しきつめた上うへを漸やっやくにしてアヅモス山さんの南麓なんろく、

バーチルが宏大なる屋敷を指して、歡喜の裡に着いた。これより一同は邸園に蓆を布き、祝の酒に舌鼓を打ち、歡喜を盡す事となつた。

バーチル、サーベル姫は一同に恭しく禮を述べ、玉國別一行及チルテルの一行を導いて、奥の廣き客間に招待した。三百有餘の猩々は何の會釋もなく、車より先を争うて飛下り、バーチルの後に従ひ、所狹き迄うごなはつて、奥の間を塞いで了つた。

玉國別「バーチルの君は嬉しくおぼすらむ

數多の御子を目のあたりみて」

バーチル「三歳ぶり吾が子の如く愛でゐたる

猿の顔を見るぞ嬉しき」

サーベル姫ひめ「う生みの子のいや日につき月にさか榮えしも

皆みな天地あめつちの恵めぐみなりけり

物もの云いはぬ吾わが子こなれども魂たましひは

吾われに通かよひぬ子この事こと々ことは

チルテル「とりけものむしけらまで鳥獸蟲族すく迄も救うてふ

神かみの恵めぐみの有ありがた難おもくぞ思おもふ

眞ます純み彦ひこ「おほぞら大空もおほつなばら大海原もわたすみ渡る

島しまに育そだちし身み魂たまぞきよき

伊太彦いたひこ かく許ばかり樂たのしき事ことがあらむとは

吾われさへ夢ゆめに悟さとらざりけり〆

三千彦みちひこ 天地あめつちの惠めぐみは四方よもに三千彦みちひこの

水みづも洩もらさぬ今日けふの喜よろこび〆

デビス姫ひめ 吾われも亦また神かみの御業みわざを了をへし上うへは

御子みこの數々かずかず生まむとぞ思おもふ〆

伊太彦いたひこ 三千さんぜんの物言ものいはぬ子こを生うみ竝ならべ

喜よろこび胸むねに三千彦みちひことなれ〆

三千彦みちひこ 三千さんぜん 五千ごせん の御子みこ は何なん のその
百千萬ももちよろづ の教をしへ 御子みこ 生う む

アンチーをしへ アヅモスの山やま に棲す まへる百鳥ももどり も
教をしへ の御子みこ の數かず に入い らなむ

アキスわ 吾わ れとて玉國たまくに 別わけ の御子みこ となりぬ
惠めぐみ の乳ちち を含ふく みし身み なれば

カールむかしさる さる昔むかし 猿さる が三匹さんびき 飛と んで來き て
アヅモス山やま の使つかひ とぞなる

テク 其子孫茂り榮えて三百の
珍の猿の御子となりける

カンナ 惟神人の種をば地に蒔いて

青人草と育て玉ひぬ。

草も木も花咲みのる世の中に

吾のみ一人花なかるらむ

へール 初花の露の唇吸はむとて
驚かされぬ珍の白狐に

チルナ姫ひめ 咲さくとても容易よういにチルナ初花はつはなの

香かりを千代ちよの枝えだにとどめて。

チルテルの吾背わがせの君きみも惟神かむながら

目覺めざめ玉たまひし今日けふの嬉うれしさ

ワックス□テルモンの神かみの館やかたを追出おひだされ

今日けふは嬉うれしき春はるに會あふ哉かな

ヘルマン□うたかたの夢ゆめと消きえ行く吾罪わがつみは

皆皇神みなすめかみの光ひかりなりけり

エクスいほむち 五百答を大勢おほぜの前まへで加くはへられ
屍しりおちつきし今日けふの喜よろこび〃

エルうづ ミカエルの珍うづの司つかさの現あらはれて
百ももの罪科つみとが拂はらひ玉たまひぬ〃

ハールなさけ 情なさけある神かみの司つかさを疑うたがひて
海うみに墮おちたる人ひともありけり〃

ヤツコスわがつみ 吾罪わがつみの深ふかきを思おもひ泛うかべては
世よにやすやすと永ながらへぬべき。

さりなが乍めぐみらふか惠かむつかさのかむつかさ深ふかきかむつかさ神かむつかさ司かむつかさ
浮うかばたませたま玉たまひいのちたすぬいのちたす命いのちたす助いのちたすけていのちたす
』

サなボなーなルな『な情なあなるな神なのな司なのな言なのな葉なに
今いまはいま怖おそれのいま夢ゆめもいま醒さめいまけりいま』

サなーなベルな姫ひめ『な子こよな孫まごよな汝なれはな之これよりな門かどにな出でて
神み酒きにな浸ひたれなよな心こころゆなくな迄まで
』

伊い太た彦ひこ『い猩しやうじやう々じやうのい御み子こにい代かはりいてい物もの申まうさいむ
吾わがたわがらわがちわがねわがのわが深ふかきわが御み惠めぐみわが。

今日よりはアツモス山に立歸り

昔のままに神仕へせむ。

此館木々の茂みの深ければ

千代の棲處になさむとぞ思ふ。

人の子は疊の上に騒げ共

吾は梢によりて騒がむ。

夜着一つ箸一本も要りませぬ

木々の木の實を取りて食へば。

折々に酒倉開きなみなみと

神酒を與へよ百の御子等に

バーチル「吾は今俄に御子を得たりけり

妻の御腹をからざる御子を

サーベル姫ひめ「からだ身體はよし借からずとも汝なが身み魂たま
吾われに睦むつびて生うませ玉たまひぬ」

バーチル「しやうじやうひ猩猩彦わがの和わ合がして
生うみし子こなれば他ひと人この子こでなし」

玉たま國くに別わけ「いざさらばこれうたの宴た會げを切きりあげて
神かみの宮みや居ゐに進すすみ詣まうでむ」

テク「いへバーチルつかさの家いへをば守まもるテク司つかさ
從したがひ行ゆかむ君きみの背しり後へに」

之より玉國別は一同と共に、アヅモス山の彼方此方の谷間を跋涉し、大峽小峽の木を數多の杣人に伐採せしめ、手斧の音勇ましく宮の普請の木作りに着手する事となつた。數多の里人を始め、チルテルの部下竝に猩猩隊は晝夜の別なく喜び勇んで、木を伐り、或は運び、或は削り、身の疲れも打忘れて宮普請に奉仕する事となつた。

(大正一二・四・五 舊二・二〇 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第二章 神森〔一五二七〕

アヅモス山の谷深く 數多の樵夫や猩猩を
引率なして三五の 玉國別の宣傳使
彼方此方と經巡りて 手頃の良材相選び

山口神を祭りつつ 本と末とは山靈に

供へまつりて三つ栗の 中の幹をば伐り出し

珍の宮居の材となす グイグイグイと鋸の音

チヨンチヨン カンカン 鉞の 聲は木精に響きつつ

彼方此方に歌ふ聲 猿の勇む怪聲に

宛然戦場の如くなる この光景を打眺め

バーチル夫婦は手を拍つて 天國淨土の建設と

祝ひ歌ふぞ目出度けれ。

バーチル 心もスマの神の里 アヅモス山の南麓に

遠き神代の昔より 里庄の君と仕へつつ

バラモン神を尊敬し 神の司を兼ねながら

神代ながらの吾家を 守り來りし目出度さよ

わが垂乳根のバーチクは 尊き神の御恵みに

いつしか慣れて天王の 森に鎮まる神様を

いと忽かに思ひなし

神の使の猩々彦

命をとりて神罰を

蒙り遂に果敢なくも

天壽短く失せたまふ

猩々の彦の魂は

吾肉體を宮となし

天王の森の神殿を

いと新しく改築し

底津岩根に宮柱

太敷く建てて垂乳根の

犯せし罪を宣り直し

アヅモス山の比丘となり

堅磐常磐に仕へよと

猩々の彦の魂が

吾に厳しく宣り傳ふ

玉國別の許し得て

神代ながらに刃物をば

入れし事なき神の森

喜び勇みて伐採し

宮の柱と仕へゆく

今日の生日の目出度さよ

アナンヱ`イクラー

(無量力)の神力を

各も各もに受けつぎし

アバーヱクラーミン

(大力)の荒男

朝も早うから現はれて

捻鉢巻の大活動

アニクシブタヅラ(不休息)の大車輪

る

汗あせをタラタラ流ながしつつ

勵いそしむ見みれば惟かむながら神

神かみの仕組しくみと知しられけり

玉國たまくにわけ別わかはトライロー・キヤボクラー（越こ三界）

天下てんかに稀まれな宣傳せんでん使し

マイトレイヤ（彌勒）の神國しんこくを

築きづかむ爲ために産土うぶすなの

館やかたに現あれます瑞御魂みづみたま

ラトナブラナ（月光）の命めいを受け
ブルナ・チャンドラ（満月）の照てり渡わた

これこの神山みやまに現あれまして
ニツテヨーデユクタ（常精進）勵はげみつつ

神かみの柱はしらを一いち々に
選えりぬき玉たまふ雄々ををしさよ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
誠まこと一ひとつの神かみの道みち

如何いかなる曲まがも恐おそれむや
神かみの依よさしの此宮このみやは

天國てんごく淨土じやうどのマハーヰ
宮居みやゐの如ごとく築きづかれて

彌いや永久とこしへに世よの人ひとを
救すくはせ玉たまふ事ことならむ

吾われはこれより朝夕あさゆふに
神かみの教をしへのスタルマ（善法）や

シキン（妙識）を清く身に稟けて 青人草は云ふも更

禽獸蟲魚に至るまで マイトレーヤ（彌勒）の心もて

救ひ助けむ惟神 神に誓ひて願ぎまつる

吾魂はアヴドヤー（無明） 苦集滅道の眞諦を

誤り忘れ漁りに 心を傾け居たりしが

神の試練を與へられ 今は全く新人と

生れ變はりし嬉しさよ 三五教の御教を

心を清めて體得し

サムダヤ（集聖諦）、ヂフカ（苦聖諦）、ニローザ（滅聖諦）、マール（道聖

諦）が四聖諦

世の人々に説き諭し 物質的の寶をば

残らず社會に奉還し 貧富貴賤の區別なく

神のまにまに此世をば 嬉しく楽しく渡るべし

清淨無垢の猩々彦 猩々姫は惟神

神かみに仕つかへてその體からだ 一つひとつを守まもる計ばかりにて
 此世このよの寶たからを身みに持もたず 天地てんちの惠めぐみを喜よろこびて
 此世このよに生いきて榮さかえ行ゆく 空そら飛たつ鳥とりも山やまに棲すむ
 百ももの獸けものも鱗うろこ族くづも 野邊のべの草木くさきに至いたる迄まで
 決けつして寶たからを私しい有いせぬ それ故ゆゑ心を清きよらけく
 天地てんち自然しぜんの法則はふそくに 従したがひまつり永久とこしへの
 惠めぐみの春はるを喜よろこびて 此世このよを暮くらす健氣けなげさよ
 これを思おもへば吾々われわれは 巨萬きよまんの富とみを私しい有いして
 天地てんちの惠めぐみを獨どく占せんし 里庄りしやうとなりて世よの人ひとに
 誇ほこり居あたりし苦くるしさよ いざ之これよりは一切いっさいの
 執着しつちやく心を拂拭ふつしきし サーベル姫ひめと睦むつまじく
 アヅモス山さんに草庵さうあんを 結むすびて移うつり住すみ乍ながら
 父祖ふその傳つたへし邸やしきをば 里人さとびと等たちが身しん心の
 疲勞つかれを休やすむる園そのとなし せめては父祖ふその罪科つみとがを

贖あがなひまつりサルワ、ロー　カターツ・バドラヴオード
ワ、エーカブラチユツチールナ（度一切世間苦惱）神業しんげふに
仕つかへまつらむ惟神かむながら　守まもらせ玉たまへと大神おほかみの
御前みまへに慥ひれふ伏し願ねぎ奉まつる　あゝ惟神かむながらかむながら々々
御靈みたま幸さちひましませよ」

テクは捻鉢卷ねぢはちまきをなし、數多あまたの荒男あらをとこの樵夫きこりを監督かんとくし乍ながら歌うたひ始はじめた。

テク『世よはおひおひと更あらたまり　專制制度せんせいせいどを破はく壊わいして

新あたし人ひとの御世みよとなり　ソシアリズムやコミュニズム

海うみの内うち外とに擡頭たいとうし　天地てんちの雲行くもゆき一變いつべんし

天國てんごく淨土じやうどを地ちの上うへに　築きつかむ時ときとぞなりにけり

此家このやの主あぬじバーチルは　世界思想せかいしさうの傾向けいかうを

早はやくも悟さとり玉たまひつつ　ソシアリズムを發揮はつきして

巨萬きよまんの富とみを里人さとびとに

いと平等べうどうに分與ぶんよしつ

上下じやうかむつ睦むつびて世よを送おくる

至誠しせいを發揮はつきし玉たまひけり

之これぞ全まつたく皇神すめかみの

平等愛びやうどうあいの發現はつげんか

但ただしは人ひとの覺醒かくせいか

若もしくば時代じだいの賜物たまものか

實げにも尊たふとき限かぎりなり

もしも此儘このままくわん頑わんとして

昔むかしの儘ままに地ちの上うへの

寶たからを獨占どくせんするならば

四民しみんの怨府えんぶとなり果はてて

如何いかなる凶事きようじが見舞みまふやら

圖はかり難がたなき正念場しやうねんば

よくも改心かいしん成なされました

之これこそ私わたしの御主人ごしゆじんだ

アナーキズムやニヒリスト

その外ほか百ももの主義しゆぎ黨派たうは

現あらはれ來きたるを防止ばうしして

此美このうるはしき天地あめつちを

完全無事くわんぜんぶじに開ひらきつつ

マイトレイヤ（彌勒）

の神かみの世よを 樂たのしみ祝いはふ魁さきがけと

現あらはれ玉たまひし猩々しやうじやう彦ひこ

猩々しやうじやうの姫ひめの眞心まごころを

世人よびとに代かはり慎つつしみて

ここに感謝かんしゃし奉たてまつる

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈の恩頼の尊さをみたまのふゆのたふと

仰ぎ敬ひ祝ぎ奉るあふうやまほまつ

三千彦みちひこ 眞善美愛の天地のしんぜんびあいあめつち 中に生れし諸々はなかうまもろもろ

只惟神々々ただかむながらかむながら 尊き神の御恵みにたふとみめぐ

浸りて清く榮え行くひたきよさかゆ アヅモス山の森林はさんしんりん

遠き神代の昔よりとほかみよむかし 刃物を入れぬ聖場とはものいせいぢやう

傳へ來りし神の山つたきたかみやま 木々の梢は蒼々ときぎこすゑさうさう

常磐堅磐に色深くときはかきはいろふか 花も實もある太柱はなみふとばしら

鷺が巢を組む鷹が棲むわしすくたかす パインの枝には田鶴棲ふえだにはたづすぐ

晝目の見えぬ梟鳥ひるめみふくろどり 木菟迄が集りてみみづくまであつま

千代の棲所と定めたるちよすみかさだ 彼方此方の木の幹をあなたこなたきみき

忌鋤忌斧打ち揮ひいむすきいむをのうふる 伐り倒し行く勢にきたふゆいきほひ

一度は驚き逃げ狂ふいちどおどろくにくる その有様を見るにつけありさまみ

同情の涙禁じ得ずどうじやうなみだきんえ さはさり乍ら大神のながおほかみ

珍うづの社やしろが建たつなれば 百鳥もとり千鳥ちどり勇いさみ立たち

もとの如ごとくに安やす々と 天授てんじゆの恵めぐみを樂たのみて

この天國てんごくに永とこ久しへに 安やすく月つき日ひを送おくるべし

今いままで姿すがたを隠かくしたる 猩々しやうじやうひこ彦ひこの魂たまの裔すゑ

三さん百びやく三さん十じふ三さん體たいの 眷族けんぞくさまは又またもとの

千代ちよの棲處すみかに歸かへりまし 梢こすゑを渡わたり跳とび越こえて

キヤツキヤツキヤツと勇いさましく 歡喜くわんきの聲こゑを張はり上あげて

珍うづの御子みこをば數かず多おほく 幾いく千せん萬まん人にん生うみたらし

清淨しやうじやうむく無垢むくの神國かみくにと 歡喜くわんきの花はなの開ひらくなる

常世とこよの春はるに遇あふならむ 勇いさめよ勇いさめ里人さとびとよ

祝いはへよ祝いはへ猩々しやうじやうひこさま 三あな五な教ひけうもバラモンの

教をしへの司つかさも信徒まめひとも 心こころの塵ちりを打拂うちはらひ

睦むつび親したしみ永とこ久しへに 神かみの恵めぐみを感かん謝しやして

苦行くぎやう外道げだうの境域きやうあまを 今日けふより全まく脱だつ却やくし

嬉しくうれ樂しくたの此世このをば
渡らせわた玉たまへかむながら惟神
珍うづのをしへ教みちのひこ三千彦こが
清きよき心こころを現あらはして
神かみのみまへ御前まつぶにま詳細まさに
世よのゆくすゑ行末あんぜんのあんぜん安全をを
畏かしこみかしこ畏かしこみね願まつぎ奉まつる
あゝかむながらかむながら惟神かむながら々々
神代かみよのすがた姿すがたぞたふと尊たふとけれら

アヅモスの山やまは尊たふときスメール（須彌仙）と
やがてかがや輝かがやくよも四方くにくにのくにくに國々くにくに。

（大正一二・四・五 舊二・二〇 於皆生温泉濱屋 北村隆光録）

第三章 瑞祥ずいしやう（一五二八）

三千世界の梅の花
蓮の花も一時に

開いて香る世となりぬ
嚴の靈の大御神

瑞の靈の大御神
須彌仙山の頂に

現はれまして大宇宙
一切萬事を統べたまふ

マイトレーヤ（彌勒）の世となりぬ
抑須彌の頂は

梵語のメールクータなり
妙高山と翻譯し

又もスメールと稱ふなり
其東方は黄金の

寶を藏し南方は
玻璃、西方は瑞御靈

白銀寶珠所成せり
北方瑪瑙の寶成り

連山群峰壓しつづ
大海中に突出し

雲を抜き出て其高さ
三百三十六里あり

天地を造りたまひたる
元津柱の大神の

常磐堅磐の御住所と
天、人共に尊敬し

安明、妙光、金剛山
好光山と稱へらる

此をば翻譯する時は 靈山會場の蓮華臺

聖き丘陵の意味となる アツモス山も三五の

尊き神を祭りてゆ 須彌仙山と稱へられ

百の神達勇みたち 集ひたまへる靈場と

定まりたるぞ尊けれ 神の恵に浴したる

此里人は村肝の 心を清淨潔白に

濁り汚れの跡もなく 靈耳を開きて天人が

現はれ來り舞遊ぶ 三千世界の聲を聞き

象馬牛車や鐘鈴の 微妙の樂に耳澄ませ

琴瑟簫笛勇ましく 清き涼しき歌の聲

百人達の歡聲は 天地も揺るぐ許りなり

數多のエンゼル下り來て 樂をば奏し玄妙の

唱歌の聲は澄み渡る 老若男女は云ふも更

海川山野谷々の 空驅りゆく祥鳥は

伽陵頻伽かりようびんがか鳳凰ほうわう孔雀くじやく
鶴鷲つるわしたか鷹うぐひすや鷲うぐひすの

其啼聲そのなきこゑは天地あめつちに親和しんわし來りきた天國てんごくを

地上ちじやうに建てした如ごとくなり地獄ぢごくに起るおこ大苦悶だいくもん

阿鼻叫喚あびけうくわんの聲こゑもなく餓鬼がきの飢渴きかつの叫さけびなく

飲食おんじき求むるもと聲こゑもせず曲まがの阿修羅あしゆらが大海だいがいの

傍ほとりに住すみて自おのづから嘯ささやき呪のろふ影かげも無なし

皆みな一切いつさいに神かみの教のり喜よろこび勇いさみて聽ちやうもん聞し

人と獸けものの分わかちなく喜よろこび勇いさむぞ尊たふとけれ。

あゝ惟かむながら神かむながら々々かむながら眞善美愛しんぜんびあいの神心かみこころ

彌茲いよいよに顯現けんげんし天地てんちに轟ととろく音彦おとひこの

玉國たまくに別のわけ神德しんとくは三千世界さんぜんせかいの天使エンゼルぞと

仰あふがぬ者ものこそなかりけり朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも清淨しやうじやう無垢むくの御靈みたまをば

照てらして渡わたる世よの中に如何いかでか曲まがの襲おそはむや

アヅモス山の聖場は

須彌仙山の光景を

完全に委曲に現出し

三千世界の鎮めぞと

八千萬劫の末迄も

照り輝くぞ目出度けれ

あゝ惟神々々

神の御言を蒙りて

須彌仙山に譬ふべき

蓮華臺上の存在地

綾の聖地を後にして

神洲最初の鎮臺と

言ひ傳へたる大山を

救ひの船に乗りながら

眺めて茲に遠つ世の

生物語述べて行く。

時しもあれや聖地より

此世の泥を清むてふ

【二代澄子】と【仁齋】氏

木花姫の御再來

御靈の守る肉の宮

千代の固めの經綸に

遙々來る松林

中に立ちたる温泉場

濱屋の二階に對坐して

役員信徒諸々と

三月三日の瑞御靈

五月五日の嚴御靈

三五の月の光をば

いと圓満に照さむと

互に誠を語り合ひ

誓ひを立てし目出度さよ

堅磐常磐に彌【加藤】

いや【明】らけく日月の

恵を祝ふ神の書

寫すも尊き【加藤明子】

松の千年はまだ愚か

万年筆も健かに

紫檀の机に打ち向かひ

千秋萬歳誌し置く

あゝ惟神々々

神の恵の尊さよ。

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

星は空より落つるとも

日本海は涸るとも

神の傳へし此聖書

千代も八千代も動かまじ

嚴の御靈の命令もて

空漕ぎ渡る方舟に

心臓に鼓を打たせつつ

科戸の神や水分の

神の弄のダンスをば

面白嬉しく眺めつつ

心も清く平けく

神かみのまにまに進すすみ行ゆく。

スメールの山やまの麓ふもとに二柱ふたはしら

立たびて世よをば開ひらく今日けふかな。

世よの人ひとを皆みな生いかすてふ温泉場をんせんば

救すくひの船ふねに棹さし進すすむ。

天地あめつちの眞ま純すみの彦ひこの物語ものがたり

此この世よを「澄すみ子こ」の司つかさ來きたれる。

マイトレーヤ御代みよ早はやかれと「松村まつむら」の
松村眞澄

【眞ま澄すみ】の彦ひこの笑えみ榮さかえつつ。

ミロクミロクの世よ一ひと日ひも早はやく「北村きたむら」の
北村隆光

月日つきひの「隆たか」き「光ひかり」待まちつつ。

いとた【加】き【藤】の御山の神靈

加藤明子

【明】したまひぬ常闇の世を。

世を救ふ神の【出口】の【瑞月】が

出口瑞月

【眞純】の空に輝き渡る。

マハースターマブラーブタ（大勢至）マンヂユシユリ（文珠師利）

アバローキテーシュワラ（觀世音）尊き。

スーラヤ（日天子）やチャンドラデーワブトラ（月天子）やサマンタガン

守らせ給へ瑞の御靈を。

ダルタラーストラ・マハーラーヂヤ（東方持國天王）
トルダカ（南方增長

天王）

トルバークサ（西方廣目天王）
トイスラワナ（北方多聞天王）

守らせ玉へこれの教を。

(大正一二・四・五 舊二・二〇 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

附記ふき

本日は暴風雨烈しく怒濤の聲に妨げられ是にて口述中止せり。

第四章 木遣きやり (一五二九)

靈山會場のスメール山 天を封じて鬱蒼と
立ち並びたる老木を 大峽小峽に求めつつ
宮の柱を造らむと 玉國別の宣傳使
數多の信徒伴ひて 晝夜を分たず伐採に
いそしみ勵むぞ勇ましき。

アンチーは采配を振つて木遣歌を唄ひ、
運搬を始めかけたり。 彼方此方の谷間より、
作事場に向つて

天は清淨地清淨 人の心も清淨に

猩猩の宮を造らむと スマの村人打揃ひ

御酒に心を浮かませつ 汗を絞りて木を運ぶ

ヨイヨイヨイトセ 此處は名に負ふキヨの湖

南に連なるアツモスの 神の集ひの靈場と

數千年の昔より 世に響きたるスメールの

清淨無垢の鎮守なり 旭は空に煌々と

輝き亘り西に入る 旭の直射す神の森

冬日の日照らす珍の山 此頂に一本の

世界に稀な樟の木は 圍は三百三十丈

幹の高さは五百丈 梢は四方に擴がりて

三百三十三體の 眷族様の御住所

ヨイトセー ヨイトセー 鷹も梟も荒鷲も

其外百の鳥翼 常磐堅磐に棲み乍ら

互に睦び親しみて 他をば犯さず太平の

目出度き證を昔より 示し來たりし長閑けさよ

ヨイトセー ヨイトセー バラモン天を齋りたる

猩々の宮も永年の 雨と風とに曝されて

棟は雨もり梁は 歪みて柱は蟲がくひ

見るも無殘な有様と 時の力か知らね共

荒廢したるぞ歎てけれ バーチルさまが改めて

神の教を遵奉し 此聖場に目出度くも

三五教の珍の宮 バラモン教の宮殿を

新に建造ましまして 三千世界の鎮臺と

まつらせ玉ふぞ有難き ヨイトセー ヨイトセー

旭あさひは照てる共とも曇くもる共とも
月つきは盈みつとも虧かくる共とも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
アヅモス山さんの靈場れいぢやうは

常磐とき堅磐かきはに變かはらまじ
遠とほき神代かみよの昔むかしより

天足あだるの彦ひこや胞場えは姫ひめが
靈たまの御末裔みすゑと現あれませる

タクシヤ力龍王りうわうの出生地しゅつしやうち
見みるも嚴いかめし九頭龍くづりうの

其その猛勢まうせいは見みる人ひとの
眼まなこを潰つぶし毒どくを吐はき

人ひとの命いのちを取とり喰くらふ
其その惡業あくごふを懲きためむと

高天原たかあまはらに現あれませる
月照彦つきてるひこのエンゼルが

嚴いづの言靈ことたま打出うちし
此この靈場れいぢやうの岩いはが根ねに

封ふうじおきしと傳つたへたる
世界せかいに名高なだかき地ち點てんなり

十萬年じふまんねんの其間そのあひだ
心こころを鍛きたへ魂たまを鍊ねり

清淨無垢しやうじやうむくの靈身れいしんに
立直たちなほりたる曉あかつきは

又またもエンゼル現あらはれて
タクシヤ力龍王りうわうを救すくひ出だし

五風十雨ごふうじふうの調節てうせつを
守まもらせ玉たまふ御誓おんちかひ

此龍王の永久に

地底に潛み在す限り

荒風すさび大雨は

十日二十日と降しきり

地上に住める人畜や

草木の片葉に至る迄

此苦みは癒えざらむ

ヨイトセー　ヨイトセ

三五教の宣傳使

月照彦の流れをば

汲ませ玉へる玉國別の

地上のエンゼル今此處に

現はれませしを幸に

天地を淨め澄ますてふ

天津祝詞や神言を

宇宙の神靈に奏上し

千代に八千代に封じたる

これの龍王を速に

救はせ玉へば國人は

いかに喜ぶ事ならむ

五穀は稔り草や木の

花の色香も麗しく

實りも殊に豊やかに

地上の生物一切は

鼓腹撃壤神國の

眞善美愛の祥徴を

堅磐常磐に樂しまむ

あゝ惟神々々

御靈の恩頼を願ぎ奉る
ヨイトセー
ヨイトセ

三千世界の梅の花
一度に開く蓮華花

スメール山と聞えたる
自轉倒島の高原地

天教山に現れませる
木花姫の御守護

いよいよ茲に現はれて
暗に包みしスマの里

芽出度く日出の御代となり
神の光を朝夕に

歡ぎ樂しむ世とならむ
勇めよ勇め里人よ

ヨイトセー
幾千年も荒金の

土に埋もれ石となる
此楠の良材は

神の御代をば永久に
不變不動と獻る

嚴の恵の祥徴か
此楠の重量の

外に秀れて雄々しきは
萬古不動の神の代の

これ又珍の祥徴ぞ
思へば思へば有難や

村人勇みて曳いてくれ
ヨイトセー
ヨイトセ

此大木を引出す 御用に仕ふる人びとは

神の恵の深くして 身體一所怪我もせず

又草臥れぬ不思議さよ 神の守りは目のあたり

喜び勇みて曳いてくれ ヨーイトセー ヨーイトセ

此宮柱いや太く 雲をつき出て立つならば

千木勝男木はキラキラと 黄金の光輝きて

月の御國やフサの國 カラもヤマトも一時に

月日の如くに輝かむ あゝ勇ましや勇ましや

爺々も婆々も孫伴れて 夜を日について日の寄進

夜も休まぬ夜の寄進 人の心に晝夜の

區別も知らぬ天界の 花咲く春の如くなり

ヨーイトセー ヨーイトセ

伊太彦 天津御空に摩訶不思議 微妙の音楽聞え來る
高天原の靈國と 樂み深き天國の

エンゼル天人現はれて
高天原を地の上に

築き仕ふる此神業
助けむ爲に羽衣の

袖をば微風に翻し
壽ぎ祝ひ玉ふなり

地上に住める人々は
善言美詞の言靈に

救はれ曲の影もなく
心も一つ身も一つ

只何事も皇神の
心そのままに勤勉みて

世界に輝く神の宮
其御普請に仕へゆく

淨行毘舍や首陀其他
賤しき十二の氏族も

種々差別を撤廢し
水平線上に相立つて

三五教やバラモンの
神の御爲世の爲に

赤心盡す目出度さよ
かかる例は昔より

夢にも聞かぬ太平の
なみなみならぬ慶事なり

靑人草は云ふも更
此靈場に永久に

住みなれたりし狸々姫
其外百の御子達も

天國淨土の春に會ひ
目出度く元の棲處へと

無事に歸りし喜びは
天地開けし初めより

例も知らぬ次第なり
産土山を立出でて

清き心の玉國別の
珍の司に従ひて

漸く此處に月の國
音に名高きアツモスの

聖地に來り未曾有の
大神業に奉仕する

吾魂の歡びは
旱の稻田に夕立の
ヨーイヨーイ ヨーイトセ

降注ぎたる如くなり
ヨーイヨーイと曳いとくれ

力を揃へ聲合せ
ヨイヨイヨイと現はして

古今未曾有の神業に
誠心を現はして

仕へまつれる人々は
神の恵の幸ひて

身も壯健に其家は
月を重ねてよく榮え

御子孫曾孫つぎつぎに
父祖の神業を喜びて

いや永久に神徳を
尊みまつり末の世の

語り草かたぐさになすならむ 勇めよ勇め皆勇めいさい いさい みないさい

天地てんちに代る功績いさをしを 皆平等みなべうどうに立比たてくらべ

アヅモス山さんの聖場せいぢやうを 眞善美愛しんぜんびあいの根本こんぽんと

造つくらせ玉たまへ惟神かむながら 神かみに誓ちかひて伊太彦いたひこが

此このスマ人びとの諸々もろもろに 代りかはて願ねがひ奉たてまつる

ヨーイトセー ヨーイトセー

大小無數だいせうむすうの樟くす、檜ひのき、櫟けやき、松まつ、杉すぎ、檜等ならとうの良材りやうざいは一ヶ月いつかげつならずして作事場さくじばに無事ぶじ
持運もちほこばれた。而しかして只一人ただひとりの力ちからスリ傷きずを負おうた者ものも現あらはれなかつたのは全まったく神かみの
深ふかき御守おんまもりと一同感謝いちどうかんしゃの念ねんに驅かられ、猫ねこも杓子しゃくしも脛腰すねこしの立たつ者ものは、寢食しんじよくを忘わすれ、
熱狂ねつきやうして、宮普請みやぶしんにのみ心力しんりきを傾注けいちゆうした。諸人もろびとの丹精たんせいによつて、莊嚴さうごんなる宮殿きうてんは
東西とうざいに竝ならんで南向みなみむきに千木ちぎ高く建たち上あがつた。あゝ惟神かむながら靈幸たまちはへませ。

(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第五章 鎮祭（一五三〇）

眞善美を盡したる二棟の宮殿は玉國別以下一同の丹精によつて漸く完成し、東側の宮には大國常立大神を祀り、西の宮には大國彦命を鎮祭する事となつた。

玉國別は齋主として新調の祭服を身に着け、眞純彦以下の宣傳使及び主人側のバーチル夫婦竝にバラモンのチルテル以下里人一同と共に莊嚴なる遷宮式を舉行した。

大國常立尊の御神體としてはバーチルの家に古くより傳はりし直徑三尺三寸の瑪瑙の寶玉に神靈をとりかけ、大國彦命の御神體としてはチルテルが大切に保存せる直徑三寸許りの水晶の玉に神靈をとりかけ、これを奉齋する事となつた。

さうしてバーチルは東の宮の神主となり、サーベル姫は西の宮の神主となり、朝夕心身を清めて之に奉仕する事となつた。

玉國別の宣傳使は遷宮式の祝詞を歌に代へて歌ふ。

玉國別たまくにわけ 朝日輝あさひかがやくアヅモスの テーワ^ラジャーの森もりの中なか

大峽小峽おほがひをがひの木きを伐きりて 清きよき心こころの里人さとびとが

下津岩根したついはねに宮柱みやばしら 太ふとしく造つくり高天原たかあまはらに

千木高知ちぎたかしりて三五あななひの 皇大神すめおほかみやバラモンの

教司をしへつかさの神等かみたちを 齋いつきまつらむ今日けふの日は

天あまの岩戸いはとの開ひらくなる 生日いくひ足日たるひの生時いくときぞ

此世このよを造つくり固かためたる 大國常立おほくにとこたちおほみかみ大御神

天王星てんわうせいより下くだります 梵天ぼんでんたいしやくじざいてん帝釋自在天

大國彦おほくにひこの大神おほかみの 深ふかき恵めぐみを蒙かがぶりて

漸ちよつやくここに宮柱みやばしら 建たて了をはりたる目出度めでたさよ

高天原たかあまはらの靈國れいこくの 姿すがたを移うつすスメールの

山やまは世界せかいの救すくひ主ぬし 天地てんちの神かみも寄より集つどひ

世よを常久とこしへに守まもらむと 寄より來き仕つかふる目出度めでたさよ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令天地は覆るとも
元津御祖の大神が

此地に鎮まります限り
如何なる枉も來るべき

大三災の風水火
小三災の饑病戰

煙の如く霧の如く
朝の風や夕風の

吹き拂ふ如影もなく
安全無事の靈場と

彌永久に鎮まりて
世人を守り玉へかし

此世を造りし神直日
心も廣き大直日

只何事も人の世は
直日に見直し聞直し

身の過ちは宣り直す
善言美詞の神嘉言

朝な夕なに宣り上げて
總ての邪氣を拭き拂ひ

神の御國の歡樂を
この國人は永久に

味はひまつる有難さ
ア、惟神々々

此神床に永久に
鎮まりまして常暗の

世界を救ひ玉ひつつ
神の御稜威はラシューズダ

サハスラバリ・ブルナドワ`ヂヤ サルワサツトワブリヤダルシャナと

現あらはれ玉たまひて永久とこしへに 鎮しづまり居ゐませと願ねぎ奉まつる

この里さと人の誠ま心こころゆ 捧ささげまつりし海うみ河かはや

山野やまぬの種くさくさ々うましもの珍ま味あじ物もの 八や足たりの机つくゑに彌いや廣ひろく

彌いや高たからかに横よこ山やまの 姿すがたの如ごとく置おき足たらし

眞ま心こころこめて大神おほみ酒みや 大おほ神み饌け御み水み奉ひたる

此この二ふた柱はしら大おほ御み神かみ 青あを人ひと草くさの眞ま心こころを

完う全まらに委つ曲ばらに聞きし召めし 今日けふの喜よろこび永とこ久しへに

續つづかせ玉たまへ惟かむ神ながら 尊たふとき神かみの御おん前まへに

三あ五な教ひけつの神かむつ司かさ 玉たま國くに別わけが眞ま心こころを

籠こめて一いち同どうになり代かはり 畏かしこみ畏かしこみ願ねぎ奉まつる

ア、惟かむ神ながら々ながら々ながら 御み靈たま幸さちはひましませよ

祭さい典てんは無む事じに終しう了れうし、各おの聖せい地ちに處ところ狭せき迄まで群う集なり居ゐて撤てつ饌せんの供く物もつにより直な會ほらひの宴えん

を開き、神酒を頂き乍ら思ひ思ひに今日の盛事を祝した。其中重なる人の歌を一、
二左に述べて置く。

バーチル ♪ア、有難し有難し 天の岩戸は開きけり

暗の帳は上りけり 四邊の空気が何となく

いと爽かに風そよぐ 木々の梢は淑かに

自然の音楽相奏で 梢は舞踏を演じつつ

今日の盛事を祝ふなり 野邊に咲きぬる蓮花

香りも高く吹き送る 牡丹芍薬ダリヤ迄

艶をば競ひ香を送る 天国浄土も目のあたり

眺むる如き心地なり 朽ち果てたりし宮殿も

今は目出度く新まり 木の香新に鼻をつく

見るもの聞くもの一として 尊き神の御恵の

籠らせ玉はぬものはなし 父の犯せし罪科の

吾身わがみに巡めぐり來きたりてゆ

日夜にちやに心こころを痛いためつつ

清きよめの湖うみに浮うかび出いで

百ももの鱗うろくづ族あさ漁あさりつつ

心こころを慰なぐさめ居あたりしが

神かみの惠めぐみの引ひき合あはせ

例ためしもあらぬ颯し風けに遭あひ

猩しやうじやう々の島しまに助たすけられ

因いん縁ねん果いんぐわの巡めぐり合あひ

猩しやうじやう々の姫ひめとゆひめくりなく

鴛を鴦しの縁えにしを契ちぎりつつ

三み年とせを過すぐる曉あかつきに

救すくひの神かみの來きたりまし

吾われを助たすけて伊いづミなる

スマの館やかたに送おくりまし

今いま又また神かみの神かみ勅みことり

忝かたじけなみて伊いた太た彦ひこの

神かみの司つかさに一いち族ぞくを

これの神みやま山まに迎むかへられ

靈みたま魂まの親おや子こは喜よろこびて

スメール山ざんの神しんでん殿でんに

朝あさな夕ゆふなに仕つかへ行ゆく

嬉うれしき身みとはなりにけり

吾われは之これより比ひ丘くとなり

神かみの柱はしらとなる上うへは

父ふ祖その傳つたへし吾わが館やかた

その外ほか山さん野や田でん畑ばたを

天てん地ちの神かみに奉ほう還わんし

さとびよのおもちば
里人各持場をば
定めて自由じゆうに稲いねや麥むぎ

まめあはきび
豆粟黍は云いふも更さら
羊ひつじや豚ぶたの數かず限かぎり

し
知られぬ許ばかりの財ざい産さんを
皆里人みなさとびとの有いうとなし

ままちじやう
この儘地上の天國てんごくを
彌いや永とこ久しへに築きづきつつ

しんおん
その神恩しんおんに浴よくされよ
神かみに仕つかへし上うへからは

ぶつしつてき
物質ぶつしつてき的たからの寶たからをば
塵ちりもとどめず放ほり出いだし

かみ
神かみの惠めぐみに與あつりて
夫婦ふうふ親おや子は聖せい場ぢやうに

たの
樂たのしく仕つかへ奉まつるべし
諾うへなひ玉たまへ天あま津つかみ神かみ

くにつかみたちやほよろづ
國津神等八百萬
その生宮いきみやと現あれませる

ぐん
バラモン軍ぐんのキャプテンを
始はじめ奉まつりて部ぶ下かとます

もも
百の軍いくさも里人さとびとも
公こう平へい無む私しに吾わが寶たから

ぶんばい
分配ぶんばいなして穩おだかに
此世このよを送おくり玉たまへかし

あさひ
朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへだいち
假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
神かみの司つかさのバーチルが

言葉は永久に變らまじ

心安けく平らけく

思召されよと皇神の

御前に誓ひて宣りまつる

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

里人が原野を搜つて集め來りし四種の曼陀羅華を神しん殿でん處ところ狭せきまで供そなへまつり、

サーベル姫はその花の中心ちうしんに立つて曼陀羅華まんだらげを手にし、太鼓たいこ、羯鼓かっこ、笙しやう、篳篥ひちりき、

翼琴等の微妙の音樂の音ねに和わして歌うたを歌うたひ乍ながら舞まひ狂くるうた。

因ちなみに四種ししゆの曼陀羅華まんだらげとは、

一、マインダーラワ

二、マハーマインダーラワ

三、マンヂユシヤカ

四、マハーマンヂユシヤカ

を云ふ。さうして曼陀羅まんだらは適意花てきいくわ、成意花じやういくわ、圓花えんくわ、悅音花えつおんくわ、雜色花ざつしきくわ、天妙花てんめうくわとも

翻譯ほんやくされ、その色いろは赤あかに似にて黄色くわうしよくを帶おびたり、青あをに似にて紫むらさき、紫むらさきに似にて黒くろを帶おびた

り種々雑妙の色がある。マハーマンガラワは白華又は大白華となすものがある。マンジュシヤカは柔軟草、如意草、赤團華とするものもある。

サーベル姫 天火水地と結びたる 青赤白黄紫の

曼陀羅華をば大前に 處狭き迄奉り

天地の水火に叶ひたる 眞善美愛の花束を

里人等が慎みて 眞心捧げて奉る

皇大神は言靈の 天火水地を結びまし

地上の人は曼陀羅華 天火水地と結びたる

種々雑妙のこの花を 大宮前に立て竝べ

至誠を現はし奉る 皇大神よ大神よ

吾等を初め里人が 清き心を齎し

アヅモス山の靈場に 大宮柱太しりて

鎮まり居ます珍宮の 司と永遠に仕へませ

バーチル夫婦が眞心をここに現はし願ぎ奉る

吾等夫婦は大神の恵みの露に露ひて

咲き匂ひたる曼陀羅華 一度に開く花蓮

心の空に天界の平和と歡喜の國を建て

神の御爲世の爲に 三五教やバラモンの

一體不二の神教を 普く四方に宣べ傳へ

世人を救はせ玉へかし 三百三十三體の

此愛らしき猩々は 吾身に憑りし猩々姫

神の使の生みませる 天地の愛の珍の子と

憐れみ玉ひて永久に 身魂を守り平安に

この世を渡らせ玉へかし 執着心や世染をば

科戸の風に拂拭し 安の河原に垢離をとり

清淨無垢の魂となり 仕へまつらせ玉へかし

あゝ惟神々々 御靈の恩賴を願ぎまつる』

斯く歌ひ終り一同に拜禮し、數多の猩々に前後を守られて、一先づ元の館へ引返し村人一般に對し財産全部提供の準備をなすべく欣々として嬉しげに立ち歸る。
(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第六章 滿悅(一五三一)

大空は一點の雲翳もなく天津日の神は煌々としてアツモス山の靈地を照臨したまひ、梢を渡る夏風は颯々として清涼の氣をおくる。中空には無聲の音樂聞え渡り、芳香薰じ、地上には、諸々の樂器の一度に鳴り渡る聲、梢には百鳥の、千代の祥瑞を囀る美聲、天地人三才合一のこの瑞祥は、神前に備へまつれる曼陀羅華の妙色に現はれて居る。バラモン軍に永く仕へ、キャプテンの職にあつてキヨの關守を兼ね、相當に暴威を振ひたるチルテルは、其妻チルナ姫を初め、カンナ、ヘール其他の部下を率ゐて大宮の前に恭しく拜禮し、曼陀羅華を手捧げ、歌ひ

はじめた。

手ルテル 天は清淨地清淨 六根清淨懺悔の花の咲き満ちし

今日の喜び永久に 神の御前に謹みて

吾人共に村肝の 心の限り身の限り

感謝の涙に咽かへる 仰いで空を眺むれば

天津御空は蒼々と 際限もなく静に廣くいや高し

伏して地上を眺むれば 牡丹芍薬、ダリヤを初め

所まんだら咲き亂れ 雑色微妙の蝶は舞ひ

萬木萬草いや茂る 夏野に遊び戯るる

其瑞祥を目のあたり 眺むる吾こそ嬉しけれ

この聖場に群集る 人の面を眺むれば

老若男女の分ちなく 皆紅に面照りて

宛然天女の如くなり 天の造りし此天地

眞善美愛の實状を

いと廣らかに安らかに

示させたまふ尊さよ

朝日は輝く月は照る

星は閃めく天津空

北極星座の動きなく

七劍星が其周圍

朝な夕なに撓みなく

廻るが如く里人の

これの宮居に集まりて

歡ぎ樂しみ宮の邊を

廻りて遊ぶ目出たさよ

ハルナの都に現れませる

大黒主の神司

いかに心を配りまし

神の御國を地の上に

彌永久に築かむと

焦らせ給へど如何にして

三五教を守ります

神の功に及ばむや

遠き近きの隔てなく

神の御稜威を戀ひ慕ひ

集まり來る人の數

百千萬はまだ愚か

追々寄り來る潮の勢ひ

又靈界を調べれば

天男天女を初めとし

萬の人の神靈や

鳥獸とけだものや蟲むしけらの御靈みたまも先さきを争あらそひて

吾われもわしもと集つどひ來くる其光景そのくわうけいは高天原たかあまはらの

天あまの岩戸いはとの開ひらけし如ごとくあな面白おもしろやあなさやけをけ

目出度めでたさ嬉うれしさ胸むねにみち身みもたなしらに神業かむわざに

仕つかへまつるぞ有難ありがたきあゝ惟神かむながらかむながら々々

大國治立おほくにいはるたちおほみかみ大御神みとも御伴みまへの神かみと仕つかへます

大國彦おほくにひこの大御神おほかみの御前みまへに謹つつしみ畏かしこみて

バラモン軍ぐんのキャプテンが茲ここに赤心まごころ披瀝ひれきして

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる三千世界さんぜんせかいの梅うめの花はな

一度いちどに開ひらく曼陀羅華まんだらげ常世とこよの春はるの光景くわうけいを

拜をろがむ人ひとこそ目出度めでたけれ朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

テルモン山ざんは海うみとなりキヨメの湖うみは山やまとなり

アヅモス山ざんの聖場せいぢやうは雲間くもまに高たかく突つき出いでて

高く嶮しくなるとても

神に誓ひし此體

如何でか心を變へざらむ

恵ませたまへ大御神

従ひたまふ千萬の

司の神の御前に

畏み畏み願ぎまつる

畏み畏み願ぎまつる

アキスは又歌ひ出した。

アキス「バーチル館に幼少より

家の奴と仕へたる

天の岩戸もはやアキス

猩猩の御言もて

伊太彦司に付添ひつ

千里の浪を漕ぎ渡り

天にも地にもかけがへの

無き御子數多迎へたる

猩猩の小父が今此處で

三百三十三體の

御靈に代り宣り奉る

父の命は端なくも

バーチクさまに玉の緒の

惜しき命を奪はれて

後あとに残のこりし母ははと子こは 周章うろたへ騒さわぎ手ても足あしも
 出だす術すべもなき悲かなしさに 濱邊はまべの船ふねを寄よせ集あつめ
 夜陰やいんに乗じやつじて湖原うなばらを 恐おそれ乍ながらに逃にげて行ゆく
 サーガラ龍王りうわうの棲所すみかぞと 怖おそれられたる浮島うきしまに
 馴なれぬ艦權るかいを操あやつりて 命いのち辛から々たら辿たどりつき
 僅わづかに命いのちを支ささへつつ 悲かなしき月日つきひを送おくる折をり
 此世このよを救すくふ嚴御靈いづみたま 瑞みづの御靈みたまの開ひらきたる
 三五教あななひけつの神司かむつかさ 數多あまた現あらはれましまして
 父ちちの命みことと崇あがめたる バーチルさまを船ふねに乗のせ
 磯いそを離はなれて歸かへります 戀こひしき母ははは此様このさまを
 見みるより歎なげかせたまひつつ 二人ふたりの仲なかに生うまれたる
 人獸合にんじうがふいつ一の珍うづの子こを 喉のど締しめ殺ころし母ははの身みは
 湖底うなぞこ深く隠かくれましぬ 後あとに残のこりし一同いちどうは
 蚊かの鳴なく如ごとく騒さわぎ立たち 呼よべどかへせど此世このよへは

再びふたたび 歸りかへ 給たまはざる 悲運ひうんを 歎なげき居ゐたりしが

風かぜの 便たよりか 白浪しらなみの 彼方かなたに見みゆる 船ふねの 影かげ

浪なみを 蹴けた立てて 寄より來きたる 此れぞ 全まく 吾父わがちちの

心盡こころづくしの 御船みふねぞと 子等こらは 一同いちどうに 磯端いそばたに

垣かきを 造つくつて 眺め居をる 仁慈じんじの 神かみに 仕つかへたる

伊太彦司いたひこつかさが 悠々いゆういゆうと 數多あまたの 船ふねを 引ひき連つれて

吾等われら 一同いちどうを バーチルの 館やかたに 迎むかへ 歸かへらむと

手眞似てまねをもつて 示しめします 其その 嬉うれしさは 如何いか 許ばかり

天てんにも 登のぼる 心地こころちして 先さきを 争あそひ 救すくひの 船ふねに

身みを 跳をどらして 乘のり込こめば 思おもひ 寄よらぬ 般若湯はんにやたう

いと 馨かんばしき 其香そのかをり 樽たるの 鏡かがみを 打うち開あけて

吾等われらを 犒ねまひたまひつつ 靜しづかな 波なみに 眞帆まほを 揚あげ

湖中こちうに 棲すめる 魚族うろくづに 前後ぜんご 左右さいうを 守まもられて

スマの 港みなとに 安着あんちやくし 父ちちの 館やかたに 立たち 歸かへり

樂しき月日を送りつつ

又もや元の棲處へと

歸り來りし嬉しさよ

あゝ惟神々々

神の宮居もいと清く

いと麗しく建ち終り

嚴の御靈の大御神

バラモン帝釋自在天

彌永久に鎮まりて

イツミの國の國人を

守らせたまふ世となりぬ

吾等一同の眷族は

清淨無垢の魂を

捧げて仕へ奉り

アヅモス山の森林を

千代の棲處と相定め

常世の春を樂しまむ

あゝ惟神々々

神の聖地をおそれみて

里人男女の分ちなく

此森林に永久に棲む

吾等が兄弟よく愛し

決して殺す事勿れ

若しも過ちある時は

忽ち神に相祈り

誠め下し世の人の

眼厳しくさますべし

謹みたまへ里人よ

バラモン教の軍の君よ
水より出でし吾々一同
あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよ
茲に言擧げ奉る
猩猩彦や猩猩姫の

玉國別 久方の天津御空も地の上も
すみ渡りたる今日ぞ目出度き

眞純彦 打ち仰ぐますみの空に塵もなし
田鶴舞ひ遊ぶ影のみぞ見ゆ

三千彦 大神の珍の恵は天地に

いや三千彦の今日の嬉しさ

伊太彦いたひこアヅモスの山やまに登のぼりて四方よもの野のを
見みる吾心わがこころは廣ひろく安やすけし

デビス姫ひめ月つきも日ひも大空おほぞら高くたかテルモンの
館やかたを後あとにデビス姫ひめかな

バーチルひと人ひととなり又また猩猩じやうじやう々じやうとなりかはり
清淨しやうじやう無垢むくで神かみに仕つかへむ

サーベル姫ひめ 月つきも日ひも浪なみより出いでて浪なみに入る

神かみの惠めぐみの深ふかき湖みづうみ

テク 今いま迄までは心こころ曇くもりし吾われなれど

冴さえ渡わたりけり神かみの教をしへに

アンチー 大神おほかみの廣ひろき惠めぐみに離はなれ島しま

憂うれを三み歳とせの今け日ふの吾われかな

アキス 春はるも過すぎ夏なつの大おほ空そら澄すみ渡わたり

秋あき澄すみ渡わたる吾われの魂たましひ

カールいそばた磯端あるじに主きみの君まを待まち侘わびし

カールつかき司つかきの今け日ふの喜よろこび

チルテルはな花はなは散ちる月つきは御み空そらに照てるの國くに

すましてすまむスマせきもりの關せきもり守もり

チルナひめ姫ひめ曼まん陀だ羅らの華はなはいつ迄までチルナひめ姫ひめ

早はやく散ちれ散ちれ塵ちりと芥あくたは

カンナかむながら唯かむながら神かみの光ひかりの強つよくして

常とこよ夜よの闇やみも晴はれ渡わたりけり

へール[□]テルモンの山^{やま}は霞^{かす}みて見えねども

目^まのあたり見る神^{かみ}の御惠^{みめぐみ}[□]

斯^かく互^{たがひ}に遷宮式^{せんぐうしき}の祭典^{さいてん}を祝^{しゆく}し終^{をは}つて道々^{みちみち}口々^{くちぐち}に歌^{うた}を歌^{うた}ひながら、廣大^{くわうだい}なるバー
チルの館^{やかた}を指^さして歸^{かへ}り行く。漸^{やうや}く日^ひは西山^{せいざん}に春^{うすづ}きて黄昏^{たそがれ}の空^{くう}氣^きは四邊^{あたり}を壓^{あつ}した。
滿天^{まんてん}忽^{たちま}ち金銀^{きんぎん}の星光^{せいくわう}恆河^{こつが}の砂^{すな}の如^{ごと}く現^{あら}はれて、一行^{いつかう}が歡喜^{くわんぎ}の姿^{すがた}を默々^{もくもく}として瞰^{かん}下^か
して居^ゐる。アヅモス山^{さん}の峰^{みね}續^{つづ}き、ハールナ山^{さん}の中腹^{ちゅうぶく}にある寺院^{じいん}の梵鐘^{ぼんしやう}は、ポーン
ポーンと夕^{ゆふ}べの空^{くう}氣^きを壓^{あつ}して響^{ひび}き來^{きた}る。

(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第二篇

東山靈地^{アツモスれいち}

第七章 方便（一五三二）

新たに建てられたアツモス山の社の前には、アキス、カールにワードの役を命じおき、バーチルは玉國別一行其他と共に喜び勇んで、一先づ館へ歸る事となつた。スマの里人は老人少女を聖地に残し、玉國別一行を見送つて、バーチル館に従ひ行く。

元來スマの里は何れも山野田畠一切、バーチルの富豪に併呑され、里人は何れも小作人の境遇に甘んじてゐた。併し乍ら日歩み月進み星移るに従ひて、彼方此方に不平不満の聲が起り出し、ソシアリストやコミュニスト等が現はれて來た。中には極端なるマンモニストもあつて、僅かの財産を地底に埋匿し、吝嗇の限りを盡す小作人も現はれてゐた。然るに此度、アツモス山の御造營完了と共に、一切の資産を開放して郷民に萬遍なく分與する事となり、郷民は何れも歡喜して、リパブリックの建設者として、バーチル夫婦を、口を極めて賞揚する事となつた。俄にスマの里は憤嫉の聲なく、各和煦の色を顔面に湛へて、オプチーミストの安

住所となつた。

サーベル姫は村人の代表者を十数人膝元に集めて、一切の帳簿を取出し、快く之を手に渡し、自分は夫と共に永遠に、アヅモス山の大神に仕ふる事を約した。ここに又もや郷民の祝宴は盛大に開かれ、夫婦の萬歳を祝し合つた。

さて玉國別一行はバーチルの居間に請ぜられ、各歡を盡して、尊き神の御教を互に語り合ひつつ、嬉しく其日を過ぎした。

チルテル「玉國別様にお願ひがムいます。私も此通り菩提心を起し、一切の世染を捨て、惟神の大道を遵奉し奉る嬉しき身の上となりましたのも、全く貴師の御餘光でムいます。就ては宏遠微妙なる御教理も承はりたく、且又自分の歡びを衆生に分ち、神業の一端に奉仕したく存じて居りますから、三五教式の宣傳方法を御教示願ひたいものでムいます」

玉國別「それは誠に結構な思召、玉國別も歡喜の情に堪へませぬ。左様ならば吾々の大神様より直授された宣傳方法に就て、少し許り御傳へを致しませう。

神かみの恵めぐみを身みに稟うけて

世よ人を救すくひ助たすけむと

四よ方に教をしへを開ひらくなる

至し仁じん至し愛あいの神かむつ司かさ

たらむとすれば何時いつとても

心こころを安やすく穩おだかに

歡喜くわんきの情じやうを湛たたへつつ

蒼あを生ひとに打うち向むかひ

幽玄いうげん微妙びめうの道みちを説とけ

清淨しやうじやう無垢むくの靈れい地ちにて

座床ざしやうを造つくり身みを淨きよめ

塵ちりや芥あくたを排はい除じよして

汚けがれに染そまぬ衣きぬをつけ

心こころも身みをも清きよくして

始はじめて寶座ほうざに着ちやく席せきし

人ひとの尋たづねに從したがひて

極きはめて平易へいに道みちを説とけ

比ひ丘くや比ひ丘く尼にや信まめ徒ひとや

王侯わうこう貴人きじんさまさまの

前まへをも怖おぢず赤まこ心ころを

盡つくして微妙びめうの意義いぎを説とき

面めん貌ぼう聲せい色しよく和やはらげて

人ひとの身み魂たまをよく査しらべ

因いん縁ねん比た喩とえを敷ふえん衍して

天てん地ちの道だう理りを説ときさとせ

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

善言ぜんげん美詞びしの言こと靈たまを

一ひとり人も嫌きらふ者ものはない

もし聴衆の其中に

汝が説を攻撃し

或は非難するあれば

吾身を深く省みよ

神にかなはぬ言靈を

心の曲の汚れより

不知不識に發せるを

必ず覺悟し得るならむ

百千萬の敵とても

只一言の善言に

感じて忽ち強力の

神の味方となりぬべし

假令數萬の吾部下を

味方となして誇るとも

只一言の惡言に

感じて忽ち怨敵と

掌覆す如くなる

此眞諦を省みて

必ず過つ事勿れ

只何事も世の中は

すべて善事に宣り直し

愛の善をば能く保ち

信の眞をば能く悟り

而して後に世の人に

眞の道を説くならば

如何なる外道の曲人も

決して反くものでない

誠一つは世を救ふ

神かみの教をしえは目まのあたり

現あらはれ來きたる摩訶まか不思議ふしぎ

すべて天地てんちは言靈ことたまの

御水みいき火きに仍よりて創造さうざうされ

又また言靈ことたまの御水みいき火きにて

規則きそく正ただしく賑にぎはしく

治をさまり榮さかゆるものぞかし

あゝ惟かむながら神かむながら々々

眞善美愛しんぜんびあいの神かみの道みち

學まなばせ玉たまへバラモンの

軍いくさに仕つかへし諸人もろびとよ

玉國たまくに別の神かむつかさ司

心こころの岩戸いはとを押開おしひらき

茲ここに一言ひとこと宣まをり申まをす

あゝ惟かむながら神かむながら々々

神かみの授さつけし言靈ことたまの

嚴いづの伊吹いぶきぞ尊たふとけれ

旭あさひは照てる共曇ともくもる共とも

月つきは盈みつ共虧ともかくる共とも

大だい三さん災さいの來きたる共とも

神かみに受うけたる言靈ことたまを

清きよく涼すずしく宣のるならば

すべての災わざはひ忽たちまちに

雲くもを霞かすみと消きえ失うせむ

守まもらせ玉たまへ言靈ことたまの

善言美詞ぜんげんびしの太祝詞ふとのりと

心こころを清きよめ身みを淨きよめ

其行そのおこなひを清きよくして

嚴いづの言靈ことたま宣のたまるなれば

雲井くもゐに高たかき天界てんがいの

皇大神すめおほかみもエンゼルも

地上ちじやうに現あれます神々かみがみも

蒼生あをひとくせも草くさや木きも

其神徳そのしんとくを慕したひつつ

これをしへの教まもを守るべし

偉大ゐだいなる哉言靈かなことたまの

皇大神すめおほかみの御活動おはたらき

仰あふぎ敬うやまひ奉たてまつれ

仰あふぎ敬うやまひ奉たてまつれ

チルテル「バラモン教けうの神柱かむばしら

大黒主おほくろぬしに從したがひて

左手ゆんでにコラン捧さなげつつ

右手めでに劍つるぎを握にぎりしめ

折伏しやくふく攝受せつじゆの劍けんとして

外道げだうの道みちを辿たどりつつ

今迄いままで暮くらし來きたりしが

玉國たまくに別の師しの君きみに

誠まことの道みちを教をしへられ

布教ふけう傳道でんだうの方便ほうべんを

いと明あきかに授さづけられ

心こころの暗やみも晴はれ渡わたり

旭あさひの豊榮とよさか昇のぼる如ごと

身みも健すいかになりけり

いざ此上このうへは眞心まごころの

限かぎりを盡つくして愛善あいぜんの

徳を養ひ信眞の

覺りを開き詳細に

一切衆生を救濟し

天地の御子と生れたる

其本分を盡すべし

あゝ惟神々々

三五教を守ります

嚴の御靈や瑞御靈

玉照彦や玉照姫の

雄々しき聖き御柱に

從ひ奉り八十の國

八十の島々隈もなく

神の教の司とし

沐雨櫛風厭ひなく

神の御爲世の爲に

所在ベストを盡すべし

守らせ玉へ惟神

神の御前に赤心を

捧げて祈り奉る

アヅモス山の宮司

バーチル夫婦も今よりは

聖き尊き三五の

教を守り玉ひつつ

東の宮と西の宮

心に隔つる事もなく

いと忠實に朝夕に

仕へ玉はれ惟神

神の光に照されて

バラモン軍ぐんに仕つかへたる　　チルテル司つかさが願ねぎ奉まつる
あゝ惟かむながらかむながら神々々　　御靈みたまさきは幸まひませよら

カンナつかさ「キャプテンつかさの司つかさの君きみに従したがひて
吾われも進すすまむ神かみの大道おほぢへら

へールひさかた「久方ひさかたの天津御神あまつみかみの音信おとづれを
今目いままのあたり聞きくぞ尊たふときら

チルナ姫ひめ「背せの君きみは全まく人ひととなりましぬ
心こころに棲すめる曲まがのはなれてら

チルテル「わが魂はさまで悪しくは思はねど

寄りくる曲を防ぎかねつつ。

力なき吾魂も今は早や

千引の岩の動かずなりぬ

チルナ姫「背の君の珍の言靈聞こしより

心の曲も消え失せにけり

眞純彦「師の君の初めて宣らす言靈を

聞きし吾こそ嬉しかりけり

三千彦みちひこ 齋苑館立出いそやかたたちいで月日つきひ數重かずかさね

初めてはじ聞きしき吾師わがしの言葉ことば」

伊太彦いたひこ 一いちと言いへば十百千じふひやくせんを悟さとるてふ

身魂みたまならでは詮せんすべもなし。

一いち聞いてき直ただちに島しまに打渡うちわたり

功績いさをを立てたし猩々しやうじやうぶねかな舟哉ふねかな」

三千彦みちひこ すぐすに又鼻またはなをば高たかめ足許あしもとに

眼失まなびしなひ躓つまずくなゆめ」

伊太彦いたひこ 皇神すめかみの選えりに選えりたる吾魂わがたまは
いかでか汝なれに比くらぶべきやは

眞純彦ますみひこ うぬぼれて深谷川ふかたにがはに落おち込こむな
慢心まんしんすればつまつすぐに躓つまつく

伊太彦いたひこ 吾われとても誇ほこる心こころはなけれ共ども
魂たまはいそいそ笑あはみ榮さかえ來きて

デビス姫ひめ 何事なにごとも人ひとに先立さきだつ伊太彦いたひこの
神かみの使つかひのいとど畏かしこき

チルテル☐伊いた太た彦ひこの得意とくいや實げにも思おもふべし
獸けものの皮かは着きし人ひとを迎むかへて☐

カンナ☐獸けものとは云いへど此この世よの人ひと草くさに
優まさる靈みたまを持もてる尊たふとさ☐

へール☐かく迄までも人ひとの心こころの曇くもりしかと
思おもへばいとど悲かなしくなりぬ☐

アンチ☐アヅモスの山やまに棲すまへる鳥とり翼つばさ
人ひとにあらねど人ひとを見み下おろす。

ひとびと
人々の頭の上を悠々と
舞ひて遊べる鷹ぞ恨めし

バーチルなにごと何事も天地の神の御心に
任すまかは人の務めなるらむ

サーベル姫あめつち天地の神も諾ひ玉ふらむ
心清けこのひとびとき此人々を

テクあさゆふ朝夕によからぬ事のみ漁りつつ
暮しくら来りし吾ぞうたてき。

さり乍らなが めぐみ 恵も深きふか 大神おほかみ の
御手みて に救はれすく 勇むいさ 今日けふ かなふ
□

ワックス□ テルモン□ の山やま を立出たちい で今いま 此處ここ に

仇あだ と思おも ひし人ひと と竝なら びぬ。

仇あだ とのみ思おも ひし事こと は夢ゆめ となり

今いま は救すく ひの神かみ と見み る哉かな
□

エクス□ 相共あひとも に悪あ しき事こと のみ謀はか り合あ ひ

神かみ を汚けが せし事こと の悔くや しさ。

町人まちびと の前まへ に恥はぢ をば曝さら されて

尻叩しりたた かれし事こと ぞ恥はづ かし。

今日けふよりは心こころの駒こまを立直たてなほし
進すすみて行ゆかむ神かみの大道おほぢに〓

ヘルマン〓吾われも亦また善よからぬ友ともに誘いざなはれ

ワツクスを責せめし事ことの愚おろかさ。

三五あななひの神かみの司つかさを殺ころさむと

大海原おほうなばらに待まちし愚おろかさ。

皇神すめかみの嚴いづの力ちからにおぢ恐おそれ

今いまは全まく猫ねことなりけり〓

エル〓神館かむやかた小國をくに別の身み失うせしと

思おもひて世よび人とあざむ欺わきし吾われ。

くさぐさの罪を重ねし吾なれど

救ひ玉ひぬ誠の神は。

スメールの御山に清く現れませる

神の御稜威を仰ぐ尊さ。

いかならむ魔神の襲ひ來るとも

今日の心は千代に變へなむ

サーベル姫 吾こそは猩猩々姫の靈なり

玉國別に願言やせむ。

天王の宮の御跡の石蓋を

開けて龍王救ひ玉はれ

玉國別たまくにわけ 汝なが願諾ねがひづひまつり之これよりは

アヅモス山さんの神かみを救すくはむむ

かく互たがひに歌うたを取とりかはし、十二分じふにぶんの歡喜くわんきを盡つくし、玉國別たまくにわけは一同いちどうを従したがへ再びふたたび天王てんわうの古宮ふるみやの床下ゆかしたを調査てうさすべく、夜よの明あくるを待まつて進すすみ行ゆく事こととなつた。

(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録)

第八章 土蜘蛛つちぐも〔一五三三〕

玉國別たまくにわけの一行いっかうはバーチルの館やかたを立出たちいで、再びふたたびアヅモス山さんのもとの古社ふるやしろの趾あとに近ちか寄り見みれば猩々しやうじやう姫ひめの言葉ことばに違たがはず、五寸ごすん許ばかり上土うはつちをめぐつて見みると、長方形ちやうほうけいの石いし蓋ふたが現あらはれて來きた。

玉國別たまくにわけは先まづ石蓋いしふた取り除のぞきの祈願きぐわんを奏上そつじやうしたり。

「スメールの珍の聖地に、宮柱太しく建てて常久に、鎮まり居ますバラモンの、
教の御祖大國彦の御舎を、仕へまつりし古き趾の石蓋を、猩猩姫の願ひによりて、
心を清め身を淨め、珍の言靈宣り上げて、三千年の昔より、封じ置きたる玉手箱、
神の恵みを蒙りて、愈開き奉る。仰ぎ願はくは此神業に仕へまつる人々は、心正
しく清く直くして、神の靈に歸りし珍の御寶なれば、如何なる神の在すかは知ら
ねども必ず咎め罰め玉ふ事なく、いと安々と之の岩戸を開かせ玉へ。又これの岩
窟に忍び入りて神代ながらの祕事を疾く速かに探らせ玉へ。惟神皇大神の御前に
慎み敬ひ願ぎ奉る。」

一二三四五六七八九十百千萬、あゝ惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世」

と珍の宣り言唱へ上げ、忌鋤忌鋤を以て土をかき分け、洗ひ清めし金挺を岩の隙
間に押し込み、漸くにして廣き厚き岩蓋を取除いた。黒煙濛々として立昇り、少
時は咫尺も辨ぜざる如き慘澹たる光景であつた。折から吹き来る科戸の風に黒き
煙は何處ともなく散り失せて岩戸の入口は階段まで明かに見えて來た。

玉國別たまくにわけ 千早振ちはやぶる昔むかしながらの秘事ひめごとを
開ひらき初そめたる今朝けさぞ目め出で度たき

バーチルくづりう 九頭龍くづりうを彌常いやとこしへ久ひさに封ふうじたる
岩戸いはとも開ひらく今日けふの目め出で度たさ

サーベル姫ひめ 神代かみよより云いひつぎ語かたりつぎ來きたる
タクシヤ力龍王りうわうに會あはむ今日けふかな

伊太彦いたひこ 吾われは今いま此この岩窟いはやどの奥底おくそこを
探さぐり見みむとす許ゆるさせ玉たまへ

玉國別たまくにわけ 何事も先立たむとする伊太彦いたひこの

インクリネーション現はれにけりあら

伊太彦いたひこ 何事も人に先立ち進まむと

するは吾身のテーストなりけりわがみ

三千彦みちひこ 伊太彦の其ネーチュア現はれて

危き穴に進まむとぞするあやふ

伊太彦いたひこ 此れしきの岩窟探るは難からじ

朝飯前のメデオール力事ぞやあさめしまへ

玉國別は伊太彦を總取締となし、ワックス、エル二人を伴はしめ、一同を岩窟の入口に待たせ置き、長き綱の先に鈴をつけて穴の入口に掛けおき、危急の場合には此綱を引けば援兵に何人か来て呉れる様と頼み置き、數千年の祕密の鍵を探るべく蜘蛛の巣を拂ひ拂ひ階段をドンドンと下つて行く。不思議にも長き深き隧道は燐光燦爛として輝き、あまり足許の惱みを訴へない迄に明かつた。

三人はタクシヤカ龍王の幽閉所と聞えたる岩窟を天の數歌を歌ひ乍ら、或は下り或は上り、右に左に折り廻り乍ら足に任せて探り行く。俄にクワツと明るい處がある。近づき見れば直徑三尺許りの丸い茶褐色の不思議な物が隧道の眞中に横たはり、薄明い燈火を放射して居る。耳をすまして聞き居ればブーンブーンと不思議な聲が聞える。三人は少時茫然として此怪しき物體を眺めて居た。俄にブツブツと粥の煮える様な音が高く聞えて來た。

エル「おいワックス、此奴ア何でもモンスターに違ひない。此杖で一つポカんと一撃を加へたら如何だらうかな」

ワックス「待て待て、何が出よるか知れぬ。うっかり相手にならうものなら、そ

れこそ大變だたいへん」

伊太彦いたひこ「アハ、ハ、ハ、ハ、丁度ちやうどエルさまが牛うしに踏み潰つぶされた代物の様やうだな。ポツポツと湯氣ゆげが立つて居ゐる様やうだ。此こいつ奴おほかたア大方たの田野危平きへいが八疊敷はちでふじきを落おとして置おいたのかも知しれないぞ」

エル「曲津まがつの奴やつ、逸早いちはやくこんな處ところへ先走さきばしりをしやがつて、俺等おれたちの鞆丸きんたま、オツトドツコイ肝玉きもとまを潰つぶさうと企たくんで、失禮しつれい千萬せんばんな、吾々われわれの行路かうろを遮さへぎつてゐやがるのだらう。人觸ひとふるれば人ひとを斬きり、馬觸うまふるれば馬うまを斬きる程ていの英雄豪傑えいゆうがうけつ、エルさまは到底たうてい此儘ま差許さしゆるす事ことは出來できぬ。又また飽迄あくまで此こいつ奴おほかたを如何どうとかせなくては向側むかうへ渡わたる事ことが出來できぬぢやないか。のうワツクス、貴様きさまも随分ずいぶん横着わうぢやく者ものだつたが、此こいつ奴おほかたには閉口へいこうしたと見え沈黙ちんもくを守まもつてるぢやないか。モンスタおそーが恐おそろしい様やうな事ことで岩窟いはやの探險たんけんがどうして出來できるものか。もし伊太彦いたひこさま、此このモンスタおそーを私わたしに處分しょぶんさして下くださいませぬか」

伊太彦いたひこ「宜よろしい、お前まへの力ちからで一つ退散たいさんさせて見るのもよからう」
エル「そんなら退散たいさんさせて御覽ごらんに入れませう。大山鳴動たいざんめいどうして鼠ねずみ一匹いっぴきかも知しれませ

ぬぞ
』

と云ひ乍ら杖を眞向に振り翳し構へ腰になつて、エイヤと一聲、ウンと打つた。

忽ち怪物は黒い細長い足が數十本ニユーツと生え出し、丸い體を七八尺許りの中空に浮かしてガサリガサリと逃げ出した。よくよく見れば數千年劫を経たる穴蜘蛛が足を縮めてここに眠つて居たのであつた。

エル「アツハ、何だ、蜘蛛の親方奴、エルさまの御威勢に恐れ、長いコンパスを運轉させ、體を宙に浮べて雲を霞と逃げ失せやがった。イヒ、エ、エルさ

まの神力によつて「くも」なく退散仕り……後をも見ずににりにける……だ。お

いワックス、今度は何が出ても俺はもう構はぬから、お前の番だ、確りやり玉へ」

ワックス「この蜘蛛は燐の息を吸うて居ると見えて體迄が光つて居やがる。本

當に妙な事があるものだ。サア之から四邊に心を配り十二分の注意を拂つて進む

事にしよう。伊太彦様、貴方も随分狼狽者、否々何でも先鞭をつけるお方だと玉

國別さまが云つて居られたぢやありませんか。今度は貴方が率先して怪物退治を

やつて頂き度いものですな」

伊太彦「玉國別様のお伴をして居る時は、どうしても俺が先驅を勤めねばならぬ。併し乍ら今日は三人の総統者だから、チツト許り慎重の態度を守つてゐるのだ。まあエルさま、先走りとなつて噪いで下さい。まさかとなれば此伊太彦宣傳使がお助け申すから」

エル「へ、へ、へ、うまい事仰有いますワイ。何ですか、その足許は、膝坊主が大變活動してるぢやありませんか。急性恐怖病が起つたのでせう」

伊太彦「何、急性沈着病が勃發したのだ。決して心配は要らぬ。サア進んだり進んだり」

エル「何だかチツと許り寂寥の感に打たれて來ました。一つ歌を歌つて元氣をつけますから囃して下さい、頼みますよ」

ワックス「アハ、ハ、ハ、到頭エルの奴、生地を現はしやがつたな。空威張りの鞆丸潰しの大將奴、ウツフ、フ、フ」

エル「こりやこりやワックス馬鹿息子 オットドッコイこりや違つた」

善言美詞の此教

忘れて口を滑らせた

ワックスさまよチツト許り お腹が立つかは知らねども

知つてる通りの狼狽者 思はぬ口が滑りました

神の心に見直して 決して怒つちやなりませぬ

岩戸の口からドンドンと 限り知られぬ階段を

下りて又も上りつめ 右や左と屈曲し

漸くここに來て見れば パツと光るは摩訶不思議

合點の行かぬモンスター 一つ調べて見むものと

金剛杖をば振り翳し ウンと許りに打据うる

ポンと音して黒煙 鳥賊が墨をば吐く様に

四邊を眞黒々助に 包んで了つた可笑しさよ

暫く眺め居る間に 數多のコンパス附着して

怪體な體を中空に ヒヨロリ ヒヨロリと揺りつつ

前方さして逃げて行く 此奴あテツキリ蜘蛛の精

何處どこど々々迄までもおつついて 往生わうじやうさせねば措おかないぞ

此方こちらが命いのちをとらるるか むかう向方を往生わうじやうさしてやるか

二つふたの中うちの一つひとをば 選えらまにやならぬ今いまの破目はめ

梵天ぼんてん帝釋たいしやく自在じざいてん天 奥おくトドツコイ國くにの祖おや

國くに治立ちはるの大御神おほみかみ 何卒なにとぞエルに神力しんりきを

腕うでも撓たわわに與あたへませ 偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

伊太彦司いたひこつかさに従したがひて 初はじめて岩窟いはやの探險たんけんと

出掛でかけた吾々われわれ兩人りやうにんは 到底たうてい様やうす子が分わからない

如何いかなる枉まがの陷かんせい穢せいに 陷おちて命いのちを落おとすやら

今いまから案あんじ過すごされる あゝ惟かむながら神かむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ

戀慕れんぼして居ゐたデビス姫ひめが起居物たちゐもの腰こし淑しとやかに、袖そでにて赤あかい口くちを隠かくし乍ながら、稍やや伏ふし目勝しめち

斯かく歌うたひ乍ながら又またもや曲まがり角かどに着ついた。角かどを曲まがるや否いなやワツクスうつつの現うつを抜ぬかして

にスツクと立つて居る。エルは勢よく進む途端に、此女に衝突し、

エル「アイタ、こりや阿魔ツ女、往來の眞中に黙つて立てつて居やがるものだから、到頭俺の出齒をきつい目に打つて了つたぢやないか。これ見よ、此通り齒の間から黒い血がポトポトと流れてゐる。「悪い事致しました」と一言謝らぬかい。馬鹿だな」

女「ホ、貴方は狼狽者のエルさまぢやありませんか。晝の最中に大道を歩いては牛の尻に衝突し、又斯んな處で妾のお尻に衝突し、出齒を打つとは天下第一品のチヨカ助だな」

エル「ヤア、デビス姫様でムいましたか。腹の悪い、吾々を吃驚さそうと思つて、ソツと階段を下り、あの四辻から、ここへ先廻りして吃驚さす考へですな。本當に姫様も三千彦司の奥さまになつてから大變なお轉婆になりましたな。おいワツクス、貴様もこんな處で、改心したと云ふものの幾分か未練が残つて居るだらうから、一言怨みの數を陳列して姫様のお聞きに達したらどうだ。こんな好い機會は一生の間に又とは無いぞよ。俺が邪魔になるなら友達の誼で氣を利かしてやる。

モシ伊太彦さま、少しの間、控へて居りませうかな」

伊太彦「……………」

ワックス「これは、これは、デビス姫様、この恐ろしい岩窟内を女一人で探険と
は實に恐れ入りました。いや感心致しました。その健氣なお志を看破して此ワッ
クスは何時も心を悩めたのでムいますよ。三千彦様のお側近く膠の様子に引ついて
喜んで居らつしやるものだからお顔を見乍ら儘ならず、丸で寫眞を見て居る様だ
つたが、今日は一言位は言葉をかけて下さるでせうね」

女「ホ、これワックスさま、貴方はそこ迄妾を本當に思つて下さるのですか。
本當ならば嬉しいワ」

ワックス「酒も飲まずに、どうして男が女を捉まへて嘘が云へませう。心底から
【ホ】の字と【レ】の字だから、ここ迄實の所は跟いて來たのですよ。チツトは
男の心にも同情を寄せて貰つても餘り罰が當りますまいがな」

エル「アハ、おい、ワックス、そこだ、そこだ、正念場だ、確りやれ、ワ
ツシヨ、ワツシヨ」

女をんな「ホ、々、あのエルさまの鞆丸漬きんたまつがしさま、犬いぬか何なんその様やうに喉けしをかけなくても宜いいぢやありませんか」

エル「コレ、姫ひめさま、一生いっしやうけんめい懸命けんめいですよ。友人いうじんの戀こひを叶かなへてやり度たいばかりに骨ほねを折をつて居ゐるので、餘あまり憎にくうはありますまい。貴女あなただつてこんな處ところに一人ひとり待つて居ゐる位くらいだから萬更まんざいワックスがお嫌きらひでない事ことは百ひやくも承知しやうち、千せんも合點がつてんの私わたし、隨ずい分ぶん氣きを利きかして上あげますよ。併しかし乍ながら伊太彦いたひこさまがチツト許ばかり煙けぶたうなつて來きた。モシ伊太彦いたひこさま、表おもては表おもて、裏うらは裏うら、滅多めつたに三千彦みちひこさまの奥おくさまをワックスが取とらうと云いふのぢやないから、握手位あくしゆべいは大目おほめに見みてやつて下くださるでせうな」

伊太彦いたひこ「オイ、兩人りやうにん、此女このをんなに指一本ゆびいっぽんでも觸さへる事ことはならぬぞ。大變たいへんな事ことが出來しゅつ來たいするから」

エル「切さても切さても融通ゆうつうの利きかぬ唐變木たうへんぼくだな。おいワックス、俺おれが三千彦みちひこさまに辨解べんかいをしてやるから一寸形式ちよつとけいしきだけ握手あくしゆやつたら如何どうだ」

女をんな「もし、エルさま、ワックスさまの代理だいにとして貴方あなたと握手あくしゆしようぢやありませんか、握手あくしゆしたと云いつても決けつして心こころは貴方あなたに移うつしませぬよ」

エル「おいワックス、俺が代理權を執行しても滅多に姦通の訴訟は起さないだらうな」

ワックス「うん」

エル「ハ、ア、此奴、割とは氣の弱い奴だ。恥かしいと見えるな。それでは此エ
ルが暫く辨理公使を勤めてやらう。サア、デビスさま、お手を出して御覽」

女「はい、有難うムいます。サア貴方のお手をズツと伸ばして下さい」

エル「假令代理權にもせよ、こんなナイスに手を握られるのはチツト氣分が悪い
……事は無いワイ。エへ、おい、ワックス、すみませぬな。必ず氣を悪うし
て下さるな、伊太彦さま、何卒ここは宣傳使のお情を以て大目に見て下さい。エ
ツへ、へ、へ、へ」

と嬉し相に笑ひ乍らグツと手をつき出した。女はエルの手を握るや否や赤い唇へ
ペタリと當てたと思ふ途端、エルはキヤツと悲鳴を上げ其場に倒れて了つた。女
は忽ち般若の様な面になり、

女「ケラケラケラケラケラ、俺が折角休んでる處を金剛杖で頭を殴りやがったか

ら其敵討だ、イツヒ、そのかたきうち、□
と腮をしやくる途端に又もとの大蜘蛛となり數限りもなきコンパスをニユツと現
はし七八尺上の方に體を浮してノソリノソリと奥を目蒐けて這うて行く。伊太彦
は直に近寄つてエルの傷所に息を吹きかけ天の數歌を歌ひ上げた。半時許り經つ
てエルは漸く正氣づき、痛さを堪へ乍ら意氣消沈の態で二人の後に従ひおづおづ
し乍ら進み行く。

(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第九章 夜光玉やくわつのだま (一五三四)

エルは怪物に肝玉を取られ、色青冷め、臆病風に誘はれて、そろそろ慄ひ出した。
た。

ワックス「オイ、エルの奴、些と確りせぬかい、鞆丸を提げた一人前の男が、蜘蛛

蜘蛛の化物位に驚いて、どうして此探險が出来ようか。今迄俺達が所在悪業を盡した罪を償ふ爲に今度は拔群の手柄を現はさにやならぬぢやないか、本當に腰拔ぢやなア」

エル「さう叱るものぢやないワ、今迄の俺ならもつと勇氣を出すのぢやけれど、ブラ下げる鞆丸が無くなつて居るのぢやから、サウ注文通りにゆかないワ。そこは一つ同情して呉れないと困るぢやないか」

ワックス「何だ、その間拔た面は、僅の顔面に、免役地や、未開墾地や、荒蕪地が澤山現はれと思へば矢張り間に合はぬ代物だつたワイ。モシ伊太彦さま此んな奴、これから奥へ連れて行かうものなら、吾々の迷惑ですから、此處から一層歸してやつたらどうでせうか」

伊太彦「それも好からう。サア エル是から免役だ。トツトと歸つたら好からうぞ」

エル「ハイ有難う。そんなら何卒、入口迄送つて下さいますか」
伊太彦「そいつは些と困つたなア」

ワックス「オイ エル確りせぬかい、人は心の持ちやう一つだ。サア一人歸つたがよからう。此金剛杖一本あれば大丈夫だから」

エル「そんなら仕方がない、三人の中間になつて跟いて行く事にしよう」

ワックス「ハ、ア、たうと屁古垂れやがつたな。そんなら、伊太彦さま、悪にも強けりや善にも強い此ワックスが先頭に立ちませう、こいつは面白い」

と、四股踏み乍ら、燐光に光る岩窟の隧道を、一歩々々探るやうにして進み入る。

向の方から二三個の光つた玉が地上三尺許りの所を浮いたやうに此方に向つて進

んで来る。よくよく見ればその青白い玉の中には、嫌らしい顔がハツキリと現は

れて居る。エルは腰を屈め、ワックスの背に顔を當て乍ら、足もワナワナ跟いて

行く。青白い火團は強大なる音響と共に三個一度にワックスの一二間前の所で爆

發した。エルはキヤツと叫んでワックスの肩を掴んだ儘倒れた。止を得ずワック

スも其場にドンと倒れて仕舞つた。

伊太彦「オイ、ワックスさま、エルさま、起きた起きた、敵は粉碎の厄に遭つて

消え失せて仕舞つた。もう大丈夫だ。神様の御威光に怖れ脆くも滅亡したと見え

る、アハ、ハ、ハ、

ワックス「これしきの事に驚くワックスぢやありませんが、エルの奴人の首筋を掴んだまま倒れやがったものだから、可惜勇士も共倒れの厄に遭ひました。オイ、エル確りしやがらぬか」

エル「イヤもう確りする。哥兄お前確りして居て呉れよ。お前と伊太彦さまとさへ強ければ大丈夫だからなア」

ワックス「何と云うても數千年來密閉されてあつた魔の岩窟だから、種々の奇怪千萬な珍事が勃發するのは覺悟の前だ。サア行かう、タクシヤ力龍王に對し吾々は赦免のお使だから、さう無暗に惡魔が俺達を困める筈がない。エルが怪物に手を噛まれたのも矢張りエルが悪いのだ、弄はぬ蜂は螫さぬからなア。サア一つ機嫌を直して宣傳歌でも歌つて元氣をつけようぢやないか。俺が歌ふから後から共節について來い。何だか何處ともなしに氣分の好い、事はない魔の岩窟だ。

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

岩窟いはやの蜘蛛くもは化ばけるとも 何かなに怖おそれむ三五あななひの

神かみの使つかひと現あらはれし 伊太彦司いたひこつかさを始はじめとし

ワックス、エルみはしらの三柱さんせんせかいだ 三千世界そのあひだの其間

アヅモス山さんの底津根そこつねに 封ふうじ込こまれた龍王りうわうの

罪つみをば赦ゆるし救すくひ上げ 尊たふとき神かみの御使みつかひと

なさむがたきために來りけり 假令たとへ如何いかなる怪物くわいぶつが

雲霞うんかの如ごとく潛ひそむとも 神かみの力ちからを身みに浴あびて

進すすむ吾身わがみは金剛こんがう不壞ふゑ 如意にょいの寶珠ほつしゆの玉たまなるぞ

水みづに溺おぼれず火ひに焼やけず 錆さびず腐くさらず曇くもらずに

幾萬年いくまんねんの後のち迄までも 天地てんちの寶たからと光ひかりゆく

來きたれよ來きたれ曲津神まがつかみ 蜘蛛くもも蛙かはづも蟲族むしけらも

神力しんりきむさう無雙むさうの吾々われわれに 手向てむかふ事ことは出で來きよまい

今現いまあらはれた三みつの玉たま 怪あやしき面つらを晒さらしつ

吾等われらが前まへに進すすみ來きて 木こつ端は端みぢん微塵みぢんに粉ふん碎さいし

煙けぶりと消きえし哀あはれさよ 吾わが神力しんりきは此この通とほり

岩いは窟やに潜ひそむ曲まが神かみよ 吾わが言こと靈たまを聞ききしめて

決けつして無ぶ禮れいをすゝるでない 洒しやれ落れた事ことをば致いたすなら

決けつして許ゆるしはせぬ程ほどに ワツクスさまの身み魂たまには

鬼おにも大を蛇ろちも狼おほも ライオン迄までも棲すんで居ゐる

さうかと思おもへば天あめ地つちを 完う全まに委つ曲ばらに固かためなし

造つくりたまひし大おほ御み祖おや 尊たふとき神かみが神かむ集つとひ

無むげん限げんの神しん力りき輝かがか 控ひかへてムこるぞ氣きをつけよ

あゝ惟かむながらかむ々ながら々ながら 息いきが塞ふさがりそになつた

伊いた太ひ彦こつ司かさよ今いま此こ處こで 一ち寸よつと休きう息そく仕かまつり

天あま津つ祝のり詞とや神かみ言ことを 奏そう上じやうなして岩いは窟やどの

妖えう氣きを拂はらひ参まゐりませう あゝ惟かむながらかむ々ながら々ながら

叶かなはぬ時ときの神かみ頼だのみ 誠まことに濟すまぬと知しり乍ながら

斯かうなりやもはや仕し様やうがない 此こ處こで一いつ服ぶく仕かまつる

伊太彦一行は又もや隧道をドンドンと下り行く。其處には雷の如き音が聞えて居る。八テ不思議と、一町許り又平坦な隧道を下つて行くと、相當に廣い河があつて岩から出て岩に吸収さるる如く氷の如き冷たい水が流れて居る。三人は流れを渡つて向うへ着いた。此處には大小無数の色々の形をした岩が、キラキラ光つて立つて居る。さうして何處ともなしに岩の隙間から明がさして居るのは一つの不思議である。八テ不思議と三人は四邊を見廻せば、鐘乳石の一丈も有らうといふ立柱の上に、夜光の玉が輝いて居るのが目についた。伊太彦は此處にて天津祝詞を奏上し、神慮を伺つて見た。神示に依れば此玉は夜光の玉であつて、夕クシヤカ龍王が寶物である。されど此玉を彼に持たせ置く時は、再び天地の間に跋扈跳梁して風水火の天災を誘起するをもつて月照彦の神がこれを取り上げ、此處に安置しおき、岩窟の底深く龍王を封じ置かれたとの事であつた。さうして此玉は伊太彦が自ら持ち歸り玉國別に渡せとの神示である。伊太彦は大に喜び、種々と工夫を凝らして其玉を手に入れ恭しく懷に納め、又もや天の數歌を歌ひながら、地底の岩窟をさして際限もなく進み行く。懷に藏せし玉の光によつて地底の岩窟

も明くなり、崎嶇たる、或は細く、或は狭き岩穴を潜つて最低の岩窟についた。
此處には岩蓋が施して、タクシヤ力龍王、即ち九頭龍が堅く封じ込めてあつた。
伊太彦は佇立して神示を宣り傳へたり。

神代の昔高天にて 天地の主と現れませる

大國常立大神は 宇宙萬有造りなし

神の形の生宮を 最後に造りなさむとて

天足の彦や胞場姫の 珍の御子をば生みたまふ

かかる所へ天界の 海王星より現はれし

汝タクシヤ力龍王は 神の御國を汚さむと

胞場の身魂に憑依して 神の教に背かしめ

蒼生草を悉く 罪の奴隸と汚したる

惡逆無道を矯めむとて 皇大神の勅もて

月照彦の大神は 汝を此處に封じまし

世よの禍わざはひを除のぞかれぬ

靈みたまの邪氣じやきが世よに残のこり

曲鬼まがおに數多あまた現あらはれて

汚けがし曇くもらす果敢はかなさよ

嚴いづの御靈みたまの大御神おほみかみ

千座ちくらの置戸おきどを負おひたまひ

宿ゆるして地上ちじやうに救すくひ上げ

なさせたまはむ思召おほしめし

吾わが宣のり傳つたふ言ことの葉はを

喜よび仰あふぎ聞きくならば

善惡ぜんあく邪正じやせいの分わかれ際ぎは

申まをさせたまへ惟神かむながら

茲ここに誠まことを述のべ傳つたふ

七なな八や九このつ十たり百も千ち

さはさりながらタクシャカの

八岐大蛇やまたをろちや醜狼しこぎつね

神かみの造つくりし御國みくにをば

此世このよの曲まがを清きよめむと

瑞みづの御靈みたまの大神おほかみは

汝なんぢが犯をかせし罪科つみとがを

尊たふとき神かみの御使みつかひと

汝なんぢタクシャカ龍王りうわうよ

心こころの底そこより悔悔くわいごして

今いまこそ汝なんぢを救すくふべし

完全うまらに委曲つばらに復命かへりごと

神かみの御言みことを蒙かうむりて

一ひと二ふた三み四よ五いつ六むつ

萬よろづの神かみはアツモスの

此聖場に集まりて

三千世界を水晶の

世に立直し天地の

一切衆生を救ひます

畏き御世となりけるぞ

あゝ惟神々々

此處に伊太彦現はれて

汝が清き返答まつ

と宣り終れば、タクシヤカ龍王は、見るも怖ろしき九頭一體の巨軀を現はし、各
二枚の舌を吐き出し乍ら、口許から、青、赤、紫、白、黄、橄欖色などの煙を盛
んに吐き出し、忽ち白髮赤面の老人となり、赤色の衣を全身に纏ひ、岩窟の戸を
パツと開いて伊太彦の前に進み恭しく目禮しながら、歌をもつてこれに答へた。

タクシヤカ 三千年の古より

月照彦の大神に

押し込められし吾こそは

タクシヤカ龍王魔の頭

暴風起こし火を放ち

豪雨を降らして天地を

自由自在に亂したる

吾は悪魔の靈ぞや

罪障深き吾こそは 八千萬劫の末迄も
 常暗なせる岩窟に 捨てられ苦しむものなりと
 覺悟を極め居たりしが 茲に一陽來復し
 仁慈の神の御恵に 再び吾を世に出し
 救はむ爲の御使 謹み感謝し奉る
 いざ此上は一日も 早く地上に救はれて
 天地の陽氣を調節し 蒼生草や鳥獸
 草木の末に至る迄 神のまにまに守るべし
 救はせたまへ神司 今迄犯せし罪を悔い
 茲に至誠を吐露して 改心誓ひ奉る
 あゝ惟神々々 御靈の恩頼を給へかし

と言葉も爽かに答へた。伊太彦は、

伊太彦いたひこ「タクシヤカの神かみは心こころを改あらためて

服まつろふと云いひし言ことの葉は尊たふとき。

いざさらば早はやく此この場ばを出いでまして

登のぼらせたまへ地つちの表おもてに」

タクシヤカ「有ありがた難はなし花はな咲さく春はるに廻めぐり會あひ

君きみに遇あひたる今け日ふの嬉うれしさ。

今いま迄までの悪あしき行おこな改あらためて

誠まこと一ひとつに神かみに仕つかへむ」

伊太彦いたひこ「此この頃ころの知しる邊べなしとも地ちの上うへに

因ゆかり縁かりありせば安やすくかへらせ」

斯く互に歌を交換し、タクシヤカ龍王を従へ、ワツクス、エルの兩人に先頭を
させ乍ら、隧道を、或は登り、或は下り、左右に屈曲し乍ら漸くにして、元の入
口に登りついた。

(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第一〇章 玉國(一五三五)

伊太彦司に導かれ 三千年の幽閉を

ヤツと免れて千仞の 地底の闇より登り來る

タクシヤカ龍王は人體と 變化の術を使ひつつ

满面笑を相湛へ アヅモス山の靈場の

神の祭りし其前に 岩戸の階段登りつつ

天にも昇る心地して 現はれ出でし尊さよ

玉國別の一行は 伊太彦司の功績を

口を極めて讚め乍ら タクシヤ力龍王に打向ひ

言葉優く宣らす様。

玉國別 國常立の大御神 豊國姫の大神の

開かせ玉ふ三五の 教の道の宣傳使

玉國別の神司 神の御言を蒙りて

ハルナの都に出でてゆく 其途すがら皇神の

仕組の絲に操られ 心も身をもスマの里

アヅモス山に来て見れば 三千年の其昔

月照彦の大神が 此世を安く治めむと

祕めおかれたる汝が靈 救ひ助けむ時は來ぬ

吾れも汝が勇ましく 深き罪をば赦されて

ここに姿を現はせる 其光景を打ながめ

歡喜くわんきの涙なみだにたへかねつ 思おもはず知しらず袖そで絞しぼる
あゝ惟かむながら神々々かむながら タクシヤカ龍王りゅうわう聞きこし召めせ
此世このよの泥どろをすすがむと 現あらはれ玉たまひし埴安はにやすの
彦命ひこのみことや埴安はにやす姫ひめは 巖いづと瑞みづとの神柱かむばしら
經たてと緯よことの經綸けいりんを 始はじめ玉たまひし上うへからは
水みづも洩もらさぬ神かみの國くに 汝なれも今いまより御心みこころを
清きよく正ただしく持もち玉たまへ 元もとつ御祖みおやの大神おほかみの
大神業だいしんげふに仕つかへませ 三千年さんぜんねんの其間そのあひだ
地底ちていに潛ひそみ玉たまひたる 苦心くしんを察さつし奉たてまつる

タクシヤカ龍王りゅうわうは久ひさし振ぶりにて地上ちじやうの光明くわうみやうに浴よくし、又また珍めづらしき人ひとの顔かほや四邊あたりの樹じゆ
木もくの青々あをあをとして茂しげり榮さかゆる光景くわうけいを眺ながめ歡喜くわんきに堪たへず、歌うたを以もつて玉國たまくに別に答こたへたり。

吾われは八大龍王はちだいりゅうわうの 司つかさと聞きこえしタクシヤカの

九頭兩舌の惡神ぞ 一度眼を光らせば

萬木萬草皆萎み 一度聲を發すれば

山野河海も動搖し さすが貴き大神も

いとど惱ませ玉ひつつ 神力無雙のエンゼルと

現はれ玉ひし月照彦の 神の命が天降り

有無を言はせず言靈の 伊吹に吾を靈縛し

アヅモス山の地の底に 今迄封じ玉ひけり

かくなる上は吾とても いかでか惡を好まむや

仁慈無限の大神の 大御心を心とし

蒼生や草や木の 片葉の露に至る迄

心を盡し身を盡し いと懇に守るべし

吾の寶と祕めおきし 夜光の玉は伊太彦が

懐深く納めまし 今や此場に現れましぬ

タクシヤ力龍王が改心の 至誠を顯す其爲に

風水火災を自由にせし

此寶玉を獻る

何卒受けさせ玉へかし

旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は破るとも

一旦神に誓ひたる

吾言靈は動かまじ

諾ひ玉へ惟神

玉國別の御前に

謹み敬ひ願ぎまつる

玉國別 世を紊す八岐大蛇の祖神と

聞ききたる龍神は汝なりしか。

面白し心の底より改めて

玉を還せし汝は神なり。

つゆ霏偽り持たぬ言の葉に

吾も嬉しく玉を受けなむ。

伊太彦いたひこのをしへ教司つかさは大神おほかみの

神業みわざに清きよく仕つかへ了おへぬるら

伊太彦いたひこ「吾身わがみ魂弱たまよわく甲斐かひなく力ちからなく

神かみのまにまに勤つとめ了おほせしら

ワックス「伊太彦いたひこの司つかさのあと後にしたが従したがひて

さも怖おそろしき夢ゆめを見みし哉かな。

さり乍ながら今いまの喜よろこび見みるにつけ

思おもはず知しらず心勇こころいさみぬら

エル「思はざる醜の魔神にさへられて

肝潰したる事の愚さ。

さり乍ら伊太彦司と諸共に

無事に歸りし事ぞ嬉しき

眞純彦「伊太彦は心おちぬ人とのみ

思ひし事の恥しき哉

三千彦「匏屑も間に合ふ時のあるものと

聞きし言葉の思ひ出されぬ。

言靈の濁る男とさげすむな

吾も幾度擲掬れたる身よ

伊太彦いたひこ 惟神かむながらとは言いひ乍ながら妹いもを連つれ
進すすみ行ゆく身みを羨うらやましく思おもへばら

デビス姫ひめ 伊太彦いたひこの教司をしへつかさの功績いさをしは
岩戸いはと開ひらきの業わざに優まされるら

バーチルむかし 昔むかしより魔まの隠かくれしと傳つたへたる
此この神山かみやまの岩戸いはと開ひらきぬら

サーベル姫ひめ 斯かく迄までも靈みたまの清きよき神かみますと
吾われは夢ゆめにも思おもはざりけり。

猩しやうじやう々のひめ姫のみこと命にをし教へられ
汝なれをむか迎へしけふ今日のうれ嬉しさ
』

タクシヤカいま『今よりはしやうじやうおきな猩々翁とな名をかへて
これのみやま神山になが永くつか仕へむ
』

玉たまく國くに別わけ『ち千代やち八千代よち萬代よろづまでもこの此宮みやに
いとやす安らつかけくたま仕へ玉たまはれ
』

チルテルいぶ『訝あはかししやうじやうや猩々ひこのしやうじやうひめ彦ひこや猩々しやうじやうひめ姫
猩々しやうじやうおきな翁あはのあら現はれむとは。

九頭龍の醜の魔神と聞きぬれど

汝の姿は神にましけり』

斯く歌ふ所へ、大地俄に震動して、キヨメの湖の波立狂ひ、湖はパツと二つに開いて、中より、さも怖ろしきサーガラ龍王、七八才の乙女を背に乗せ乍ら、スマの濱邊に浮み出で、忽ち老媪の姿となり、愛らしき幼兒を抱へ、霧に包まれ乍ら、中空を翔つて、タクシャ力龍王が前に現はれ來り、

サーガラ『三千年の悩み忍びて目出度くも

吾背の君は世に出でにけり。

此御子は吾身魂より生れ出でし

如意の寶珠の化身なりけり』

タクシヤカこひした 戀慕なれ 汝みこと が命めぐ に廻り會あひ

嬉うれしさ胸むねに三千年みちとせの今日けふ。

玉國たまくにの神かみの司つかさや諸人もろびとに

救すくはれ神かみの許ゆるしうけけりに

サーガラな 汝みことが命世いに出ませば吾われも亦また

人ひとの姿すがたとなりて仕つかへむ。

玉國たまくにの別わけの司つかさよ諸人もろびとよ

憐あはれみ玉たまへこれの夫婦ふうふをに

玉國たまくに別わけ 昔むかしより縁えにしの深ふかき夫婦めをとづれ

いや永とこしへ久まに世よを守まもりませに

サーガラ龍王は、脇に抱へし七八才許りの乙女を地に下し、夫婦が互ひに水火を吹きかけた。忽ち乙女は如意寶珠の玉と變じた。サーガラ龍王は押戴き、

サーガラ「此玉は朝な夕なに抱きてし

如意の寶珠よ君に捧げむ」

玉國別「玉國別神の命と名を負ひし

吾は二つの玉を得にけり。

此寶二つ揃うて手に入らば

いかで恐れむ大黒主を」

眞純彦「師の君の御名は今こそ知られけり

玉守別たまもりわけと宣のり直なほしませせ

三千彦みちひこ 玉守別たまもりわけならで玉取別たまとりわけ神と
宣のり直なほしませ吾師わがしの君きみよ

玉國別たまくにわけ 國魂くにたまを右みぎと左ひだりに受うけし身みは
玉國別たまくにわけと名な乗のるこそよき

伊太彦いたひこ 肝腎かんじんの玉たまは吾師わがしの物ものとなり
指ゆびかみ切きつて伊太彦いたひこの吾われ

デビス姫ひめ 〇 汝なれはなぜ玉取別たまとりわけと名乗ならざる

伊太彦司いたひこつかさの名なこそ悪あしけれ 〇

伊太彦いたひこ 〇 今いまとなり名なを宣直のりなほす術すべもなし

神かみの依よさしの稱となへなりせば 〇

眞純彦ますみひこ 〇 因縁いんねんの靈々みたまみたまの御用ごようをば

させると神かみの教をしへなりけり。

言靈ことたまの眞純ますみの彦ひこの名なを負おふも

魂たまの濁にごらばいかにとやせむ。

吾われも亦また心こころの魂たまを研みがき上げ

吾師わがしの君きみにあやかりて見みむ 〇

これよりタクシャカ龍王は、人體に變化し、猩々翁となり、サーガラ龍王は猩々媪となり、珍しき果物の酒を作り、朝夕神前に獻じて、神慮を慰め、自分の罪を謝する事となつた。バーチル夫婦は二つの宮の宮司として、永久に仕へ、子孫繁榮し、神の柱と世に敬はれた。又バラモンのチルテル夫婦はバーチルの館の一隅に居を構へ、スマの里の里庄となり厚く神に仕へて、村民を愛撫し、部下はカナ、ヘールを家僕とし、其他は何れも里人の列に加へ、美はしく新しき村を造つて、餘生を楽しく送り、其靈は天國に至つて、天人の列に加はり、アヅモス山の聖地を守る事となつた。

（大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 松村眞澄録）

第一章 法螺貝（一五三六）

玉國別一行はバーチル、チルテル其外一同に暇を告げ山野湖河を渡りハルナの

都みやこを指さして進すすむ事こととなつた。別わかれを惜をしみてバーチル以下いかいちどう一同いっどうは袖そでに縋すがりつき涙なみだを湛たたへて別離わかれの歌うたを歌うたふ。

バーチル□神かみの任よさしの宣傳使せんでんし 清きよき身魂みたまの玉國別たまくにわけは

天津御神あまつみかみや國津神くにつかみ 百ももの神々かみがみ勇いさみ立たち

その身邊しんぺんを守まもります 尊たふとき珍うづの神司かむつかさ

從したがひ玉たまふ眞純彦ますみひこ 三千彦みちひこ 伊太彦いたひこ デビス姫ひめ

神かみに等ひとしき御身魂おんみたま 親子おやこの惱なやみを救すくひまし

此里人このさとびとをよく治をさめ 珍うづの宮居みやゐを建たて玉たまひ

タクシヤ力龍王りうわうを初はじめとし サーガラ龍王りうわう言向ことむけて

世界せかいの災除わざはひめぞきまし 小天國せうてんこくを建けん設せつし

恵めぐみの露つゆを四よ方や八も方に 垂たれさせ玉たまひし有難ありがたさ

千代ちよも八千代やちよも永とこ久しへに アツモス山さんの山麓さんろくに

鎮しづまりまして吾々われわれを 導みちびき玉たまへと朝夕あさゆふに

祈りし甲斐もあら悲し 教の御子を後にして
 魔神の猛る月の國 ハルナの都に出で玉ふ
 その首途を見送りて 悲しみ胸に咽返り
 涙は瀧と流れ落つ あゝ惟神々々
 神の任さしの宣傳使 如何程眞心現はして
 頼むも詮なき御體 別れを惜むも愚なれ
 さはさり乍ら師の君よ ハルナの都の神業を
 無事に終へさせ玉ひなば これの聖地を見捨てずに
 再び現はれ来りまし 吾等に尊き御教を
 完全に委曲に傳へませ 宮の司のバーチルが
 里人一同になり代り 慎み願ひ奉る
 あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

玉國別たまくにわけ 〇〇 巴ちる ーー チルの 清きよ き 言こと 葉は 葉を 名な 残しり にて

いざ立た ち行ゆ かむ神かみ のまにまに〇

眞ま 純す 彦みひこ 〇〇 皇すめ 神かみ の任よ さしの儘まま に吾われ は行ゆ く

健まめ かなれや百もも の人ひと 等たち 〇〇

三み 千ち 彦ひこ 〇〇 縁えにし あらば再ふた びお目め にかかる べし

神かみ の恵めぐ みに世よ を送おく りませ〇

伊い 太た 彦ひこ 〇〇 言こと 葉は にも盡つく され難がた き待も 遇て を

受う けし恵めぐ みを如い 何か に返かへ さむ〇

デビス姫ひめ「いざさらば吾師わがしの君きみと諸共もろともに
別れわかを告げつむ百人ももびとのまへ前に」

アンチー「玉たまの緒をの生命いのちの親おやに果敢はかなくも
生き別れわかする吾われぞ悲かなしき」

チルテル「摩訶ま不思議しぎ深ふかき縁えにしに包つつまれて
嬉うれしき夢ゆめを暫しばし見みしかな」

サーベル姫ひめ「いざさらば眞幸まさきくハルナに出いでませよ
神かみに祈いのりて君きみを守まもらむ」

チルナ姫ひめ「師しの君きみの諭さとしによりて吾夫わがつまは

誠まことの道みちに歸かへりましけり。

山やまよりも高たかき恵めぐみを如何いかにして

報むくいむものと心こころ苛いらちつつ」

テク「いざさらば御身みすこ健こかに出いでませよ

君きみの前まへには敵てきもなければば」

カンナ「思おもひきや思おもはぬ人ひとに巡めぐり會あひ

又またも思おもはぬ別わかれするかなな」

へールなにごと何事もかみ神の任よさしの儘ままなれば
人ひとの言問こととふ道みちにあらまし」

アキスわが吾主人あるじ救すくひ玉たまひし助たすけ神がみ
別わかれむとしてなみだこぼ涙零なみだこぼるる」

カールなにごと何事もゆめ夢の浮世うきよと諦あきらめて
思おもはざるらむ情つれなき別わかれを」

ワックスこ許こ々多たくくの罪つみや穢けがれを洗あらはれし
神かみの司つかさに今いま別わかれむとす。

惜^{をし}めども悔^{くや}めど泣^なけども如何^{いか}にせむ

神^{かみ}に任^{まか}せし教^{をしへ}司^{つかさ}を

ヘルマン「夢^{ゆめ}の世^よに不思議^{ふしぎ}な夢^{ゆめ}を見^みたりけり

夢^{ゆめ}な忘れ^{わす}れそ神^{かみ}の恵^{めぐ}みは

エクス「ワックスや主人^{あるじ}の君^{きみ}を惱^{なや}めたる

懺^{ざんげ}悔^{なみだ}の涙^{なみだ}とどめ兼^かねつつ。

玉^{たま}國^{くに}別^{わけ}神^{かみ}の司^{つかさ}よ吾^{わが}罪^{つみ}を

神^{かみ}に祈^{いの}りて拂^{はら}はせ玉^{たま}へ

エル「テルモンの山の麓ふもとに立たち別わかれ
又またもや神かみに別わかれむとぞする」

玉國たまくにわけ別「猩猩しやうじやう々の翁媪おきなおんなに物申ものまをす
彌いや永久とこしへに安やすくましませ」

翁おきな「スメールのこの神山みやまに永久とこしへに
ありて御世みよをば守まもらむとぞ思おもふ」

媪おんな「背せの君きみのタクシヤ力龍王りゅうわうと相あひ竝ならび
これの聖地せいちを永遠とこしへに守まもらむ」

玉國別たまくにわけ「いざさらば諸人等もろびとたちに物申ものまうす

安やすくましませ神かみの恵めぐみに」

玉國別たまくにわけの一行いっかうは無限むげんの神力しんりきあらはして

麻あさの如ごとくに亂みだれたる諸人等もろびとたちの心こころをば

一ひとつに治をさめ悠々いういうとスマの里さとをば後あとにして

晩夏ばんかの風かぜを浴あび乍ながら稲葉いなばのそよぐ細道ほそみちを

草鞋わらぢ脚絆きやはんに身みを固かため二つふたの玉たまを捧ささげつつ

意氣いき揚やう々と進すすみ行ゆく。

日は漸やうやく黄昏たそがれて來きた。廣袤くわうぼう千里せんりの大原野だいげんや、人通ひととほりも尠すくなく僅わづかに道みちの傍かたへの娑羅さらさ
雙樹つじゆの森もりを認みとめて一夜いちやの雨宿あまやどりをなさむと足あしを速はやめたり。

甲「馬鹿ぢやな。貴様は乞食もようさらさず、たまたま泥棒に連れて来れば、その腰は何だ。痲病患者か梅毒患者の様な態しやがつて……見つともない」
乙「へへへ、痲病もチツト許り患うて居ます。梅毒も漸く癒りかけた處でムいます。アイタ、痲病の話すると俄に痛くなつて来ました、もう動けませぬ。アイタ、と屁太る。」

ベル「オイ、バット、もう仕方が無い、何程大勢居つても寢首を締めるのは容易なものだ。サアこんな腰抜けは放つといて貴様と俺が兩方から仕事に取りかからうぢやないか」

バット「ハイ、承知しました。吾々が運の開け時、この機会を逸して、どうして頭が上りませう」

玉國別は最初から三人の密々話を一言も洩らさず聞いて居た。

かかる所へ「ブーブー」と闇を貫く法螺の聲、社の後より聞え来る。泥棒は驚いて乙を社前に残し乍ら闇に紛れて逃げ去つて了つた。法螺の聲は益々高く響い

て來くる。

玉國別たまくにわけは法螺ほらの音ねの靜しづまるを待まつて、

玉國別たまくにわけ 山やま川かはの枉まが拭ふき拂はらふ法螺ほらの貝かひ

何處いづくの人の弄すさびなるらむ。

御社みやしろの傍かたはら近く聞きえ來くる

この言靈ことたまの主ぬしは何人なにびと

祠ほこらの後ごしより、

吾われこそは鬼春別おにはるわけのなれの果はて

比丘びくと仕つかふる治道居士ちだうこじぞや

玉國別たまくにわけ 治國別はるくにわけ 神の司つかさに服まつろひし

バラモン軍ぐんのゼネラルなりしか。

吾われこそは玉國別たまくにわけの宣傳使せんてんし

思おもはぬ所ところに會あひにけるかな

治道ちだう 懐なつかしや音おとに名な高たかき玉國別たまくにわけの

神かみの司つかさか嬉うれし恥はづかし

三千彦みちひこ 泥棒どろぼうが吾懷わがところを探さぐらむと

慄ふるひ戦をのき來きたる可を笑かしさ

伊太彦いたひこ 盗人ぬすびとを追おひ拂はらひたる法螺ほらの貝かひ
吹ふき立たてたるは神かみにぞ在まさむら

三千彦みちひこ 聞きき及およぶ治道ちだう居士こじとは汝なが事ことか
思おもはぬ所ところに會あひにけるかなら

治道ちだう 吾われは今いまビクトル山さんの比丘びくとなり

四方よもを逍遙さまよふ修験しうげん者じゃぞや。

武士ものふの矢猛心やたげこころを抑おさへつつ

誠まことの道みちに進すすみ行く身みよら

デビス姫ひめ「神かみの道みち唯ただ只管ひたすらに進すすみ行く

比丘びくの司つかさの心こころ雄々をしき。

吾われも亦またテルモン山さんの神館かむやかた

バラモン神がみに仕つかへし身みぞや」

治道ちだう「テルモンの大おほ海原うなばらを乗のり越こえて

漸やうやくここに吾われは着つきぬる。

草枕旅くさまくらたびの疲つかれを休やすめむと

祠ほこらの蔭かげに憩いこひ居ゐたりし。

皇神すめかみの縁えにしの絲いとにつながれて

神かみの司つかさに會あふぞ嬉うれしき」

三千彦みちひこは燧ひうちを取とり出し闇やみを探さぐつて木の葉は枯かれ枝えだの端はしを搔かき集あつめ、パツと火ひを點てんじた。

治道居士は祠の後より現はれ來り、一同の顔を見て、さも嬉しげに、
治道「貴方は噂に高き玉國別様の御一行でムいましたか、これは不思議な處でお
目にかかりました。私はバラモン教のゼネラルでムいましたが、河鹿峠に於て吾
部下の片彦、久米彦將軍が治國別様の言靈に打惱まされ、實に見苦しき敗をとり
ました。それに就いて私は到底武力を以て神力に勝つ事の不可能なるを悟りまし
た。併し乍ら數千人の部下を引率れ大黒主の命を受けて征途に上るゼネラルの分
際として、直ちに軍籍を捨て、尊き神の道に入らむとするも事情が許しませぬの
で止むを得ず、ランチ將軍と相談の上、浮木の森にて半永久的陣營を造り、戦ふ
心もなく徒に光陰を濫費して居りましたが、遂に軍隊を二つに分ち三千餘騎を率
ゐてライオン川を横斷し、ビクトル山の麓に陣營を構へ、ここにも亦思はぬ失
敗をとり、再び猪倉山の山寨に立籠もり治國別様の言靈を浴びせられ、ここに全
く菩提心を起し、至善至愛の大神に信従する證據として頭を剃り落ち圓頂緇衣の
比丘姿となり、ビクトル山の傍に草庵を結び、吾々同志四人が交る交る神の教の
宣傳に廻つて居ります。玉國別様御一行の事も治國別様より詳しく承はり、一度

尊き警咳に接し度きものと祈つて居りましたが、思はぬ處で面會を得まして何とも云へぬ嬉しさが漂ひました。何卒御見捨なく御懇意に願ひます」

玉國別「貴方がバラモン軍の鬼春別將軍様でムいましたか、不思議の縁で不思議

な處でお目にかかりました。これも全く大神様の御引合せでムいませう。此四人

は眞純彦、三千彦、伊太彦、デビス姫でムいます。何卒今後は御入魂に願ひます」

治道「網笠一つ、蓑一つ、杖一本の修驗者、何卒共に手を引き合つて神業に参加

させて頂き度うムいます」

眞純彦「初めてお目にかかります。いやもう何にも申し上げませぬ。神様の御爲世

の爲に互に力になり合つて進む事に致しませう」

伊太彦「私は狼狼者の名を賣つた伊太彦でムいます」

三千彦「私は三千彦夫婦でムいます。いつも伊太彦殿に女を連れて居ると云つて

擲掬はれ通して閉口致して居ります」

治道「ハ、ハ、ハ、何分若いお方は元氣が宜しいから面白いでせう」

デビス姫「ゼネラル様、妾はテルモン山の神館の司小國別の娘デビス姫でムいま

す。不思議な縁で此三千彦様に命を助けられ、ハルナの都へお伴を致す所で

ます。して之から貴方は何方へおいでになりますか

治道「これは又不思議な御縁で。貴女が小國別様の御息女とは思ひも寄りま

せなんだ。かうなる上は何れも三五教のピユウリタンとして互に打解け御神業に

奉仕させて頂きます

玉國別「最早體も餘程、疲れも休まつた様ですから夜中なれども大明りがして居

りますから、ボツボツ進みませう

治道「どうか私も途中迄なりとお伴をさして頂きます

と立上る。側を見れば一人の泥棒が踞んで慄うて居る。

治道「オ、お前は何者だ。泥棒の片割ではないか

乙「はい、私は乞食でムいます。今日初めて泥棒のベルと云ふ男の家来となり、

三人連れにて此人の跡をつけ狙ひ、ここ迄参りましたが法螺貝の聲で腰を抜か

しました。二人は何處かへ風を喰つて逃げたでムいませう

治道「はてな、ベルが又泥棒をして居るのかな

と頻りに首を傾けて居る。泥棒の乙はコソコソと闇に紛れて姿を隠した。一行六人は治道居士を先頭に法螺を吹き立て東南に道を轉じて露おく野路を足許忙しく進み行く。

(大正一二・四・七 舊二・二二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第三篇 神の榮光

第一二章 三美歌その一(一五三七)

大本三美歌

君^{きみ}が代^よは 千代^{ちよ}にましませ
八千代^{やちよ}に ましませ
さざれ石^{いし}の いはほとなりて
苔^{こけ}のむすまで ましませ

第一（三八〇）（この番號は讚美歌の譜なり）

—

とつきおこなふ けふの日^ひは
あまつそらより えにしをば
あたへむとして すせりの姫^{ひめ}は
くだらせたまひ ほぎたまふ。

二

いづの御前みまへに たちならび

むすぶいもせの かむわざは

千代ちよのかためと なりてさかえむ

まもらせたまへ 八千代やちよまで。

三

いもせの柱はしら つきかため

あいなるむな木き いや太ふとく

いづのみたまの きよきこころを

まもるめをとに さかえあれ。

四

かしこきけふの まじはりは
よろこびつきず くるしみを
かたみにわかち むつびにむつび
いさみてすすめ おほ道みちに。

第二（三八二）

一

なぎなみの神かみは いもせのみちを
ひらきたまひしゆ いまもつたはる。

二

むすびの御神みかみも

のぞませたまひ

いはひのむしろを

販にぎはせたまはむ。

三

いざなぎいざなみ

二人ふたりの君きみを

くだししごとくに

えにしゆるせよ。

四

えにしをむすぶの

すめ大神おほかみよ

わがわざたすくる

つまをあたへよ。

五

瑞^{みづ}のにひ妻^{づま}を　　まもるみたまよ。
いとせふたりを　　ことほぎたまへ。

六

めぐみの御神^{みかみ}よ　　ふたりをまもり
よろづ代^よのすゑも　　榮光^{さかえ}をたまへ。

第三(一)

一

わが魂たまさめじ
神かみの御國みくにをば

あしたのひかりに
さとりてすすめよ。

二

あだにすごしたる
まだ來こぬ良よき日ひを

時ときをつぐのひて
足たらはしておくれ。

三

神かみのよさします
のちの代よのそなへ

御寶みたからささげて
つぶさにつかへよ。

四

神かみの御み目は光てる
月つき日ひのかぶとを

暗くらきをはなれて
つつきけて戦たたかへよ。

五

御み靈たま魂まもさかえて
みいづかしこみぬ

吾わが神かみをあがめ
天み使つかひと俱ともに。

第四（二）

一

あした夕ゆふべに

月つき日ひとともに

いづのひかりを
御魂みたまにうけて
きよきめぐみを
日ひに夜よにさとる。

二

あした夕ゆふべに
魂たまをきよむる
めぐみのつゆは
御空みそらゆくだり
神かみの幸さちをぞ
日ひに夜よにさとる。

三

あした夕ゆふべに
言わが行おこなひ心を
清きよめすまして
たてまつりなば
まつりし寶たから
益まさしめたまはむ。

四

あした夕ゆふべに
人をひとめぐみて
神かみにすすまむ

爲なす身みのつとめ
わが身みにかたば
御階みはしとぞなれ。

五

あした夕ゆふべに
あしもただしく
天津あまつみくにへ

救すくひを祈いのる
大道おほみちすすみ
昇のぼらせたまへ。

第五（一二）

一

八雲やくもの小琴をことの

しらべにまかせ

うたはせたまへ

みろくの神かみよ。

二

つばさをやすらふ

夕ゆふべにあれば

神かみにぞゆだねむ

けふな爲せしわざを。

三

すべてのものの

いろもすがたも

かくれてぞゆく

夜よるは來きにけり。

四

つねに勤むる わが良きわざも
世には知らさず かくしたまひぬ。

五

日かげは西に 田人は家に
かへるゆふべこそ 心しづかなれ。

六

神のよさしの わざをはりなば
あまつみくにに いこはせたまへ。

第六（二三）

一

宇都のめぐみ

瑞靈の慈愛

ゆたかにみつ

神宮の

あつきめぐみ

したたる愛

なやみは失せ

うきもきえむ

この神庭に

みな來れ

永久にたまふ

おんめぐみ。

二

あめの宮居

しづが伏屋

なべておなじ　うきためし
ひとはみづの　あわにひとし
たちてはまた　消えて失せむ
永久とこしへの　さちぞある
この宮居みやゐに　慕したひ來こよ。

三

瑞靈みづのすくひ　世よにあまねし
とく來きたりて　くいよつみ
なやみもきえ　たまきよまる
うづのおもて　ゑみたまはむ
たのしみは　つねにみち
うれひきゆる　この宮居みやゐ。

第七（五三）

一

伊都の御ひかりは 吾身のなやむ
暗路を守れり 神は愛なり

（折返）

われらも愛せむ 伊都の御神を。

二

村雲つつめど 月日の笑は
きよけくてり出づ 神は愛なり。

三

悲^{かな}しき折^{をり}にも
勇^{いさ}ませ玉^{たま}へり

めぐみを與^{あた}へ
神^{かみ}は仁^{じん}なり。

四

世^よは曇^{くも}り行^ゆけど
とこしへにぞ照^てる

御^み神^{かみ}の稜^み威^{いづ}
神^{かみ}は善^{ぜん}なり。

第八（五八）

一

御祖みおやはあれまし
道みちを説とけり
なやみにすむ人ひと
求まぎて來きたれ
智慧さとの御柱みはしら
世よに降くだれり
よわき人々ひとびとよ
來きたりまなべ。

二

伊都いづの大神おほかみは
世よに降くだれり
よろづのひとびと
來きたりたのめ
身み靈たまを清きよむる
神かみの清しみづ水
汚けがされし人ひとは
來きたりすすげ。

三

五^み六^ろ七^くの大神^{おほかみ} 世^よに出^いでます
なやめるひとびと 來^{きた}りたのめ
生命^{いのち}の御親^{みおや}は 世^よに降^{くだ}れり
つみに染^しみし人^{ひと} 求^まぎて生^いきよ。

四

美^み都^づの御柱^{みはしら} 世^よにうまれぬ
うへした諸^{もろ}共^{とも} 來^{きた}り齋^{いつ}け
天^{あめ}地^{つち}のはしら 御代^{みよ}に降^{くだ}る
すべての物^{もの}皆^{みな} 勇^{いさ}みうたへ。

第九（六八）

一

大地だいちにあまねき 萬よろづの草木くさきは

神かみの御力みちからを 現あらはし居をれども

救すくひのたよりと 人ひと皆みなのあふぐ

力ちからは一つひとの 瑞みづの神御靈かむみたま。

二

常夜とこよの暗やみの海み 風吹かぜきすさびて

木この葉はのごとくに 波間なみまにただよひ

あはやと許ばかりに 煩わづらひしときぞ

望のぞみとなりしは オレゴン座ざの星ほし。

三

嵐あらしを吹ふき分わけ

暗やみ夜よを追おひ退のけ

旅たび路ぢつつがなく

都みやこにき来きにけり

今いまよりよ夜よなな

御み空そらをあふふぎて

みいづをたたたへむ

オレゴン座ざのほし星。

第一〇（八三）

一

世よは日ひ々びに曇くもりぬ

坪つぼの内うちのそのに

とらはれ御み祖おやは

ひとり祈いのりたまふ。

二

血ちを吐はくおもひに 御代みよをなげきます
救すくひの主あるじの 胸むねしらぬ御弟子みでし。

三

世よの罪つみを負おひて とらはれし救主ぬしを
元津御祖神もとつみおやがみ まもらせたまひぬ。

四

天津御使あまつみつかひは 雲くものごと降くだり
救主ぬしをかこみつつ まもらせたまひぬ。

第一一（一一〇）

一

美都御靈いつと知らず 降くだらせたまはむ
燈火ひかりを手に捧ささげ まつものは誰たれぞ

（折返）

美都御靈とく來きませ そなへは成なりぬ
美都みづみたまとく來きませ そなへは調ととなひぬ。

二

任よさしたまひし御靈みたま 返かへしまつる時とき
きよき光ひかりほまれを 得うるものは誰たれぞ

三

人の義務をはたし
聖けき御魂なりと

ちからをつくし
いふものは誰ぞ。

四

夢のごとくに來ます
いや高き御榮光に

救主を迎へて
いるものは誰ぞ。

第一二二（一二二二）

一

聖みたま靈あよ天あ降もりて
神かみよ世よのごとく
奇くすしき神みわざ業ざを
あらはし玉たまへ

(折返)

世よ々よに坐まします
聖きよき靈みたまよ
己おのが身み靈たまにも
足たらはせ玉たまへ。

二

聖みたま靈あよ天あ降もりて
仁めぐみ愛みの露つゆに
かわけるたましひを
うるほしませよ。

三

聖みたま靈あよ天あ降もりて
貧まじしきものを

いづの御ちからに 富ましめたまへ。

四

聖靈よ天降りて
たのしき御國に
曲津を清め
進ませたまへ。

第一三（一三四）

一

斯の世は魔の世と
うつらば移れ
月日のまもりの
もとにしあれば

やすけし

御神の都城は。

二

愛づらし友垣

こころは移り

親の慈愛さへ

冷ゆることあれ

うつらじ

月日の愛は。

三

身をやくばかりの
ためしの御火も

靈魂に常磐の
ひかりをそへて

失せまじ

御神のたみは。

第一四（一三七）

一

尊たふとき瑞みたま靈よ
さかし旅たびぢ路に
清きよけく照てらす
ひかりを拜をがむ
つみの身みは
まよひしを
御みめぐみ仁愛の
うれしさよ。

二

みづの御みかみ神に
身みたま靈たまいまより
御みむね心のままに
すくはれし
ただ救か主みの
うちまかせ

神國の道に

進み行かむ。

三

悪^{あく}のからまる
瑞^か靈^みの稜^み威^{いづ}に
きよき神^{つか}使^かの
その誓^{うけ}がひの

身^みは死^しにて
よみがへり
かずにいる
鎮^は魂^ぶ歸^て神^ス。

四

汚^けれなき身^みの
これに比^{くら}ぶる
身^みもたましひも

幸^{さい}ひは
ものぞなき
みなささげ

救主を慕ひて

月日おくる。

第一五（一六六）

一

美都御魂

世に給ひし

伊都の神を

あがめまし

（折返）

ふたたび身靈を

活したまふ

救ひの御神に

さかえあれ。

二

伊都いづのかみ
美都みづ御魂みたまを

降くださせたまふ
あがめまし。

三

世よの岐美きみを
きよき聖靈みたま

示しめさせたまふ
あがめまし。

四

伊都いづの火ひを
燃もやしたまへ

きよき民たみに
いまの今いま。

第一六（一六七）

一

メシヤよメシヤよ かみくにに
われらをすてずに いれたまへ

（折返）

聖^み靈^{たま}よ ききたまへ

やぶれしこころの ねぎごとを。

二

みまへに泣^なき伏^ふし 身^みをくゆる
こころのねがひを ゆるしませ。

三

救^き主^みのひかりにぞ
暗^{くら}けきこの身^みを

照^てらされむ
救^{すく}ひませ。

四

すくひの親^{おや}なる
あめにもつちにも

救^き主^みおきて
たすけなし。

第一七（一七一）

一

かみのみちを　　ひらきませば
集への御こゑを　　われはきけり

(折返)

大御前　　いさみ行く
伊都の力に　　きよめたまへ。

二

かよわきみも　　ましみづを得
身靈のけがれを　　みなすすがれむ。

三

まごころもて　　きよく祈る

身み靈たまにみつるは

神かみのめぐみ。

四

ほめよたたへ

御み神かみのあい

ア、ほめよたたへ

瑞み靈たまのあい。

第一八（一七六）

一

おのがみたまの　　したひまつる

みづ御み魂たまうるはしさよ

宇都の月か 松のみどり

梅の花の清きがごと

ながめもあかぬ みのたのしさ

なやめる日のわがとも

瑞靈は貴の月 松のみどり

うつし世にたぐひあらし。

二

身の苦しきも 世のうれひも

われとともにわかちつつ

いざなふものの 暗きたくみ

やぶりたまふありがたき

ひとは捨つとも 瑞靈はすてず

みめぐみはいやまさらむ
瑞^き靈^みは貴^{うづ}の月^{つき} 松^{まつ}の美^みどり
現^{うつ}し世^よにたぐひも無^なし。

三

まごころを以^もて 集^{あつ}まりなば

常^{とこよ}世^よに契^{ちぎり}はたえじ

水^{みづ}にも火^ひにも 恐^{おそ}れあらず

瑞^き靈^みこそかたき城^{しろ}なれ

あなわが神^{かみ}の なつかしさよ

天^{あもり}降^りの日^ひぞ待^またるる

瑞^き靈^みは貴^{うづ}の月^{つき} 松^{まつ}のみどり

うつし世^よにたぐひもなし。

第一九（一八三）

一

つみの谷たにに落おち入いりて 亡ほろび行ゆく人々ひとびとに
すくひの御手みをのべたまふ
あらしの日ひも暗くらき夜よも

（折返）

かみのみこの ほろぶるは
みむねならじ すくへよ。

二

つねにそむき去さりし子こを

しのび泣く母のごと
神われらをまちたまふ
つみ悔いてかへれよと。

三

あを人草のみたまをば
いつくしみます救主は
あさ夕なげかせたまひて
をしへをばつたへたまふ。

四

いづと瑞とふたはしら

つみの身みもすくふなり
母ははのおもひ父ちちのあい
くめどもつきぬめぐみを。

第二〇（一八六）

—

つみにまよふものよ 神かみにかへり
あまつ神國みくにの さまをみよや
つみをかへりみる みたまこそは
國くにの常立とこたちの たまものなれ。

二

つみに迷ふものよ
神にかへり

國の常立の
嚴のまへに

まことの言靈
宣りなほせよ

人は知らずとも
神は知れり。

三

つみに迷ふものよ
神にかへり

メシヤの御許に
とくひれ伏せ

父は見直して
御手をのばし

ながるる涙を
ぬぐひ玉はむ。

四

つみに汚けがれしものよ 神かみにかへり
千座ちくらを負おはせる 母ははを見みよや
手足てあしの爪つめなき 御手みてをひろげ
生きよ榮さかえよと まねき玉たまふ。

第二一（一八八）

一

あだ浪なみたける 世よのなかは
老おいも若わかきも さだめなき

かぜにおそはれ
あるは彼岸ひがんに

船ふねかへり
渡わたりゆく。

二

あとより往ゆくも
千代ちよの住處すみかは
神かみの御國みくにか
ほろびの地獄じごくか

底そこしらぬ
うへもなき
ほかぞなき。

三

浮うかれ出いでゆく
汝ながあくがる

精靈せいれいよ
花はなの香かを

散らし往くべき　しこ嵐
一息待たで　吹かぬかは。

四

人は神の子　神の宮
かきはときはに　生きとほし
ほろびも知らず　榮えゆく
みたまのふゆを　たのしめよ。

第二二二（二〇〇）

一

神かみのみたまの さちはひて
あめつち四よ方を まもります
いづの御靈みたまの かむばしら
あやのたかまに 現あれましぬ。

二

たかあま原はらの 神かみのくに
あまつつかひの あらはれて
青人草あをひとぐさ とりけもの
すくはせ玉たまふ ありがたき。

三

草くさの片か葉はに おく露つゆも
月つきのめぐみを 身みにうけて
ゑみさかえ行く 神かみのその
いさみて進すすめ 人ひとの子こよ。

第二三（二〇八）

—

くもり果はてし この身みの罪つみを
なげく涙なみだは 雨あめとふるとも
いかですすがむ

（折返）

わが罪つみのため
千座ちくらを負おひし
神かみよりほかに
すくひはなし。

二

くもりはてし
この身みのつみを
まごころ籠こめて
いそしむわざも
いかですすがむ。

三

すくふすべなき
この身みのつみを
神かみのをしへを
さとるのみにて
いかですすがむ。

第二四（二一七）

一

人の身靈を

守らす救主よ

やみは襲ひ來

あくまは迫り

死なむ許りの

この身をすくひ

天津神都へ

みちびきたまへ。

二

たよるすべなき

わがたましひを

瑞のすくひの

御神にまかせ

慕ひまつれば

うへなき愛の

御船みふねのなかに 乗のらせたまひぬ。

三

わが身からだ體たまは 汚けがれに染そめど
瑞みづの御み靈たまは いと清きよく坐まし
靈み魂たま身からだ體たま ことごと洗あらひ
さびにし魂たまを 研みがかせ玉たまはむ。

四

生いのち命のちの清しみづ水づ いやとこしへに
たえず湧わき出いで 身み靈たまにあふれ
われをうるほし かわきをとどめ

みろくのよまで やすきをたまへ。

第二五（二二三）

一

仁慈みろくの御神みかみの
かみよの旅路たびぢを
みあとをしたひて
進むすすぞうれしき

（折返）

月つきのおほかみの
御蔭みかげあゆみつつ
御伴みともと仕つかへて
天あめにのぼりゆかむ。

二

深山みやまのはてにも
瑞か靈み俱ともにまして

人ひとすむ里さとにも
わが靈たま導みちびく。

三

けはしき坂路さかぢも
大御手おほみにすがり

暗くらけき谷間たにまも
進すすみて行ゆかなむ。

四

世よのこと終をへなば
懼おそれなく渡わたらむ

瑞みづの御みたすけ。
よみぢの河かはをも

第二六（二三二）

一

長閑な野邊の小徑を

すぎゆく時にも

いとも峻き山路を

のぼり行くをりにも

（折返）

心やすし 神ならひて安し。

二

黄泉しこめはたけりて

追^おひしき攻^せむれど
八^や十^その曲^ま津^が見^つあらびて
のぞみを破^{やぶ}るとも。

三

たふとや千^ち座^{くら}のうへに
身^みのつみ失^うせにき
苦^{くる}しみもだえにし身^みも
やよひの春^{はる}のごと。

四

大^お空^ほの月^{つき}日^ひ落^おち

地つちはしづむとき

つみびとらは騒さわぐとも

神かみによるわれらは。

第二七（二三三）

一

瑞みづの御魂みたま

守まもりたまへ

きよきうづの

御魂みたまあふがむ

大蛇をろちさぐめ

追おひしくとも

御言葉みことばもて

ことむけなむ。

二

みたま清め

身をあらひて

わがちからと

ちゑをすてて

ただ御神の

言葉のまま

こころかぎり

進みゆかなむ。

三

法のまに

われすすまむ

魔は猛りて

道を汚し

わざはひやみ

せまり來とも

いかで怖ぢむ

神の御子われ。

四

すべてのもの　　けがれを去り
神のために　　まごころもて
あさなゆふな　　つかへまつる
人の身たま　　實にたふとき。

（大正一二・五・一五　加藤明子録）

第一三章　三美歌その二（一五三八）

第二八（二三五）

一

やみぢにまよひし 世の人よ神の
めぐみのしたたる みをしへをきけや

（折返）

涙の雨は たちまち晴れて
つきせぬうれしみ 日の出とかがやかむ。

二

浮世のます人 苦しめる友よ
心を清めて 瑞靈にまつるへ。

三

苦し^{くる}みもだへて
すくひの御舟^{みふね}を

なげく罪人^{つみびと}よ
指^{ゆび}をり待^まてかし。

四

大本御神^{おほもとみかみ}に
いさみてあそばむ

なやみをはらはれ
吉^よき日^ひはまぢかし。

第二九（二四二）

一

神かみの御國みくにへ のぼりゆく
知れど親したしき あとにのこし
肉にくのやかたを 別わかるるとき
なごり惜をしまぬ 人ひとやはある

(折返)

ア、みづみたま
御神みかみにまさる御力みちからなし。

二

とはの生命いのちは ひとむれども
逝ゆきますあとに 生いけるものに
なごりのうれひ たえがたきを
いかでなげかぬ ひとやはある。

三

うき世よの富とみを

ねがはずとも

うからやからは

うゑにふるひ

わが身みなやみて

いえぬときは

たれかくるしみ

かなしまざる。

四

まが神かみたけり

まことよわく

つみに曇くもれる

世よにし住すめど

祝詞のりとに由よりて

神みち力を得え

かよわき魂たまも

つひにかちなむ。

第三〇（二四三）

一

をしへのわが友^{とも}
千座^{ちくら}のおき戸^どに
こころのなやみを
などかはおろさぬ

ミロク^{かみ}の神は
つみゆるします
皆^{みな}うちあけて
つみの重荷^{おもに}を。

二

をしへのわが友^{とも}
われらのなやみを
諸^ものかなしみに

ミロク^{かみ}の神は
しりて憐^{あは}れむ
しづめる時^{とき}も

眞言まことにこたへて

すくはせ玉たまはむ。

三

をしへのわが友とも

ミロクかみの神は

ふかきいつくしみ

千代ちよにかはらず

世人よびとのわが身みを

離はなる時ときも

眞言まことにこたへて

恵めぐませたまはむ。

第三一（二四八）

一

わがからだ身たま體わがわがみ靈たま魂
朝あさなほめゆふ夕べべたたへ
わがいのち生か命みの守か神
猶なほたらじとおもふ。

二

したひまつる瑞みづ御み魂たま
その御み姿すがたをあらはし
いづれの御み國くにに
守まもらせたまふぞ。

三

狼おほのかみさけぶ山やま路ぢ
行ゆきなやみたる吾わが身みを
あだはあざみわらふ。
ふるひつつたど辿り

四

木の花姫のらせかし
野に咲くか山に咲くか
白梅のかをり
あい悟らまほし。

五

瑞御魂うるはしさに
言靈の御ちからこそ
神人よろこび
天地動げ。

六

いと優しき瑞御魂
清き生命のいづみは
言の葉うれしき
きみにこそあれや。

第三二（二四九）

一

あまつ御國みくにのぼりなむ　みちしるべは
千座ちくらを負おふともなど
かなしむべき　救主ききのみ許もとに　ちかづかむ。

二

かをれる間まに　花はなちり　草くさのまくら
しとねの　夢ゆめにもなほ
神かみをあがめ　救主ききのみもとに　ちかづかむ。

三

あまつつかひは みそらに わたす橋はしの
うへより 迎むかへたまふ
たまをきよめ 救き主みのみもとに ちかづかむ。

四

目めさめし吾われ み神かみの あとを追おひて
み幸さちを いよよ切せちに
願ねがひつつぞ 救き主みのみもとに ちかづかむ。

五

あまつくにに のぼりて さかえ行く日ひ
みたまの きよきいのち
ながくてりて 救主きみの御顔みかほを あふぎみむ。

第三三（二六四）

—

瑞みづの御魂みたまよわが身みを
うづの宮みやとなしたまへ
けがれしこの身みの魂たまを
月日つきひなす照てらしませよ

（折返）

わが御靈みたまあらひて

雪ゆきよりも潔きよくせよな。

二

嚴いづの神力みちからによりて

醜しこの曲靈まがひをおひそけ

きよき御靈みたまにたてかへ

みまへに仕つかへしめてよ。

三

神かみよ千座ちくらのもとに

ふしていのるわがみたま

抜ぬかれたたまひし血ちしほに
暗くらき身みを照てらしたまへ。

四

月つきの神かみのいさをしに

照てらさるこそうれしき

靈みたま魂たまをあらたにきよめ

あまつつかひとなしたまへ。

第三四（二七三）

一

聖きよき十とえう曜うの

御み旗はたこそ

御み祖おやの神かみの

さだめてし

現このよ世かみよ神かみ世よの

寶たからなり

御みはた汚けがさず

よくまもれ

(折返)

守まもれよまもれ

よく守まもれ

十とえう曜うの御み旗はた

押おし立たてよ。

二

十とえう曜うの御み旗はたを

あさ風かぜに

ひるがへしつつ

すすみ行ゆけ

神かみは汝いましと

俱ともにあり

神かみのまにまに

身みをささげ。

三

神かみの神軍みいくさ

むらきもの

こころを清きよめ

身みをきよめ

御教みのりのままに

すすみゆけ

嚴いづの御靈みたまの

御楯みたてとし。

四

大地だいちは泥どろに

沈しづむとも

月つき落ち星ほしは

降くだるとも

まこと一ひとつの

麻柱あななひの

神かみの言葉ことばは

動うごかまじ。

五

來^きたれやきたれ

神^{かみ}の子^こよ

いづのみたまや

みづみたま

あらはれませる

神^{かむ}園^{その}に

神^{かみ}は汝^{なれ}等を^ら

待^またせたまふ。

第三五（二七四）

一

神^{かみ}のいくさの

きみのみむねを

をしへつかさよ

よくまもれ

ことたまきよめ 靈^{たま}あきらかに
はやうちむかへ まが神^{かみ}に。

二

仇^{あだ}よ矢^や玉^{たま}を はなたばはなて
われには嚴^{いづ}の 言葉^{ことば}あり
あだよてだてを つくさばつくせ
われにも神^{かみ}の たすけあり。

三

神^{かみ}のまにまに ちからはまして
まがのいくさは どよめきぬ

いさめよいさめ
かちどきあぐる

救すくひの瑞き靈みと
時ときはきぬ。

第三六（二七五）

一

立たてよふるへよ

神かみのいくさ

みずや御みは旗たの

十と曜えうの紋もんを

まがのみいくさ

失うせゆくまで

救き主みはさきだち

進すすみたまはむ。

二

きけよふえの音ね 救主きの吹ふかす
聲こゑはいくさの かどでのしらせ
神かみにしたがふ 身みにしあれば
よろづのあだも いかでおそれむ。

三

瑞みづの御魂みたまの ちからにより
嚴いづのよろひを かたくまとひ
直なほ靈ひのつるぎ ぬきかざして
神かみのまにまに いさみすすめ。

四

瑞^{みづ}のみいくさ やがてをはり
巖^{いづ}のかちうた きよくうたひ
つきひかざしの かむりをうけ
みづの御神^{みかみ}と ともにいさまむ。

第三七（二八〇）

—

あらへよ靈魂^{たましひ} こころかぎり
ちからつくまでに いそぎすすげ
みたまのひかりは くもにふれず
あめつち四方^{よも}八方^{やも} 照^てるたのしさ。

二

をしへのつかさは
くものごとく
むらがりかこみて
殿とのに居をれり
わきめもふらずに
神かみのさとし
きよむるまごころ
うべなひたまふ。

三

みろくの御神みかみの
きよきこころ
まなばせたまへと
兩手もろてあはせ
この世よの御みはしら
つかへなむと
天授さづけの靈魂みたまを
研みがきすます。

四

あまつ御使の みづの御靈

御言のまにまに すすむこの身

いかなるあくまの さはりあるも

神のみちからに うちも拂はむ。

第三八（二八八）

一

いづの神の のらすみのり

かしこみまつり 世におそれず

ひとにたよらで　　みちをまもり
つよきをなだめて　　よわきをたすくる
人こそ實に　　うづのみこそぞ。

二

かみのよさす　　御使誰ぞ

あしきころを　　夢いだかず

いづのみのりを　　かしこみつつ

あしたに夕べに　　たゆまずつかふる

人こそ實に　　うづの使。

三

みちをまもる　　まめひと誰ぞ
世にさきがけて　　御世をなげき
世人のさちを　　ともにいはひ
あめにもつちにも　　愧るを知らざる
身靈ぞ實に　　信徒なれ。

第三九（三〇三）

—

いかなるなげきも　　科戸の風に
いきふき拂ひて　　身もすこやかに
神のみをしへを　　たよりとなして

うつしきこの世を
うたひくらさむ。

二

浮世の苦しみ
いかがありなむ
まことのよろこび
瑞靈にこそあれや
あく魔にあふとも
救主ましまして
守らせたまへば
いさまざらめや。

三

御神をあふげば
こころのなやみ
日に夜にはらはれ
雲霧はれぬ
かきはに輝く
瑞靈のひかり

ながめしわれ等は

勇まざらめや。

第四〇（三〇五）

一

罪つみに汚けがれし わがみなれども

瑞みづのみたまは 千座ちくらを負おひて

われ等らをきよめ 救すくひ玉たまへり。

二

きよき御國みくにの

御民みたみとなして

神かみにつかへて
ただみち守まもり
羊ひつじのごとく
住すまはせたまへ。

三

奇くしびにたふとき
大御おほみめぐみや
いづのみひかり
あふぎしわれは
この世よに怖おづる
もの無なかりけり。

四

伊都いづの御神みかみの
みこころ知らで
そむきまつりし
まがこそは實げに
かみの御國みくにの
仇あだなりしかも。

第四一（三〇九）

一

あく魔まはすさびて

暗夜やみよはふかし

わが身みはいかにと

をのきわづらふ

（折返）

わが救主きみよこよひも

このみをまもり

さみしき一ひと夜よ

めぐまひ玉たまへ。

二

ちかく交まじこりし

友ともみなゆきて

つれなき憂世うれしに

ふりのこされぬ。

三

わがみの靈衣みけしは
夜よるなき神國みくにも

うすくなりけり
ちかづきしならむ。

四

をしへのまにまに
生世いくよのあしたに

逝ゆかしめたまへ
よみがへるまで。

第四二(三一二)

一

靈魂みたまのふるさと
歎なげきにかすめる

あふぎ見みれば
目めも晴はれけり。

二

小暗をぐらきこの世よの
とび來くる矢玉やだまも

曲まがをきため
おそれずたたむ。

三

やだまは霰あられと
まがつは嵐あらしと

降ふらばふれよ
吹ふかばふけよ。

四

永久とほの住處すまかなる
かへりゆく身みは

もとつ家いへに
いと安やすからむ。

五

さしもに長閑のどかな
やつれし靈魂みたまを

神かみの國くにに
ながく休やすめむ。

第四三(三一七)

一

月雪つきゆきよ花はなよと

愛めでにし

わがこののこしたる
衣ころものそで

ながめてなげく折をり
御みかみは

やすくわが身み霊たまを
なぐさめたまふ

(折返)

めぐしき吾わが子こよ
神かみの邊へに

のぼりゆき祈いのりを
ともにせよや。

二

わかれゆくわが子こを
おくりぬ

なみだの雨あめ晴はれて
雲くもはちれり

花はなさき匂におひ充みつる
たびぢを

いさみすすみ行ゆけや
月つきすむ夜よ半は。

三

神かみにひとしかりし わが子こよ

今いまちちは年とし老おい 母はははやみぬ

然されど汝なが魂たましひ いさみて

わが世よを守りつつ 神みくに國へゆけ。

第四四（三二一）

一

山やま伐きり拂はらへば あたひは降くだり

川かは水みづかわけば 舟ふねもかよはず

せむすべ無き身を

誰にかたよらむ

瑞の御魂なす

神の愛のみ。

二

いのちの清水は

かきはに湧けり

つれなきあらかぜ

誘ひくるとも

いかでか恐れむ

神のますみくに

めぐみの露にぞ

うるほひまつる。

三

伊都能賣の神の

ふかき心は

いかでか知り得む

人の身をもて

ふたつの御^み霊^{たま}の 月^{つき}日^ひのわざを
つつしみうやまへ たかきみいさを。

第四五（三三二二）

一

救^ぬ主^しのしもべの むつびあひて
神^{かみ}たちあがむる うるはしさよ。

二

御^み魂^{たま}あひて ことたまあひ

みくにのおんため
一つに祈る。

三

神かみにつかふ 貴うづの友ともは
はなること無しな とこしなへに。

第四六（三二五）

一

ひとやの中なかにも よろこびあり
世よ人びとにかはりて 血ちをながせる

瑞みづの神かむばしら 俣しのび見みれば
なげきはみづから 消きえてぞゆく。

二

わがみ憂うきときに まなこさまし
瑞みづの御み魂たまなる 救き主みを見みれば
千ち座くらの置お戸きとを 負おはせぬれど
ひるみたまはぬに こころいさむ。

三

苦くるしめる時ときにも 樂たのしみあり
きよきをしへにも 曲まがしのべる

火^ひをうごかす水^{みづ} またも水^{みづ}は
火^ひのためにうごく 奇^くしき世^よになむ。

第四七（三四二）

—

うつりかはるよにしあれど

うごかぬはみくに

あふぎうたはむ友^{とも}よ來^きたれ

とこしなへのうたを

とこしなへのうたを

あふぎうたはむ友^{とも}よ來^きたれ

とこしなへの御うた。

二

おきておもひふして夢み

あまつ神のもとに

花咲きにほふすがた見ゆ

かすみは日に月に

かげもなく消えて

花のかをるすがたきよく

かすみは日に晴れて。

三

あくに勝^かてるいくさびとの

言^{こと}霊^{たま}の風流^{みやび}

火口^{ひぐち}そろへ進^{すす}みつつも

月^{つき}かげを力^{ちから}とし

よせきたる浪^{なみ}わけて

たかまのはら昇^{のぼ}りてゆく

うづみのりみこあゆむ。

四

八雲^{やくも}小琴^{をごと}搔^かき鳴^ならして

いづのうたうたひ

いづの御^み霊^{たま}みづ御^み魂^{たま}

こころなぐさまひつつ

きよきしらべささぐ
神かみののりのまめひとらが
いづの御前みまへにふして。

第四八（三五六）

一

黄金こがね白銀しろがね 山やまなすとても
いかで求めむ さびゆく寶ものぞ
靈魂みたまの行衛ゆくゑ 天津御國あまつみくに
榮さかへ久ひさしき うづの住居すまひ
かみわがたま あまつくにの

いのちのそのに
みちびきませ。

二

山やまとつみてし
わが身みのつみ
はらひきよませ
靈たま幸さちはひて
よろこび充みてる
神かみの座くらへ
あめ地つちももの
神かみのつかひ
よさしのまま
わがみたまを
めぐませたまへ
すくひの救き主み。

三

八雲やくもの琴ことの

珍うづの音ね色いろ

ひびき渡れり
神の庭に
草木も露の
玉をかざし
神の御さかえ
祝ひまつる
木の葉青く
花はあかく
龍の宮居の
うるはしさよ。

第四九（三九二）

一

國常立の神
わがたまを守り
御靈の糧もて

いのちを永久とほに給たべ

(折返)

みろくの御代みよの

開ひらくる日ひまで

いづのまもり

ひろけくあれませよ。

二

やみ路ぢを行ゆく時ときも

魔神まがみたける夜半よはも

ゆくてを照てらして

とはにみちびきませ。

三

ゆくてを包みたる

しこの雲霧も

科戸邊の風に

伊吹はらひすすむ。

四

みろくの神代まで

わがたまを守り

み翼のしたに

かかへ守らせ瑞靈。

第五〇（四〇九）

一

暗やみの野の路ぢを
ひとりゆけど
神かみにまかせたる
魂たまはやすし。

二

あらかきはやて
瀧たきなすあめ
いかでおそれむや
神かみのをしへ子こ。

三

あきの水みづと
魂たまはきよく
月日つきひはかがやき
むねはさえぬ。

四

浪^{なみ}はあらく
風^{かぜ}は激^{はげ}し
この舟^{ふね}みなとに
いつかつくらむ。

五

いづのみたま
みづの御魂^{みたま}
われらを守^{まも}りて
あかしたまへ。

六

山^{やま}はくづれ
かははさけて
なやめるときこそ
神^{かみ}はすくはむ。

第五一（四一八）

一

瑞^{みづ}の御魂^{みたま}は 月^{つき}にしあれば
暗夜^{やみよ}も清^{きよ}く あかしたまへり

（折返）

いづみたま みづみたま
いづのめの みたまきよし。

二

世^よ人^{びと}のために てあしの爪^{つめ}を
ぬかせたまひて 千座^{ちくら}につけり。

三

うづの御園みそのを　　ひらきてわれを
またせたまへり　　月日つきひの御神みかみ。

四

瑞みづのみたまよ　　ましみづたれて
くらきこころを　　あらはせたまへ。

第五二（四二三）

一

伊都能賣の神いづのめのかみの

天降ります日あもりますひ

すくはる信徒まめひと

瑞の靈みづたま

(折返)

月日のごとくつきひ

かがやきます

まことの神かみの

盾たてとならむ。

二

きたなきけがれに

そまぬ魂たまを

み神かみのたからに

くはへられ。

三

みくににすすみて

神かみをあがめ

まがつに染まざる

瑞の靈。

第五三（四二七）

一

山の尾の上

野邊のはたけ

高田窪田

狭田長田

いそしみまく

いきのたねの

八束穂なす

秋來たらむ

（折返）

獲り入るる

秋ちかし

いさみてまで

やつかのほ

とりいるる
秋^{あき}ちかし
いさみて待^まて
やつかのほ。

二

みそらかすむ
のどけき日^ひも
寒^{さむ}かぜ吹^ふく
冬^{ふゆ}の夜^よも
いそしみ蒔^まく
いきのたねの
やつかほなす
秋^{あき}來^きたらむ。

三

うきを忍^{しの}び
身^みをつくして
きよき教^{のり}の
たねを蒔^まけ

たわに實^みのる その足^たり穂^ほを
神^{かみ}はめでて うけたまはむ。

第五四（四二八）

一

笹^{ささ}のつゆも すゑつひに
川^{かは}とながれ 海^{うみ}となる。

二

いとちひさき ちりさへも

つもればまた

山^{やま}となる。

三

あだに暮^{くら}す

息^{いき}のまも

たふとき身^みの

いのちなり。

四

ありのあなも

いつとなく

つつみをさく

種^{たね}ぞかし。

五

あはのちさき 一粒も
倉を充たす たまとなる。

第五五（四五一）

一

聞けやいづの御聲 見よや御姿
直靈にかへりみて 勇みすすめよ
大御神言をば かしこみまつらひて
言靈のつるぎを かざしすすみゆけ

（折返）

大國常立の 尊の御聲に

まなこをよくさまし

神うづの御み楯たてとなりて。

二

曲津まがつひ靈にかこまれ

鬼おににおそはれ

逃にげまどふ友ともあり

あはやあやふきを

すくはでおくべきや

言こと靈たまつるぎもて

みなことむけやはし

みちに生いかすべし。

三

曲軍まがいくさにげちる

言ことたまきよし

きよまれるつはもの

勇いさみふるひぬ

すめ神かみの御座みくらに

かちどきをあげよ。

第五六（四五六）

—

かなたの岸きしに　　み船ふねつけて

きよきたふとき　　み許もとに行ゆかむ

生日いくひまちつつ　　み魂たまをきよめ

うからやからや　　ともらにあはむ

（折返）

やがてあはなむ

（やがてたのしく會あはなむ）

うからやからと

したしき友ともに。

二

めぐみの露つゆの しげき國くにに

昇のぼりてまたも えにし結むすばむ

かくれし月つき日ひ 星ほしもかがやき

消きえし望のぞみも 又また生いきかへる。

三

親おや子こ妹いも背せの めぐり會あひに

手てに手てをとりにて 笑えが顔ほつくる

雲霧くもかすみ あとなく消きえて

きよき姿すがたを ながめたのしむ。

第五七（四六二）

ちちがみ ははがみ
父神 母神

おほみまへに

いやとこしなへに　　みさかえあれ。

（大正一二・五・一五　加藤明子録）

第四篇

ぜんげんびし
善言美詞

第一四章 神言（一五三九）

あななひけう
三五教の祝詞

あまつのりと
天津祝詞

たかあまはら
高天原に元津御祖皇大神數多の天使を集へて永遠に神留ります。

かむろぎ かむろみ
神漏岐神漏美の御言以ちて

かむいざなぎのみことつくし
神伊邪那岐尊九天の日向の立花の小戸の阿波岐ヶ原に。御禊祓ひ玉ふ時に成り坐せる。

はらひど おほかみたち
祓戸の大神等

もろもろ まがことつみけがれ
諸々の曲事罪穢を。

はら たま きよ たま まを
祓ひ玉へ清め賜へと申す事の由を

あまつかみ くにつかみ やほよろづ かみたちとも
天津神、國津神、八百萬の神等共に

あめ 天の斑駒の耳振立て聞食せと
ふちこま 斑駒の耳振立て聞食せと
みみふりたて 耳振立て聞食せと
きこしめ 聞食せと
かしこ 恐み恐みも白す。
かしこ 恐み恐みも白す。

神言

高天原に神留り坐す。元津御祖皇大神の命以て。八百萬の神等を神集へに集へ賜ひ神議りに議り玉ひて。伊都の大神美都の大神は豊葦原の水穂の國を。安國と平けく所知食さむと天降り玉ひき。如此天降り玉ひし四方の國中に荒振神等をば。神問しに問し玉ひ神掃ひに掃ひ給ひて、語問し磐根樹立草之片葉をも語止て。天之磐座放ち天之八重雲を伊頭の千別に千別て天降り賜ひき。如此天降り賜ひし四方の國中を安國と定め奉りて下津磐根に宮柱太敷立。高天原に千木多加知りて皇大神の美頭の御舍仕奉りて。天の御蔭日の御蔭と隠り坐して。安國と平けく所知食さむ國中に成出む天の益人等が、過犯しけむ雑々の罪事は。天津罪とは。畔放ち溝埋め樋放ち頻蒔き串差し、生剥ぎ逆剥ぎ屎戸許々太久の罪を。天津罪と詔別

て國津罪とは。生膚斷、死膚斷、白人胡久美。己が母犯せる罪、己が子犯せる罪。
 母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪。畜犯せる罪、昆蟲の災。高津神の災、高
 津鳥の災。畜殪し蠱物せる罪、許々太久の罪出む。如此出ば天津宮言以て。天津
 金木を本打切末打斷て。千座の置座に置足はして。天津菅曾を本刈絶末刈切て八
 針に取裂て。天津祝詞の太祝詞言を宣れ、如此宣らば。天津神は天の磐戸を推披
 きて。天の八重雲を伊頭の千別に千別て所聞食む。國津神は高山の末短山の末に
 上り坐て。高山の伊保里、短山の伊保里を掻分て所聞食む。如此所聞食ては罪と
 ふ罪は不在と。科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く。朝の御霧夕の御霧を
 朝風夕風の吹掃ふ事の如く。大津邊に居る大船を舳解放ち臚解放ちて大海原に押
 放つ事の如く。彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌以て打掃ふ事の如く。遣る罪は不在
 と被ひ賜ひ清め玉ふ事を。高山の末短山の末より佐久那太理に落。多岐つ速川の
 瀬に坐す瀬織津比賣と云ふ神。大海原に持出なむ、如此持出往ば。荒鹽の鹽の八
 百道の八鹽道の鹽の八百會に坐す速秋津比賣と云ふ神。持可々呑てむ、如此可々
 呑ては。氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神。根の國底の國に氣吹放てむ、如此氣吹

はなち
放ては。根の國底の國に坐す速佐須良比賣と云ふ神。持佐須良比失てむ如此失て
は。現身の身にも心にも罪と云ふ罪は不在と。被給へ清玉へと申事を所聞食と。
か
恐み恐みも白す。

(附言) 『天津祝詞神言の二章は古代の文なれば現今は使用せず』

第一五章 祝詞(一五四〇)

祝詞

かけまく
掛卷も畏き大本大御神の宇豆の大前に、慎み敬ひ恐み恐みも白さく。大地の千五
あき
百秋の瑞穂の國は。天地初發之時より、國之常立尊の堅磐に常磐に鎮り居坐して。
くに
國の本國浦安國と愛給ひ守賜ひて、うま怜に委曲に開給ひし國にし有れば。皇大
か
神の天の石位放ち、天の八重雲を伊都の千別に千別て、天降り給ひてより動く事

無く變る事無く。人の心は直く正しく、山川は清く潔けく。顯見蒼生の食て活く
べき稻種は、大御神の大御言以て天の邑君を定給ひ。天の狹田長田に植ゑしめ玉
ひし稻を、天津御饌の遠御饌と赤丹の穂に聞食詔給ひ授け賜ひて。大地主神は五
百津齋鋤を採りて、高田窪田を耕し賜ひ、水分神は水を撒かしめ、埴安神は眞埴
を肥やし。大歳の神は蝗を攘ひ。秋の足穂の八束穂の、重穂に成幸給ひ。夏冬の
暑さ寒さも和らかに、惡しき疫少く。打見る島の崎々、搔見る磯の隈々。常世乃
波の重浪依來て、生と生き住と住む人の悉。高きも卑きも老も若きも嬉しみ尊み。
遠津御神の敷坐す島の八十島は。天の壁立極み、國の退立限り。狹き國は廣く峻
しき國は平けく。青雲の變く極み、白雲の墜居向伏限り。大野原は磐根木根履佐
久美。馬の爪の至り留る限り。荷緒結堅めて、長道間無く立續き。青海原は棹舵
乾さず、船の舳の至らむ限り。眞舵繁貫き浮竝べて、遠近の國の悉、耳驚き眼輝
く種々の珍の寶を。霜黒葛來るや來るや川舟の毛曾呂毛曾呂に持渡り來て、百取
の机に横山の如く置足はして。皇大神に獻り。大御國中に敷施こし。學の術に總
の法に、彌益も開け添はりて。天の下四方の國は、神の御國浦安國と。國富榮え

て都も鄙も惠良々々に歡ぎ賑はひ。邂逅に道無く黒き心以て、射向ひ奉る敵在る
時は。萬民擧り、御祖神の傳へ賜へる、言靈の眞心を振起し。嚴の雄健び踏健び。
嚴の嘖讓を起して、海往かば水潛屍山往かば草生屍大神の邊にこそ死なめ閑には
死なじ。顧は爲じと、彌進みに進み、彌逼に逼り。山の尾ごとに追伏せ河の瀬ご
とに追攘ひて言向け和し、心安く心樂しきは、專我大神の廣き厚き大御惠と、齋
知り嚴知り細螺の伊這回り唵喞ふ魚の打仰ぎ、敬禮奉らくを、眞澄の大御鏡の面
を押霽して見行し。相諾ひ玉ひて神の御國を。堅磐に常磐に茂御代の足御代に成
幸賜ひ。官々に仕へ奉る人等は本末内外を過たず、茂銚の中執持ちて愛善信眞の
政事をなさしめ給ひ。飛驒人が打つ墨繩の唯一道に守るべき。三五の教の憲の
隨々。善き道の正しき道を、彌遠に彌廣に弘め導かしめ給ひ。男も女も老も若き
も。相共に於與豆禮の妖言に藜鳥の罹る事無く。斯道を慕ひ信ひ、惡しき心を持
たしめず、曲れる事を爲さしめず。過ちて犯さむ事は、神直日大直日に見正し聞
治し坐し。百姓の天の狹田長田に降りて手肱に水泡搔垂り。向股に泥搔寄せて、
取作らむ水田種子は。霖雨降頻き河の瀬溢れて浸し損ふ事無く。暴き風吹荒びて、

根掘倒れ朽損ふ事なく。毒しき蟲の生出て喰荒しめむ事無く。負持てる國の名の、
茂瑞穂に稔らしめ給ひ。世の長人世の遠人と名告らひつつ。千歳萬歳生存へて。
世の爲人の爲太じき功績を樹てむと欲ふ人々の病煩はむ事あらば、一日片時も疾
く速けく。惟神の靈法に威の御魂を寄賜ひ。著き驗を效はして忽ち癒えしめ救助
けて。己が手手家の業務緩ぶ事なく怠る事無く。彌勤めに勤め締て。子孫の八十
連五十檀八桑枝の如く。茂木榮に榮えしめ給ひ、夜の守日の守りに守幸へ賜へと。
恐み恐みも白す。
辭別けて白さく。朝に異に身の罪穢を被ひ清めて、拜み仕奉らくを。天の斑駒の
耳彌高に聞上賜ひて。宣教師が教の爲に己が向々有らしめず、其程々の功績を建
てしめ賜ひ。殊に是の家内を始め、三五教の教信徒諸々が。家をも身をも護り
恵まひ幸賜へと。鹿兒自物膝折伏せ、宇自物頸根突拔來て、恐み恐みも祈願奉ら
くと白す。

あななひけうほんぶたいさいのりと
三五教本部大祭祀詞

此の神殿に坐せ奉り齋奉る、掛巻くも綾に畏き、三五皇大御神の宇豆の大前に、齋主（某）慎み敬ひ畏み畏みも白さく、八十日は有れども、今日を生日の足日と選み定めて、皇道三五の御教を恐み辱み、千々の一重も報い奉らむと、毎年の例の任々、春（秋）の大御祭仕へ奉らむとして、奥山の五百枝眞榮木に木棉取垂で、御食は高杯に盛足らはして、御酒は甕の戸高知り甕の腹満て竝べて、餅の鏡は八十比良加に積み重ね、御水堅鹽は窪手に盛満たして山野の物は甘菜辛菜種々の果實、海川の物は鱧の廣物、鱧の狭物、奥津藻菜、邊津藻菜に至る迄、百取の机代に盛高成して稱言竟へ奉らくを、平けく安らけく聞食し相諾ひ給ひて、天皇の大御壽を手長の大御壽と堅磐に常磐に、天津日繼は天地の共彌遠永に榮え座さしめ給ひ、直く正しく人に憑りて教へ給ひ諭し給へる、三五皇大御神の御教は、説く人の説きの違ひ無く、聞く人の聞きの誤あらしめず、皇道三五の信徒等は老も若も、清き明き誠の道をのみ信ひて、異しき卑しき邪道に惑ふ事なく入る事なく、神を敬ひ君を尊み、親子夫婦兄弟朋友の行ひ正しく美はしく、己が向々有らしめず、家の業彌締りに締り彌勤めに勤めて、子孫の八十續に至る迄五十檀八桑

枝の如く茂久榮に立榮えしめ給ひ、邂逅に病疾らはむ事あらば、一日片時も疾く速く神隨の神法に伊豆の神靈を蒙らしめ給ひ、恩賴を仰がしめ給ひ、夜の守日の守に守護幸へ給へと祈願白す事の状を聞き食し相諾ひ給へと、鹿兒自物膝折伏せ鷓自物頸根突抜きて畏み畏みも白す。

本部大神月次祭祀詞

此の神床に齋き奉り座せ奉る、掛巻も綾に恐き三五皇大御神の宇豆の大前に、齋主(某)慎み敬ひも白さく。今日はしも月毎の御祭仕へ奉るとして、御食は高杯に盛足らはし、御酒は甕の戸高知り甕の腹満て竝べて、餅の鏡は八十比良加に積み重ね、山野の物は甘菜辛菜種々の果實、海川の物は鱈の廣物鱈の狭物、奥津藻菜邊津藻菜、御水堅鹽に至る迄、横山の如く置き足らはして、稱言竟へ奉らくを平けく安らけく聞食して、現御神と大八洲國知食す天皇の大御代を、手長の大御代と堅磐に常磐に、天地の共彌遠永に榮え座さしめ給ひ、三五皇大御神の御教は、

説く人の説の違なく、聴く人の聴の誤あらしめず、皇道三五の信徒等は各も各も清き明き誠の道のみ信ひて、異しき卑しき邪道に惑ふ事なく入る事なく、神を敬ひ君を尊み、親子夫婦兄弟朋友の行ひ正しく美はしく、己が向々あらしめず、家の業彌締りに締り彌勤めに勤めて、子孫の八十續に至る迄、五十櫃八桑枝の如く茂久榮に立榮えしめ給ひ、夜の守日の守に守り幸へ給へと、祈願白す事の状を聞こし食相諾ひ給へと、鹿兒自物膝折伏せ鵜自物頸根突抜きて、恐み恐みも白す。

各家神床遷座祭祀詞

掛巻も恐き三五皇大御神の大前に（某）由麻波利清麻波里、恐み恐みも白さく。八十月日は有れども今日を生日の足日と選み定めて、此回新に設備へる神殿に遷し奉り座せ奉り、御祭仕へ奉らむとす。故御酒御饌海川山野種々の物を、平らかに安らかに聞食して、家長を始め諸人が過犯しけむ罪穢有らむをば、神直日大直日に見直し聞直しまして、大神の御心も安く隠に鎮り坐して、彌遠永に守り幸へ

給へと畏み畏みも白す。

第一六章 祈言（一五四一）

感謝祈願詞

感謝

至大天球の主宰に在坐て。一靈四魂、八力、三元、世、出、燃、地成、彌、凝、
足、諸、血、夜出の大元靈、天之御中主大神、靈系祖神高皇產靈大神。體系祖神
神皇產靈大神の大稜威を以て、無限絶對無始無終に天地萬有を創造賜ひ。神人を
して斯る至眞至美至善之神國に安住せ玉はむが爲に、太陽太陰大地を造り、各
自々々至粹至醇之魂力體を賦與玉ひ。亦八百萬天使を生成給ひて萬物を愛護給ふ、

其のひろきあつきおほみめぐみ
其廣大無邊大恩恵を尊み敬ひ恐み恐みも白す。
掛巻も畏き大地上の國を知召します、言靈の天照國は。千代萬代に動く事無く變
る事無く。修理固成給ひし、皇大神の敷坐す島の八十島は。天の壁立極み國の退
立限り。青雲の棚引極み、白雲の墮居向伏限り、伊照透らす大稜威は、日の大御
守と嬉しき尊み。常夜照る天傳ふ月夜見神の神光は、夜の守と青人草を恵み撫で
愛しみ賜ひ。殊更に嚴の御魂天勝國勝國之大祖國常立尊は、天地初發之時より獨
神成坐而隱身賜ひ。玉留魂の靈徳を以て、海月如す漂へる國土を修理固成て、大
地球の水陸を分割ち賜ひ。豐雲野尊は足魂の靈徳を以て植物を生じ、葦芽彦遲尊
は生魂の靈徳を以て動物を愛育て。大戸地、大戸邊、宇比地根、須比地根、生杵、
角杵、面足、惶根の全力を以て。萬有一切に賦り與へ、天地の萬靈をして、惟神
の大道に依らしめ賜ひ。神伊邪那岐尊、神伊邪那美尊は。天津神の神勅を畏み、
天の瓊矛を採持ち。豐葦原の千五百秋の水火國を。浦安國と、うまに完全具足
に修理固成し賜ひて。遠近の國の悉々、國魂の神を生じ、産土の神を任せ賜ひて。
青人草を親しく守り賜ふ。其大御恵を仰ぎ敬ひ喜び奉らくと白す。

現身の世の習慣として。枉津神の曲事に相交り、日に夜に罪惡汚濁に沈みて。
現界の制律に罪せられ。幽界にては神の政廳の御神制の隨々、根の國底の國に墮
行むとする蒼生の靈魂を隣み賜ひて。伊都の靈、美都の靈の大神は。綾に尊き豐
葦原の瑞穂の國の眞秀良場豊竝る、青垣山籠れる下津岩根の高天原に、現世幽界
の統治神として現れ給ひ。教親の命の手に依り口に依りて、惟神の大本を講き明
し。天の下四方の國を平けく安けく、豊けく治め給はむとして。日毎夜毎に漏る
事無く遣る事無く。最懇切に百姓萬民を教へ諭し賜ふ。神直日、大直日の深き廣
き限り無き大御惠を。嬉しみ忝なみ、恐み恐みも稱辭竟へ奉らくと白す。

祈願

天地初發之時より。隱身賜ひし國の太祖大國常立大神の御前に白さく。天の下四
方の國に生出し青人草等の身魂に。天津神より授け給へる直靈魂をして。益々光
華明彩至善至直伊都能賣魂と成さしめ賜へ。邂逅に過ちて枉津神の爲に汚し破ら

るる事なく。四魂五情の全き活動に由て、大御神の天業を仕へ奉るべく。忍耐勉
強もつて尊き品位を保ち、玉の緒の生命長く。家門高く富榮えて、甘し天地の花
と成り光と成り。大神の神子たる身の本能を發き揚しめ賜へ。仰ぎ願はくは大御
神の大御心に叶ひ奉りて、身にも心にも罪惡汚穢過失在らしめず。天授之至靈を
守らせ給へ、凡百の事業を爲すにも。大御神の恩賴を幸へ給ひて、善事正行には
荒魂の勇みを振起し、倍々向進發展完成の域に立到らしめ給へ。朝な夕な神祇を
敬ひ。誠の道に違ふ事無く、天地の御魂たる義理責任を全うし。普く世の人と親
しみ交こり、人欲の爲に争ふ事を恥らひ。和魂の親みに由て人々を惡まず、改言
改過惡言暴語無く、善言美詞の神嘉言を以て、神人を和め。天地に代るの勳功を
堅磐に常磐に建て。幸魂の愛深く。天地の間に生とし生ける萬物を損ひ破る事無
く。生成化育の大道を畏み、奇魂の智に由て。異端邪説の眞理に狂へる事を覺悟
可く。直日の御靈に由て正邪理非直曲を省み。以て眞誠の信仰を勵み、言靈の助
に依りて大神の御心を直覺り。鎮魂歸神の神術に由て村肝の心を練り鍛へしめ賜
ひて。身に觸る八十の汚穢も心に思ふ千々の迷も。被ひに被ひ、退ひに退ひ、須

彌仙の神山の静けきが如く。五十鈴川の流の清きが如く。動く事無く變る事無く。
息長く偉大く在らしめ賜ひ。世の長人、世の遠人と健全しく。親子夫婦同胞朋友
和睦びつつ。天の下公共の爲、美はしき人の鏡として。太じき功績を顯はし、天
地の神子と生れ出たる其本分を盡さしめ賜へ。總の感謝と祈願は千座の置戸を負
て、玉垣の内津御國の秀津間の國の海中の沓島神島の無人島に神退ひに退はれ。
天津罪、國津罪、許々多久の罪科を被ひ給ひし、現世幽界の守神なる、國の御太
祖國常立大神、豐雲野大神。亦た伊都の御魂美都の御魂の御名に幸へ給ひて聞食
し、相宇豆那比給ひ。夜の守日の守に守幸へ給へと。鹿兒自物膝折伏せ宇自物頸
根突抜て。恐み恐みも祈願奉らくと白す。

祖先拜詞

遠都御祖の御靈、代々の祖等、家族親族の靈。總て此祭屋に鎮祭る、御魂等の御
前を慎み敬ひ。家にも身にも枉事有らせず、夜の守り日の守りに守幸へ宇豆那比

玉^{たま}ひ。彌^{いや}孫^{ひこ}の次^{つぎ}々^{つぎ}彌^{いや}益^{ます}々^{ます}に令^さ榮^{かえ}賜^{しめ}ひて。息^{いのち}内^{なが}長^{なが}く御^{みま}祭^{つら}善^{るは}く仕^{つか}奉^へらしめ給^{たま}へと。畏^{かしこ}み^{かしこ}畏^{かしこ}み^{かしこ}も拜^{をが}み^{たて}奉^{まつ}る。

第一七章 崇^{あが}詞^{めこと}〔一五四二〕

祖^{それ}靈^{いし}社^や朝^{あさ}夕^{ゆふ}日^に拜^{つばい}祝^の詞^り

是^{これ}の祖^み靈^{たま}殿^やに齋^{いつ}き奉^{まつ}り鎮^{しづ}まり坐^ます三^{おほ}五^{もと}皇^{とす}大^め御^{おほ}神^{みか}の宇^う豆^づの大^{おほ}前^{まへ}に慎^{つし}み敬^{あや}ひ畏^{かしこ}み畏^{かしこ}み白^{まを}さく、言^{いは}巻^{まく}も畏^{かしこ}れども、大^{おほ}神^{かみ}等^{たち}の深^{ふか}き高^{たか}き御^み德^{いづ}を蒙^{かが}りて、常^{つね}も撫^なで給^{たま}ひ愛^{めで}給^{たま}へる青^{あを}人^{ひと}草^{くさ}等^ら（何^{なに}某^が家^け遠^{とほ}祖^つ代^み々^あ祖^よ等^の）の神^み靈^{たま}諸^{もろ}々^{もろ}を、此^{これ}祖^の靈^み殿^{たま}に齋^{いは}ひ鎮^{しづ}めて惟^{かむ}神^ななる大^{おほ}道^{みち}の隨^ま々^に恩^ま賴^にを幸^{さき}ひ給^{たま}ふ事^{こと}を、嬉^{うれ}み忝^{かた}み畏^{かしこ}みも稱^{たた}へ言^{ごと}竟^を奉^へらくと白^{まを}す。言^{こと}別^{わけ}て此^{これ}の靈^み舍^{たま}に齋^{いつ}き奉^{まつ}り坐^ませ奉^{まつ}る諸^{もろ}々^{もろ}（何^{なに}家^け遠^{とほ}祖^つ代^み々^あ祖^よ等^の）の神^み靈^{たま}の御^み前^{まへ}に白^{まを}さく、人^{ひと}は皇^{すめ}御^み祖^{あや}の奇^{くし}びに妙^{たへ}なる造^{むす}化^びに依^よりて天^{あま}津^つ御^み魂^{たま}を賜^{たま}はり、伊^い邪^ざ那^な岐^ぎ、伊^い邪^ざ

那美二柱の大神の生成し給ひて、天照大御神の大御光の中に養育はるる者なれば、
顯世の心の律法、身の行を惟神清く正しく務め勵みせば、天津御國の神の廷に歸
り坐して其程々に天津神の御愛顧を受けて、永く久しく仕へ奉るべき神理を尊み、
重みつつ、供へ奉る幣帛を（毎日の御饌を）平らけく安らけく聞食て、是の教の
御廷に拜み仕奉る諸人等は、異き心惡き行ひ無く、病しき事なく、煩はしき事な
く、家の業緩ぶ事なく怠る事なく、彌榮に榮しめ給ひ、夜の守り日の守りに守り
幸ひ給へと、畏み畏みも白す。

祖靈遷座祭

何々家の遠津祖、世々の祖等の御靈の御前に慎み敬ひも白さく、此の御宮を被清
めて、今日より遷し奉り坐せ奉る事を、平らけく安らけく聞食相諾ひ給ひて、彌
益々に家門高く子孫の八十續をも守幸へ給へと、種々の神饌物を捧げ奉りて、恐
み恐みも白す。

いちねんさいさいぶん
一年祭祭文

此の靈殿に齋ひ奉り坐せ奉る、
命故 毘古の神靈の御前に白さく。汝命や

現世を身退坐つるは、昨年の此月の今日と早くも一年廻れる御祭の日に成ぬ。故

常も忘る間なく、慕ひつつ花紅葉の美麗き色を見ては昔を思ひ、百鳥の囀る聲

を聞ては其世を戀ひ、種々に戀しみ偲び奉りて、此の家の守神と持齋、御前には

夜となく晝となく仕奉中にも、今日は親族家族諸人等、彌集へに集へて廣く厚く

祭祀治め奉るが故に、禮代の幣帛と種々の神饌物を百取の机に横山の如く供へ奉

りて、稱言竟奉らくを、平けく、安らけく聞食て、彌遠永に世々の祖等と御心を

一び御力を合せ給ひて、子孫の遠き世の守り、家の鎮と坐す御徳を現はし給ひ、

家門高く立榮しめ給ひ家族親族和び睦び、浦安く轉樂しく在しめ給へと畏み畏み

も白す。

辭別て何々の家の遠津御祖、世々の祖等の御前に白さく、今日はしも 毘古の

神靈の一年の御祭仕奉るとして、供へ奉る美味物を相當に聞食相諾ひ給へと、恐

み恐^{かしこ}みも白^{まを}す。

五十日^{こじふにち}間^{かん}新^{あら}靈^{みたま}拜^{はい}詞^し

命^{のみこと}、故^{もとの}の神^{みたま}靈^や、汝^{ながみこと}命^の御^み爲^{ため}には、善^よき事^{こと}議^{はか}り爲^なさむと眞^{まごころ}心を盡^{つく}して大^{おほ}神^{かみ}に乞^{こひ}祈^{のみまつ}奉^{まつ}り、善^よき事^{こと}は褒^ほめ給^{たま}ひ、過^{あやまち}あらむには宥^{なだ}め給^{たま}ひて其^{そのところ}所^を得^えしめ給^{たま}ひ、其^{そのたのしみ}樂^を極^{きは}めしめ給^{たま}へと祈^{のみまを}白^をす事^{こと}を聞^{きこしめし}食^をて、只^{ひたすら}管^をに大^{おほ}神^{かみ}を憑^{たのみ}頼^ま坐^{して}して。惑^{まど}はず多^た由^ゆ

家^か祭^{さい}祝^{のり}詞^と

畏^{かしこ}きや、命^{のみこと}の御^み前^{まへ}に白^{まを}さく、汝^{ながみこと}命^は百^{もも}年^{とせ}千^ち年^{とせ}の齡^{よはひ}を重^{かさ}ねて、世^よの長^{なが}人^{ひと}の名^なを負^おひ坐^{まさ}む事^{こと}をし、家^{うから}族^は更^{さら}なり、諸^{もろ}人^{ひと}も常^{つね}に多^た能^の母^も志^し美^み思^{おも}ひつっつ在^{あり}經^へし間^{ほど}に、現^{うつ}身の^{そみ}人^{ひと}の慣^{ならひ}と(病^{やまひ}には得^え堪^た給^{たま}はずて)現^{うつ}し世^よを離^{さかり}て幽^{かくりよ}冥^にに隠^{かく}り坐^まし天津^{あまつ}御^み國^{くに}に昇^{のぼ}り

坐しぬれば惟神の御掟の任々事議りて、神葬の禮も既功竟ぬれば、瑞の殿の内
も清らかに被ひ清めて種々の物供へ奉りて、御祭仕奉る状を平けく安らけく聞食
て、大神の廣き厚き御惠の蔭に隱ひ、浦安く、浦樂しく坐して、子孫の八十續き
遠き世に此の家の守護神と鎮り坐して、時々祭の禮をも、絶る事なく、懈る事
なく、仕奉らむ事を相諾ひ給へと、恐み恐みも白す。

せうこはらひのうた
招魂被詞

掛巻も畏き被戸四柱の大神等の大前に謹み敬ひて白さく。此郷に住る、何某、此
月日に顯世を去りぬるに因りて、其靈魂の爲に三五皇大神辭別て産土の大神に
乞祈奉り靈代を造備へて、遠く永く此家に鎮め齋ひ奉らむとす。故供へ奉る神饌
物は更なり祭員及家族親族諸人等が過犯けむ罪穢有らむには被ひ賜へ清め給ひて、
清々しく成幸へ給へと、恐み恐みも白す。

發葬被詞

掛卷も恐き被戸四柱の大神等の宇都の大前に被主、何某、畏み畏みも白さく、去
し日に顯世を神避り坐しつる何某が葬儀の祭仕奉るとして供へ奉る神饌物は更
なり、仕奉る祭員及家族親族參來集へる諸人等が過犯しけむ罪穢有らむをば、被
給ひ、清め給ひて行道をも枉神の枉事なく、清々しく發葬の式仕奉らしめ給へと、
恐み恐みも白す。

五十日閒及年祭奥都城祝詞

命故 毘古(子)の奥都城の御前に白さく、今日はしも 年(日)の御祭
仕へ奉るべき日に廻り來ぬれば、家族親族諸人打集ひて、種々の美味物供へ拜み
奉る状を平けく安らけく聞食して子孫の遠永に家をも身をも守り幸ひ給へと恐み
恐みも白す。

幽家復祭奏上詞

掛巻も畏き三五皇大神の大前に慎み敬ひも白さく。何某（靈の名）の靈は御祭仕奉るべき神胤の無きが故に、今回惟神の御教の任に任に改め齋ひて、幽家に鎮め、大神の知食す幽冥の神事に仕奉らしめむとして、今日の生日の足日の良辰に御祭仕へ奉らむとす。故神酒御饌、海川山野の種々の物を供へ奉りて乞祈白す事の状を、平けく安らげく聞食相諾ひ給ひて、彌遠永に廣く厚く恩賴を蒙らしめ給へと畏み畏みも稱へ言竟へ奉らくと白す。

復祭合祀祝詞

此の日茂呂木に齋ひ奉り坐せ奉る、何某の靈の御前に慎み敬ひも白さく。汝命等は前の御祭に洩れ落ち給ひしに依りて、今日の吉日の吉辰に、何々家代々の祖等の鎮り坐す靈祠に合祀の御祭仕奉らむとして、御前には神酒、御饌、種々の物を

取添へて仕奉らくを御心穩に聞食せと白す。抑現世の人の生ける間は言ふも更なり、死れる後の靈魂は専ら皇大神の廣き厚き御心に愛み給ひ、恵み給ひて、神の列に入らしめ給ひ、歡び樂しきを得しめ給ふ事を、丁寧に窺ひ覺りて、今も此の如く汝命等の御靈の御爲に、大神の御寵愛を乞祈奉りて、惟神の大神國風に改め齋ひ奉らくを、汝命等の御心にも嬉しき悦び平かに安かに聞食し給ひて、今日より以後は只管に大神に仕へ奉りて、高き御位に進み、彌廣に彌益々に廣所を得給ひ、何々家代々の祖等と御力を合せ、御心を一び給ひて春秋の遠永に、子孫の八十連に參出侍ひて、御祭美しく仕奉らしめ給へと、乞祈奉らくを聞食して、御心も平穩に鎮まり給へと畏み畏も白す。

被戸昇降神詞

掛卷も綾に恐き

瀬織津比賣之大神

速秋津比賣之大神
はやあきつひめのおほかみ

伊吹戸主之大神
いぶきどぬしのおほかみ

速佐須良比賣之大神
はやさすらひめのおほかみ

總て祓戸四柱の大神等
すべ はらひどよはしら おほかみたち

是の日茂呂木に降居坐し坐せ。
これ ひもろぎ おりゐま

此の日茂呂木に招ぎ奉り座せ奉る掛巻も綾に恐き
これ ひもろぎ をまつ まかけまくもあやかしこ

瀬織津比賣之大神
せおりつひめのおほかみ

速秋津比賣之大神
はやあきつひめのおほかみ

伊吹戸主之大神
いぶきどぬしのおほかみ

速佐須良比賣之大神
はやさすらひめのおほかみ

總て祓戸四柱の大神等
すべ はらひどよはしら おほかみたち

本津御座に昇り坐し坐せ。
もとつみくら のぼりま

祖靈大祭祀詞

畏かしこきや此これの靈社みたまやに鎮しづめ奉まつり齋いつき奉まつる神靈等みたまたちの御前みまへに持もち由ゆまはり謹つしみ敬みやまひも白まをさ
く。八や十日そかひ日は有あれども、今けふ日を生いくひの足たるひと選えらみ定さだめて、春はる（秋あき）の大御祭おほまつり仕つか
へ奉まつるとして、御前みまへには奥山おくやまの五い百ほ枝え眞まさ榮さ木かきを伊い伐きり來きて、時ときの花はなをも折をり添そへ
て、御饌みけは高杯たかつきに盛足もりたらはし、餅もちひの鏡かがみを八や十そ平ひら瓮かに積つみ重かさね、御酒みきは甕みかの戸へ高たか知し
り甕みかの腹はら満みて竝ならべて、海川山野うみかはやまぬの種くさぐさ々の美うまし味もの、御水みも堅ひ鹽きたしに至いたる迄まで横山よこやまの如ごとく置お
き足たらはして、家う族から親や族から諸人もろひとをも彌集いやつどへに集つどへて、齋廷ゆにはもとどろに饒にぎび笑ゑらぎ、
掌たなぞしもやららに打うちあげつつ稱たたへ言ごと竟をへ奉まつらくを、汝命等ながみことたちは現世うつしよの事こと、成なし竟をへまし
て幽冥かくりよの神かみの列つらに入りましつれば、大神おほかみの大御心おほみこころにも愛うるはしみ給たまひ撫なで給たまひて、彌いや
高たかに高たかき位くらゐに進すすみ給たまひ、彌廣いやひろに廣所ひろどを得えしめ給たまひて、現身うつそみの世よに坐ましし間ほどこそ飽あ
かず口惜くちをしく思おもひし事ことも有ありけめ、今いまはしも萬よろづの事こと等みこころ御心みこころのまにまに、足たらひ調ととのひて、
心安うらやすく轉うたた樂たぬしき事こととなも思おもひ奉まつらくを愛めで給たまひ、美うるはしみ給たまふ子孫等うみのこら家族親族うから
の悉ことごとく、汝命等ながみことたちの創はじめ給たまひ傳つたへ給たまへる御功業みいさをを、樛木つがのきの次つぎ次つぎ彌弘いやひろめに弘ひろめ、言こと

靈たまの清さやけく坐ましし祖おやの名な墜おとさず、勤つとめ締しまりて有ある状さまを聞きこしめ、清きよき名なをも高たかき功いさを
をも、今いまの世よに立たちて後のちの世よに傳つたへしめ給たまひ、幽かくりよ冥いに入りなむ後のちの靈たま魂まをも、あ
ななひ給たまひて、汝ながみこと命たち等ともと共に歡よろこび樂たのしみを得うべく、守まもり幸さきはへ給たまへと乞こひ祈のみまつ奉まつらくを、御みこ
心こころも和なごやか親かに聞きこしめ食しめして、子うみ孫のこの八やそ十つづ續づき、彌いやとほ遠なが長としごとに毎けふ年ふの今けふ日ふの御みまつり祭まつり、美うるはしく仕つかへ
奉まつらしめ給たまへと、家うから族やから親もろもろ族うづこ諸ら々ら氏まこころ子とりも等らが眞まこころ心とを取と持もちて、稱たたへ言こと竟をへ奉まつらくと白まをす。

それいしやたいさいさいしゆのりと
祖靈社大祭齋主祝詞

掛かけ卷まくも畏かしこき三おほ五もと皇とすめ大おほ御み神かみの宇う豆づの大おほ前まへに齋いはひぬし主ぼう某かしこ畏かしこみも白まをさく。
大おほ神かみ等たちの奇く靈しびに玄た妙へなる天あま津つ御み量はかりを以もて、天あめ地つちをつつくり堅かため、萬すべ物てを造う化み成なし
給たまひし中なかにも、天あめ下がしたの大おほ公み民たからはしも、三おほ五もと皇とすめ大おほ御み神かみの天あま津つ御み靈たまを皇むす産び靈たまに産むす靈たま成な
し給たまへるまにまに、諾な册ぎ二ふ柱たはしらの御み祖おや神かみの生うみ成なし給たまひ、日ひの大おほ御み神かみの養やし育なひ給たまへ
る物ものにして、元もとより清きよき明あかき神み魂たまを給たまはりて、生あれ出いでたる事こと著しるければ、惟かむ神な直らなほ
き正ただしき道みちに神かむ習ならひ恪いそまむ人ひとは、大おほ御み神かみ等たちの廣ひろき厚あつき仁みい恩つくしみ以もて彌いや榮さかえに榮さかえ往ゆく

べく守り給はむ事は、唯斯世のみに限らず、必ず後の世までも慈み育み守り給は
む事を、尊み辱みつつ八十日は有れど、今日を生日の足日と齋ひ定めて、毎年
の例のまにまに、大御祭仕へ奉るとして、奥山の五百枝眞榮木に木綿取り垂て、
御饌、御酒、海川山野の種々の美味物、御水堅鹽に至るまで、百取の机代に置き
高成して仕へ奉らくを、神慮も和かに聞食して皇大神の統治す大八洲國は堅磐に
常磐に動く事なく揺ぐ事なく敷き坐す御祭政治は春の花の清く美しく、秋の果實
の宇麻良に安らかに行はしめ給ひ、地の上に成出でむ天の益人、彌益々に繁殖て
直き正しき大和心の眞心を、一つ心に治めさせ給ひ、是の神殿に齋ひ鎮め奉る遠
津御祖の神靈等、及世々の祖等諸々の御魂等は、彌廣に廣所を得しめ給ひ、高き
位に進ましめ給ひ、參來集へる子孫の彌次々、男女の別なく、老も若も心正しく
身健かに、命長く君臣、師弟、父子、夫婦の道を始めて、人の行ふべき業は遺る
隅なく勵み勤めて、生涯は神の教に違ふ事なく、世の人をも贊け導き、各も各も
罷らむ後は、高天原に復命白さむまにまに、其行の分々に、永き世の幸福を授け
給はむ縁由をも、説き明さしめ給ひ、太き雄々しき功績を立てしめ給ひ、顯世も

幽冥も、彌遠永に守り恵み幸へ給へと各も各も玉串を持ち捧げ、乞祈奉る状を聞
食せと畏み畏みも白す。

復祭鎮祭祝詞

此の日茂呂木に齋ひ鎮むる何某家遠津御祖世々の祖等の神靈の御前に、神裔何某
に代りて、何某愼みて白さく、皇大神の御手風の萬古に復し給へる太じき御典の
まにまに今此月何日の朝日の豊坂登りを（夕日の降知を）（夜晝を）吉時と此の
神祠に、汝命等の神靈を安置奉り齋ひ奉り、是の小床に鎮め奉りて眞榊木差しは
やし、木綿取り垂でて、禮代の幣帛と奠る豊御饌の大御饌、味し御酒の大御酒を、
高杯平甕に満て竝べて、海の物、野の物、山の物、種々の果實を取添へて仕へ奉
らくを、御心穩に聞食し給ひて、家族親族は邪惡の道に惑ふ事なく、諸々過つ事
なく、攘ひ給ひて、清き赤き直き正しき眞心に、誘ひ導き給ひ、家の業をも彌獎
めに獎め給ひ、子孫の八十連五十檀八桑枝の如く立榮えしめ給ひて息長く御祭美

しく仕奉らしめ給へと、乞祈白す事を、平かに安らかに聞召して夜の守り日の守りに守り、堅磐に常磐に恵み幸へ給へと畏み畏みも白す。

鎮祭日より年祭の祝詞（年月日不明の靈）

是の日茂呂木に齋ひ奉り移し奉る何某の命（等）の御前に齋主何某慎み敬ひも白
さく、汝命（等）の御祭日詳かならねば、惟神の皇國風に改め奉りし日を、吉日
の良辰と齋ひ定めて、其が神靈（等）を慰め仕へ奉らむとして、種々の御饌物を
備へ奉りて、乞祈奉る状を相諾ひ給ひて、皇神等の任せ給ひ依さし給はむ程々の
御位に進み給ひて、枉津神の群に入り給はず、此の何々家が代々の榮を此上なき
幸と心安く、心樂しく、時々御祭を、御心も閑に享け聞食し給へと畏み畏みも
白す。

靈社月次祭祝詞

掛巻も畏き三五皇大御神の宇豆の大前に齋主何某畏み畏みも白さく、八十日は
 有れども、今日を生日の足日の良辰と選み定めて、毎月の例のまにまに月次の御
 祭典執行ひ仕へ奉らむとして御前には餅の鏡を積み重ね、大海原に住むものは鱧
 の廣物鱧の狭物、奥津藻菜、邊津藻菜、野山に生ふる物は甘菜辛菜、及種々の果
 實、御水堅鹽に至るまで横山の如く盛り高成して、平素に大神等の廣き厚き威徳
 を仰ぎ奉り、尊み辱けなみつつ在り經るを畏み奉りて、言巻も畏けれど天皇命の
 大壽命を手長の大壽命と湯津石村の如く、堅磐に常磐に茂し御代の足御代と成し
 幸ひ給ひて、遠津御祖、世々の祖等、親族諸々の神靈等の御榮を乞祈白す状を聞
 食して、三五の御教は天地と共に變りなく、月日と共に動き傾く事なく、朝日の
 豊榮登りに咲み榮えしめ給ひ、三五信徒等は本末内外を過たず、大神等の深き高
 き慈愛を過つ事なく、違ふ事なく廣め導かしめ給ひ、恩頼を蒙らしめ給へと、乞
 祈白す事を聞食し、相諾ひ給へと恐み恐みも白す。
 辭別けて遠津御祖、世々の祖等、親族家族諸々の神靈等の御前に白さく、今日は
 しも月次の御祭仕へ奉り、御饌物供へ奉りて、日毎に恩頼を蒙りつつ、不意なく

も過ち犯しけむ種々の罪穢在らむをば、見直し聞き直し坐して、親の名汚さず、
子孫の彌次々、山松の彌高々に立榮えしめ給ひ、夜の守り日の守りに守り幸へ給
へと、五十檀銚の中取持ちて恐み恐みも白す。

新祭殿月次祭祭文

此の神殿に齋き奉り坐せ奉る、掛巻も畏き三五皇大御神の御前に恐み恐みも白さ
く、月毎の例のまにまに今日の生日の足日に、御祭仕へ奉るとして、奉る幣帛は
御饌は高杯に盛足らはし、御酒は甕の戸高知り甕の腹満て竝べて、大海原に住め
る物は鰭の廣物鰭の狭物、山野に生る物は甘菜辛菜種々の果實、奥津藻菜、邊津
藻菜、御水堅鹽に至る迄、百取の机に横山の如く置足らはして稱言竟へ奉らくを、
平けく安らげく聞食して、此の靈殿に鎮ります家々の靈等をば、彌益に御靈幸ひ
給ひて、彌高に高き位に進ましめ給ひ彌廣に廣所を得しめ給ひ、參出來む親族家
族が家をも身をも守幸へ給ひ、子孫の八十續に至る迄五十檀八桑枝の如く茂久榮

に立榮えしめ給ひ、忘るる事なく、墮る事なく、御祭仕へ奉らしめ給へと白す事
を聞食し相諾ひ給へと鵜自物頸根突抜きて恐み恐みも白す。
辭別けて此の靈殿に鎮まり坐す諸々の家の御靈等の御前に白さく。今日はしも月
次の御祭仕へ奉るとして、御前をも持齋き種々の多米津物を備へ奉らくを、相嘗
に聞食して、大神等の廣き厚き大御恵を蒙り給ひて、彌廣に廣所を得しめ給ひ、
永遠に安く穩に鎮まり坐して、春秋の歡び樂しみをも極め給ひて、斷る事無く御
祭仕へ奉らしめ給へと白す。

第一八章 復祭（一五四三）

復祭奏上詞

此の神床に齋き祭り坐せ奉る

掛巻も畏き三五皇大神の大前に畏み畏みも白さく
八十日は有れど今日を生日の足日の良辰と選み定めて稱言竟奉らくは此里に住
める何某が遠津御祖世々の祖等家族親族の靈を惟神の教のまにまに改め齋ひて大
神の知食す幽冥の神事に祭らしめ給ひ、廣き厚き恩賴を蒙らしめ玉へと乞祈白す
事を平けく安らけく聞食て、諸々の靈等の邪道に惑ひ、異しき教に交りてし罪
穢は朝の深霧夕の深霧を朝風夕風の吹掃ふ事の如く掃ひ給ひ清め給ひて、各も各
も現世に在經し時に樹し功績のまにまに、伊都の御靈を幸ひ給ひて彌廣に廣所を
得せしめ給ひ、彌高に高き列に進ましめ給ひ、子孫の繼々守り幸へぬべく輔ひ給
ひ、彌遠永に春秋の歡樂をも令得給へと、御酒御饌を始め海川山野の物に種々の
果實御水堅鹽に至るまで机代に置足はして奉らくを聞食せと畏み畏みも白す。

復祭祝詞

是の何某家遠津御祖代々の祖等の御靈、諸々の神靈の御前に、何某畏み畏みも白

さく、此の天地は天なるや皇神等の修理固成しし國にして、青人草は其大神等の
神孫、持ち齋く神事は神と親とに仕へ奉る可憐道の大根元、その祭の式は萬の事
に渡る禮事の源にしあれば、顯世の人の命の盡ぬる時の神靈は神に齋ひ、屍は神
葬りし御儀式にて在りしを世の降るに従れて、諸の法興り來りしより、汝命等の
御葬事も専らその法のまにまに仕へ奉り、春秋の御祭をも諸の法の司等に委ね治
め奉りき。如斯治め祭る間に萬の古の正しき神の御法に立歸るべき惟神大道の還
り來て、神葬の道まで悉く古の直き正しき御手風に復し給ひて、廣く厚く治め給
ふ此の大御規を畏み奉り、又世の太元たる地の高天原に鎮り坐す三五皇大神等の
神諭のまにまに神靈を乞請けて、今日を生日の足日と齋ひ定めて、天津神に乞願
奉り年久しく穢し奉りし仇し教の手風を、殘る隈なく改め正して、惟神三五の禮
事以て齋き奉らむと、此の御靈舎を天の磐境と齋ひ定めて、顯世に伊坐しし時の
御功績のまにまに御名をも稱へ奉りて、新に造り備へ仕奉る御靈代に嚴の御靈を
招ぎ奉り令坐奉りて、祈の禮代の幣帛と御饌御酒御水堅鹽海川山野の種々の物を
供へ奉りて、御祭仕へ奉る状を平かに安らかに聞食て、天翔り坐しては天に坐す

大神の嚴の御魂を蒙り給ひ、御神位高く御光美はしく立榮えしめ給ひ、國翔り坐しては此の（何某家主）が總持てる家の業務をも恵み幸へ給ひ、子孫の彌次々に至るまで曲神の異しき教に惑ふ事無く、惟神の直き正しき眞の道を尊び祭り畏み奉りて、春秋の御祭典、朝夕の手向怠る事無く彌遠に彌長に仕へ奉らしめ給へと畏み畏みも白す。

復祭合祀奏上詞

此の神床に齋き祭り坐せ奉る、
掛巻も綾に畏き三五皇大神の大前に慎み敬ひも白さく、
前に何某家遠津祖、代々の祖等、家族、親族の靈を惟神の御教のまにまに改め齋りしを、其が祭に洩れ落ちたる靈の有れば、今日を生日の足日と選み定めて合祀の御祭仕へ奉らむとす。故、御酒、御饌を始め海川山野の物に雑々の果實、御水、堅鹽に至るまで、机代に盛り足はして、稱言竟へ奉らくを、平けく安らけく聞食

して諸々の靈等の邪惡の道に惑ひ、異しき教に交こらへし罪穢は攘ひ給ひ清め給ひて、現世にあり經し時に樹てし功績のまにまに嚴の御靈を幸ひ給ひて、彌廣に廣所を得しめ給ひ輔ひ給ひて、乞祈白す事の状を聞食し、相諾ひ給へと畏み畏みも白す。

復祭之由乎奏上祝詞

何某家の遠津御祖世々の祖等、家族親族の神靈の御前に敬ひて白さく、畏しや神の祭祀はしも、三粟の中津御代より外國風以て祭り仕へ來しを、此の新御世の嚴し御代の萬廢れたるを起して、古に復し給へる中にも神の祭祀の御式はも、大御國風の最も重き大御式にし在れば、神の御代より傳へ來し隨々興し給ひ定め給ひて天ヶ下公民等の亂れ惑へる心を直し正し給ひ、専ら一心に治め給はむと、教へ諭し給ふ事を尊み忝なみ畏み畏みも受給りて、其眞心の赤しと、此の小床を神床と定め齋まはり清まはり招ぎ奉りて、今日を始めと御祖神の御祭をも清き潔き大

御國風に改め仕へ奉る此の状を具に聞食して、怪み給ふ事無く荒び給ふ事無く、御心も平穩に相諾ひ給へと畏み畏みも白す。

幽冥家復祭詞

掛巻も畏き幽冥を主宰り給ふ大神の撫で給ひ愛しみ給へる何某の神靈を是の幽冥家に齋ひ鎮めて白さく、汝命等現世の人の生る間は言も更なり死れる後の魂は専幽冥事を知食す大神の廣き厚き御心に憐み給ひ恵み給ひて、神の列に入らしめ給ひ歡び樂みを得しめ給ふ事を丁寧に窺ひ覺りて、今も如此汝命（等）の大神の御寵愛を乞祈奉りて、惟神の御掟に改め齋き奉らくを、汝命等の御心にも嬉し喜び給ひ、今より後は只管に三五御諭の幽冥事に仕へ奉り給ひて、彌高に高き位に進ましめ給ひ、彌廣に廣所を得しめ給ひ、春秋の遠永に子孫の八十連に參出で侍ひて、御祭美はしく仕奉らむと爲る事を聞食し給ひて、御心も穩に鎮まり給へと畏み畏みも白す。

第十九章 復活（一五四四）

歸幽奏上

此の靈舎に齋奉る。の家の遠津御祖世々の祖等、親族、家族の神靈の御前に、
慎みて白さく、今日はしも、此家の伊、幽冥に歸りぬるが故に、其由奉
告るとして、御前には種々の物を置供へて、奉る状を聞食し相諾ひ給へと、恐
しみも白す。

墓地地鎮祭

掛巻も畏き三五皇大御神、辭別けて此所を宇斯波岐坐す、産土大神の御前に、齋
主、慎み敬ひも白さく、此處をば何某が奥都城所として、新に荒草刈外
け、下津岩根に藏し治むる事を、平けく安らけく聞食して、鳥獸、昆蟲の害無く、

大地の彌遠永に守幸へ給へと、請祈白す事の状を聞食せと、畏み畏みも白す。

招魂祭祀詞

阿波禮、命也、今如此身退り座さむとは、木綿垂の懸ても思はず、眞榮木の常磐に堅磐に座さむ事をのみ思頼めりし、親族、家族の心には、追及て歸すべき術の有らむには、留め奉らまく思ひ、活すべき方の有らむには、身にも替まく欲須禮ども、素より幽世の契有る事にして、人の力に任せ得ぬ事にし有れば、今は唯後の御祭美しく仕奉りて、御靈を慰め奉らむ外は不有と。汝命の靈璽を造り備へて謹み敬ひ招ぎ奉り、齋ひ奉る任に、速に移り來まして奠る御饌、御酒、種々の物を平けく聞食て、家の鎮め、子孫の守護神と、遠永に鎮り給ひ、大本皇大神の廣き、厚き御惠の蔭に隠るひ、彌廣に廣所を得給ひ、彌高に高き位に進み給ひて、平穩に鎮まり坐せと白す。

諡號告文
おくりなこくぶん

阿波禮、（官位俗名）之神靈の御前に、慎み敬ひ白さく、此月何日を現世の限り
と身退りまして、幽冥の神の列に入り坐しぬれば、今よりは、贈修齋等 何々
命と御名を稱へ奉らむことを平けく、安らけく聞食し相諾ひ給へと白す。

靈魂安定詞
みたましづめのことば

天晴禮 命、故 毘古の神靈也、今告申事を、美らに聞食せ。生る人の死る
事は、現身の慣と得免れぬ事にして、幽冥に入りては、現世の人として其形を見
るべき術なく、其言葉を聞くべき由も無きが故に、憂ひ悲まむは人の眞心には在
れども、遂に往く此一道の別は、人の力以て留め安敞ず、又現身古曾身退りては
土に歸れ靈魂は常久に消る事無く、神と爲る物にし有れば、今は唯神靈の御爲に、
善き事を議り爲て、只管に大神に乞祈奉るべき事になも在る。抑も人の生死は父

母の心にも任せ得ず、妻子の力にも留め敢ず、總て幽冥の契有る事にし在れば、
現身の人と有ては、皇神等の恩頼を乞祈奉りて、人と在るべき大道の任々恪み勤
めて、死りては幽冥の掟に服るひ仕へ奉らむと、眞木柱太き心を築固め、拷繩の
一筋に思ひ定めて、人は如何に毀譽むとも拘ふ事なく、唯神の御照覽し給ふ所を
愧畏み、辛苦に罹る事有るとも思ひ惑ふ事なく、愈々益々利心を起して賦け給へ
る靈魂は曇らせじ、依し給へる業は怠らじと、清く堅く節操を立てば現世の人も
尊み、大神も愛はしみ給ふ事なるを、阿波禮人の心は浮雲の動き易く、月草の移
ろひ易き物にし在れば、花紅葉の美はしきを見ては、其色香に目暗れ、百千鳥の
囀るを聞きては、其聲に耳を傾くる事の如く、波加奈久限り在る現世の樂に惑ひ
て幽冥の遠永き御恵を思はず在る類こそ憐むべき事なりけれ。然は有れども大神
の厚き大御心には其過を見直し給ひ、其罪を攘ひ給ひ除き給ひて、深き淵に落ぬ
る人を救ひ活さしめ給ふ事の如く、大海に依る邊無く漂ふ船を繋ぎ留むる事の如
く、助け給ひ、救ひ給ふ事にし有れば、其大御心を窺奉り、其教に隨ひ奉りて死
も生も恩頼の蔭に隠るる事の状を仰ぎ尊み奉るべき事になも有る。天晴禮汝命は

常に神習ひ恪しみ勤め給ひ清き明き心に人と有る道の任に忠に直しく、御國に仕奉り、廣く厚く人をも恵みて坐しければ、今幽冥に復り坐しても安く楽しく、其所を得て鎮まり坐すらめど、若し由久利奈久も過犯しけむ罪穢有らむには被ひ給ひ清め給ひて、清々しき靈魂と成幸へ給へと齋ひ鎮めて只管に大神に乞祈奉らば必ず大神は守らひ恵まひ給はむ、必大神は廣く厚く量り給はむ、此を善く思ひ、此を善く覺り給ひて、現世の飽かぬ別れに御心を惑ひ給ふ事無く、惟神の本つ心を失はず親族の乞祈む事の如く、唯一筋に大神に服ひ給ひて遠永に安く樂く鎮り給へと白す事を相諾ひ給へと白す。

發葬祝詞

阿波禮命、故毘古の柩の御前に謹み敬ひも白さく、現身の人の世は術無き物に有るかも、昨日迄は共に語ひ、共に議りて行ひしも、今日世に無き人と成りて、交ふ由無し、雖然有其神靈は常久に消ゆる事無く、神の列に入

彌榮に榮え、子孫の守護神と有るべき物なれば、汝命の神靈は此の家に齋ひ鎮
め奉りて有るも、幽冥の隔有て言問ひ語ひ奉る術も無ければ、現身の慣と如此な
がら有るべき由も無ければ、今日を御葬の日と齋ひ定めて、内外の柩の板は廣く
厚く、清く堅く作り備へて瑞の御座所と仕奉りて、遊び給ひ賞給ひし種々の物を
も取添て御輿加伎奉り、御館を出坐さしめ奉りて、御葬所の底津岩根に石垣築固
め、瑞垣結廻らして、千代の住所と齋ひ定めて、汝命の御名は、放らさず失はず、
萬代の記念に爲むと、堅石に彫しめ、奥都城の表と爲て子孫の次々、春秋の永き
世に參出候ひ、御祭仕奉るべき事議り設け置て、遷し坐せ奉らむと爲るが故に、
親族、家族を始め、常に親しみ給ひし諸人等は、蘆垣の間近き郷々は更なり、雲
居成す遠き境も風の音の疾く聞傳へて、村鳥の群り競ひ來て現世の御別れには後
れじ、今日を限の御供には洩れじと、各も各も慎み、敬ひ仕へ奉りて捧げ持つ御
旗の列正しく、竝び立つ箒持つ丁の掃清むる道の長手も所狹迄護り奉り送り奉ら
むとす、故御送の御祭仕へ奉ると爲て奉る御饌物を安御食の足御食と聞食して出
坐す道の八十隈恙み無く後も安く罷り通らして、平けく、安らけく鎮まり坐せと

白す。

埋葬祭

修齋正准等、の命や、汝命の御靈をば家内に齋ひ鎮め置きて、今如此遺體を藏めぬる御柩を、奥都城の奥深く埋め奉らむとす、今由後汝命の千代の住所と、親家族参り拜み仕奉らむ事を聞食て、石垣の動く事無く、平けく安らけく鎮り坐せと畏みも白す。

家祭式被戸祝詞

掛巻も畏き被戸四柱の大神等の大前に畏み畏みも白さく、今日はしも、修齋等(せいめい)ぬし主の神葬儀を仕奉りて、早訖ぬるに因りて、此の家の内外又、親族九族を始め、葬場に集ひし諸人等に至る迄、被ひ給ひ、清め給ひて清々しく成幸へ給へと

乞祈奉らくを、相諾ひ給へと、畏み畏みも白す。

十日及び四十日祭又年祭奏上

掛巻も畏き三五皇大御神の大前に、慎み敬ひも白さく、今日はしも
の年（或は日）の御祭仕奉るべき日にし有れば、其祭祀治め奉らむとす
る状態を聞食相諾ひ給ひて、主の靈魂を彌高に彌廣に御靈幸ひ給ひて、遠永
に御愛憐を蒙らしめ給へ、御祭美しく仕奉らしめ給へと恐み恐みも白す。

五十日合祀奏上

掛巻も畏き三五皇大御神の大前に慎み敬ひも白さく、今日はしも、故主の五
十日の御祭仕へ奉るべき日にし有れば、神靈を合せ鎮め奉る状を聞食し相諾ひ給
ひての靈魂を彌高に、彌廣に御靈幸ひて、遠永に御愛憐を蒙らしめ給ひ、御

祭美しく仕奉らしめ給へと、
恐み恐みも白す。

五十日合祀祭文

畏しや、修齋等 命の神靈を招ぎ奉りて白さく、
汝命の顯世を身罷り給ひて
より、昨日今日と過ぎ來り、流れて早き月日は、
五十日と云ふ日さへ過ぎぬれば
今日の吉日に此の靈舎に移して代々の祖等と共に
令坐奉らむと齋ひ奉りて御饗の
御饌御酒種々の物を机代に供へ稱言竟奉らく、
如斯仕奉る状を平かに聞食て天地
の共無窮に志豆宮と鎮り坐して、
家長を始め、家内の者等、
異しき心なく惡き行
ひなく己が向々有らしめず、
親子の睦び厚く、
妻子の親しみ深く
同心に恪しみ勤
めて祖の名汚さず、
生の子の次々山松の彌高々に
家門を令起給ひ、
伊迦斯屋久波
枝の如く、
牟久佐加に立榮えしめ給ひ、
御祭美しく仕奉らしめ給へと
島津鳥頸根
突き抜きて恐み恐みも白す。

とをかさいおよびやくにちさいまで
十日祭及百日祭迄の祭文 さいぶん

修齋 等 命、故 毘古の神靈の御前に白さく、汝命伊、親族家族は更なり
親しき諸人に至る迄百年千年も巖なす堅磐に常磐に坐さねと、大船の思頼みて有
しを、空蝉は術無き者にかも、去にし 年 月 日を現世の限と爲て、幽冥に歸
き給ひぬれば、現身の習と甚も惜しく、甚も懐しく思ひ、慕ふは道理には有れど
も、素より幽世の契有る事にし有れば、御葬儀をだに美はしく仕奉り、後の御祭
をも足はぬ事なく爲さむと相議り相定めて、心の限力の至極仕奉りつつも、見る
物につけ聞物に依りて左有し、右有しと偲草のみ彌繁くて、日を経る間に今日は
早くも 日の御祭の日に成ぬ。情に思へば汝命伊、現世に坐しし間は、人と有道
の任に直く正しく、國の爲にも人の爲にも忠實に恪しく坐しつれば、大神も褒め
給ひ、愛しみ給はむ事を、嬉しみ悦び彌益々に高き神の列に進み給ひ、春秋の歡
樂をも極め給ふべく、大神に乞祈奉り、善く神靈を治め奉らむとする状を見行し、
聞食て平穩に鎮り坐して、子孫の八十續家をも身をも守幸ひ給ひ、今日の御祭に

供へ奉る禮代の御饌御酒種々の物を平けく、安らけく聞食せと白す。

一年祭以上の年祭文

此の靈殿に齋奉令坐奉る修齋等命、故毘古の神靈の御前に白さく、汝
命伊、去し年月日に、現世を去り坐して今は幽冥の神の列に鎮坐が故に、
此家の守神と常も尊び敬ひ仕奉るを、今日は早くも年の御祭仕奉るべき日にも
廻り來ぬれば、御祭の式も既事竟へぬ。故此御前をも持由麻波利拜み仕奉らくを
御心も平穩に聞食て彌遠永に代々の祖等と御心を睦び、御力を合せ給ひて、子孫
の遠き世の守、家の鎮と坐す御徳を現はし給へ、親族、家族和び睦び浦安く轉樂
しく令在給へと、御饌御酒を始め、海川山野の種々の美味物を、百取の机に置足
はして恐み恐みも白す。

臨時祖靈拜詞

此の神靈殿を伊都の眞屋と齋ひ鎮むる、何々の家の遠津御祖、世々の祖等親族
族の神靈の前に白さく。汝命等の清く明き直き正しき心を以て、大神の廣き厚き
恩賴を信なひ奉りて、奇き妙なる神業を悟り奉り、諸々の人等を救ひ給ひ助け給
ひ、子孫の八十續守幸給ひ各も各も神を敬ひ、君を尊び親を幸ひ、夫婦兄弟睦ま
じく己が向々有らしめず、力を戮せ、心を一び家の業ひ緩ぶ事無く、彌遠に彌長
に守奉らむ事を嬉しみ、今日の吉日の良辰に御祭仕奉りて、種々の美味物捧げ拜
み仕へ奉らくを、相諾ひ給へと、畏み畏みも白す。

建碑除幕式祝詞

此の奥都城を、千代の住家と鎮り坐す
命、故 毘古の御靈の御前に、齋主
畏みも白さく、今回新に太く高く厳き石碑を建て設つるに依り、今日の生日
の足日に（石碑の被幕取放ち）其由告奉らくを、平けく安らけく聞食て、彌遠永
に鎮まり坐して、何々が家を、石碑の彌堅らに、石垣の動く事無く、揺ぐ事無く、

子孫うみのこの八十やそつづき續五十いかし櫃八やくはえ桑枝さくばの如ごとく茂むくさか久くさか榮さかに榮さかえしめ給たまへ、夜よの守まもり日の守まもりに守まもり
幸さきはへ給たまへと御饌みけ御酒みきを始はじめ、種々くさくさの味物うましものを百取ももとりの机つくゑに置足おきたらはして、畏かしこみ畏かしこみも白まを
す。

第五篇 金言玉辭きんげんぎよくじ

第二〇章 三五神諭おほもとしんゆその一（一五四五）

明治二十五年舊正月…日

三さんぜん世界せかい一度いちどに開ひらく梅うめの花はな、良うしろの金神こんじんの世よに成なりたぞよ。梅うめで開ひらいて松まつで治をさ

める、神國の世になりたぞよ。この世は神が構はな行けぬ世であるぞよ。今日は
獸類の世、強いもの勝ちの、惡魔ばかりの世であるぞよ。世界は獸の世になりて
居るぞよ。邪神にばかされて、尻の毛まで抜かれて居りても、未だ眼が覺めん暗
がりの世になりて居るぞよ。是では、世は立ちては行かんから、神が表に現はれ
て、三千世界の天之岩戸開きを致すぞよ。用意を成されよ。この世は全然、新つ
に致して了ふぞよ。三千世界の洗濯、大掃除を致して、天下泰平に世を治めて、
萬古末代續く神國の世に致すぞよ。神の申した事は、一分一厘違はんぞよ。毛筋
の横巾ほども間違ひは無いぞよ。これが違ふたら、神は此の世に居らんぞよ。
何れの教會も先走り、とどめに良の金神が現はれて、天の岩戸を開くぞよ。岩
戸開きのあるといふ事は、何の神柱にも判りて居れど、何うしたら開明になると
いふ事は、判りて居らんぞよ。九分九厘までは知らしてあるが、モウ一厘の肝心
の事は、判りて居らんぞよ。三千世界の事は、何一つ判らん事の無い神であるか
ら、淋しく成りたら、綾部の大本へ出て参りて、お話を聞かして頂けば、何も彼
も世界一目に見える神徳を授けるぞよ。

神となれば、スミスミまでも、氣を附けるが神の役、かみばかり好くても行けぬ、かみしも揃はねば世は治まらんぞよ。不公平では治まらん、かみしも揃へて人民を安心させて、末代潰れぬ神國の世に致すぞよ。用意を爲されよ、脚下から鳥がたつぞよ。

天地までも自由に致して、神は残念なぞよ。今の人民、盲者聾者ばかり、神が見て居れば、井戸の端に茶碗を置いた如く、危ふて見て居れんぞよ。サタンよ。今に艮の金神が返報返しを致すぞよ。

根に葉の出るは虎耳草、上も下も花咲かねば、此世は治まらぬ。上ばかり好くても行けぬ世。下ばかり宜くても此世は治まらぬぞよ。

天使は綾部に出現されてあるぞよ。至治太平の世を開いて、元の昔に返すぞよ。神柱會開きは人民が何時までかかりても開けんぞよ。神が開かな、開けんぞよ。

開いて見せうぞよ。世界をこの儘おいたなら暗黒に成るぞよ。永久は續かんぞよ。今に氣の附く人民ないぞよ。神は急げるぞよ。此世の鬼を往生さして、邪神を慈神也慈悲の雨降らして、戒めねば、世界は神國にならんから、昔の大本からの

神の仕組が、成就致す時節が廻りて来たから、苦勞はあれど、バタバタと埒を付けるぞよ。判りた守護神は一柱なりと早く大本へ出て参りて、神界の御用を致して下されよ。さる代りに勤め上りたら、萬古末代の大事業完成者であるから、神から結構に御禮申すぞよ。世界中の事で在るから、何程知恵や學がありても、人民では判らん事であるぞよ。此の仕組判りては成らず、判らねば成らず、判らぬので、改信が出来ず、岩戸開きの、末代に一度の仕組であるから、全然、學や知恵を捨てて了ふて、生れ赤兒の心に立返らんと、見當が取れん、六ヶ敷仕組であるぞよ。今迄の腹の中の、垢塵をさつぱり、放り出して了はんと、今度の實地まことは、分りかけが致さん、大望な仕組であるぞよ。

氏神様の庭の白藤、梅と櫻は、出口直の御禮の庭木に、植さしたのであるぞよ。白藤が榮えば、綾部宜くなりて未で都と致すぞよ。福知山舞鶴は外圍ひ、十里四方は宮垣内、綾部はまん中になりて、黄金世界に世が治まるぞよ。綾部は結構な所、昔から神が隠して置いた、眞誠の仕組の地場であるぞよ。

世界國々所々に、岩戸開きを知らず神柱は澤山現はれるぞよ。皆良之金神國常

立尊ちのみことの仕組しぐみで、世界せかいへ知らして在あるぞよ。大方おほかた行き渡わたりた時じ分に、高天原たかあまはらへ諸國しよこくの神かみ、守護神しゆごじんを集あつめて、それぞれの御用ごようを申まをしつける、尊たふとい世よの根ねの世よの本もとの、龍りうも門館んやかたの神かみ屋敷やしき地上ちじやうの高天原たかあまはらであるから、何なにを致いたしても大本おほもとの教をしへを守まもらねば、九分くぶく九厘りんで轉覆ひつくりかへるぞよ。皆神みなかみの仕組しぐみであるから、吾われが吾われがと思おもふて致いたして居をるが、皆みな良よしとちの金神こんじんが化ばかして使つかふて居をるのであるぞよ。此この神かみは、獨ひとり手て柄がらをして喜よろこぶやうな神かみでないぞよ。仕組しぐみの判わかる守護神しゆごじんでありたら、互たがひに手てを曳ひき合あふて、世よの本もとの御用ごようを致いたさすから、是これまでの心こころを入いれか替かへて、大本おほもとへ來きて肝腎かんじんの事ことを聞きいて、御用ごようを勤つとめて下くだされよ。三千世界さんぜんせかいの神々かみがみさま様さま、守護神しゆごじんの殿どのに氣きを附つけるぞよ。谷々たにだにの小川をがはの水みづも大川おほかはへ、末すゑで一ひとつに成なる仕組しぐみ。此處ここは世よの本もと。誠まことの神かみの住すまひどころ。神かみと惡魔あくまとの戦たたかひがあるぞよ。此このいくさは勝かち軍いくさ、神かみが蔭かげから、仕組しぐみが致いたしてあるぞよ。神かみが表おもてに現あらはれて、善ぜんへ手柄てがら致いたさすぞよ。邪神あくがみの國くにから始はじまりて、モウ一ひと戦いくさがあるぞよ。あとは世界せかいの大おほたたかひで、是これから段々だんだん判わかりて來くるぞよ。この世よは神國しんこく、世界せかいを一ひとつに丸まるめるぞよ。そこへ成なる迄までには、中々なかなか骨ほねが折をれるなれど、三千年さんぜんねん餘あまりての仕組しぐみであるから、うへに立たちて居をれる守護神しゆごじんに、チツト判わか

りかけたら、神が力を附けるから、大丈夫であるぞよ。世界の大峠を越すのは、神の申す様に、素直に致して、何んな苦勞も致す人民でない、世界の物事は成就いたさんぞよ。神はくどう氣を附けるぞよ。此事判ける身魂は、東から出て來るぞよ。此御方が御出になりたら全然日の出の守護と成るから、世界中に神徳が光り輝く神世になるぞよ。中々大事業であれども、昔からの生神の仕組であるから別條は無いぞよ。

一旦たたかひ治まりても、後の悶着は中々治まらんぞよ。神が表に現はれて、神と學との力競べを致すぞよ。學の世はモウ濟みたぞよ。神には勝てんぞよ。

明治二十六年…月…日

お照しは一體、世界一つに治める經綸が致してあるぞよ。この世は神の國であ

るから、汚食なぞは成らぬ國を、餘り汚して、神は此の世に居れんやうに成りたぞよ。世界の人民よ、改信致されよ。元の昔に戻すぞよ。ビツクリ箱が明くぞよ。神國の世に成りたから、信心強きものは神の御役に立てるぞよ。今迄は内と外とが立別れて在りたが、神が表に現はれて、カラも天竺も一つに丸めて、萬古末代續く神國に致すぞよ。良の金神は此世の閻魔と現はれるぞよ。

世界に大きな事や變りた事が出て來るのは、皆此の金神の渡る橋であるから、世界の出來事を考へたら、神の仕組が判りて來て、誠の改信が出來るぞよ。世界には誠の者を神が借りて居るから、漸々結構が判りて來るぞよ。善き目醒しも有るぞよ。亦惡しき目醒しも有るから、世界の事を見て改信致されよ。新たまりての世になるぞよ。今迄宜かりた所はチト惡くなり、惡かりた所は善くなるぞよ。上へお土が上る所もあるぞよ。お土が下りて海となる所もあるぞよ。是も時節であるから、ドウも致しやうが無いなれど、一人なりと改信を爲して、世界を助けたいと思ふて、天地の元の大神様へ、良の金神が晝夜に御詫を致して居るぞよ。この神が天晴表面に成りたら、世界を水晶の世に致すのであるから、改信を致

したものから早く宜く致すぞよ。水晶の神代に成れば、何事も世の中は思ふ様になるぞよ。水晶の靈魂を調査めて神が御用に使ふぞよ。身魂の審判を致して、神が綱を掛けるぞよ。綱掛けたら神は離さぬぞよ。元は神の直系の分靈が授けてあるぞよ。

是から世界中神國と神民とに致して、世界の神も佛も人民も、勇んで暮さすぞよ。神、佛事、人民なぞの世界中の洗濯致して、此世を直すぞよ。信心強き者は助けるぞよ。信心なきものは氣の毒ながら御出直して御座るぞよ。神は氣を附けた上にも氣を附けるぞよ。モ一ツ世界の洗濯を致して、根本から世を立直すから、世界が一度に動くぞよ。世界には何でなり共、見せしめがあるぞよ。天地の神々のお宮を建てて、三千世界を守るぞよ。世界がウナルぞよ。世界は上下に覆るぞよ。此世は神國の世であるから、善き心を持たねば、悪では永うは續かんぞよ。金神の世になれば何んな事でも致すぞよ。珍らしき事が出来るぞよ。

明治二十七年舊正月三日

燈臺下は眞暗黒。遠國から判りて來てアフンと致す事が出来るぞよ。綾部は世の本の太古から、神の經綸の致してある結構な所であるから、誠の者には流行病は封じてあるぞよ。此事知りた人民は今に一人も無いぞよ。餘り改信を致さんと世が治まりたら、萬古末代惡の鏡と致すぞよ。出口を引き裂きに來るものも出来るぞよ。本宮坪の内出口竹造、お直の屋敷には金の茶釜と黄金の玉が埋けてあるぞよ。是を掘出して三千世界の寶と致すぞよ。黄金の璽が光出したら、世界中が日の出の守護となりて、神の神力は何程でも出るぞよ。開いた口が閉まらぬぞよ。牛の糞が天下を取ると申すのは、今度の事の譬であるぞよ。昔から未だ斯世が始まりてから無き珍らしき事であるぞよ。大地の金神様を金勝要の神様と申すぞよ。今度良の金神が表に成るに就いて、此神様を陸地表面へお上げ申して、結構に御祭り申さな斯世は治まらんぞよ。昔から結構な靈魂の高い神様ほど、世に落ちて御座るぞよ。時節參りて煎豆にも花が咲きて上下にかへりて、萬古末代續く世に

成りて、神は厳しく人民は穩かになるぞよ。是を誠の神世と申すぞよ。神世になれば人民の壽命も長くなるぞよ。世界中勇んで暮す様に成るぞよ。今の人民は斯んな結構な世は無いと申して居れど、神から見れば、是位悪い世は斯世の元から無いのであるぞよ。人民と申すものは目の前の事より何も判らんから無理も無いぞよ。

明治二十九年舊十二月二日

昔の初りと申すものは、誠に難澁な世でありたぞよ。木の葉を衣類に致し、草や笹の葉を食物に致して、刃物一つ在るでなし、土に穴を掘りて住居を致したもので有りたが、天地の神々の御恵で段々と住家も立派になり、衣類も食物も結構に授けて戴く様になりたのは、皆此世を創造た、元の活神の守護で人民が結構に

なりたのであるぞよ。人民は世が開けて餘り結構になると、元の昔の活神の苦勞を忘れて、勝手氣儘に成りて、全然世が頂上へ登りつめて、誠の神の思ひを知りた人民は漸々に無くなりて、利己主義の行方ばかり致して、此世を強い者勝ちの畜生原にして了ふて、神の居る所も無い様に致したから、モウ此儘にして置いては、世界が潰れて、餓鬼と鬼との世に成るから、岩戸を開かな成らん事に、世が迫りて來たのであるぞよ。邪神が霸張りて神の國を汚して了ふて、此世は眞暗闇であるぞよ。神が表に現はれて、神力を現はして、三千世界を日の出の守護と致して、世界を守るぞよ。この世は一旦泥海に成る所であれども、金神が天の大神様へ御詫を申して、助けて戴かねば、世界の人民が可哀相であるから、何んでも人民を助けたさに神が永らく艱難苦勞を致して居れども、知りた人民は讀む程より無いので、神の經綸は延る許りであるから、此大本へ立寄りて神の御話を聞かして貰ふた人民だけなりと、改心を致して、元の水晶魂に立復りて下されよ。世が迫りて來たから、モウ何時始まるか知れんから、後でチリチリ悶え致しても、モウ仕様が無いから、何時迄も氣を附けたが、モウ氣の付け様が無いぞよ。解り

た人民から改信をして下さらんと、世界の人民三分になるぞよ。

(大正一二・四・二五 舊三・一〇 北村隆光再録)

第二章 三五神諭その二(一五四六)

明治三十一年舊五月五日

今の世界の人民は、服装ばかりを立派に飾りて、上から見れば結構な人民で、神も叶はん様に見えるなれど、世の元を創造へた、誠の神の眼から見れば、全然悪神の守護と成りて居るから、頭に角が生えたり、尻に尾が出来たり、無暗に鼻ばかり高い化物の覇張る、暗黒の世に成りて居るぞよ。虎や狼は吾の食物さへありたら、誠に温順しいなれど、人民は虎狼よりも悪が強いから、欲に限りが無いから、何んぼ物が有りても、満足といふ事を致さん、惨酷い精神に成りて了ふて、

鬼か大蛇の精神になりて、人の國を奪つたり、人の物を無理しても強奪くりたがる、惡道な世に成りて居るぞよ。是も皆惡神の靈の所行であるぞよ。モウ是からは改信を致さんと、良金神が現はれると、嚴しうなるから、今迄の様な惡のやりかたは、何時までもさしては置かんぞよ。善し惡しの懲戒は、靦面に致すぞよ。今迄好きすつ法、仕放題の、利己主義の人民は、辛くなるぞよ。速く改信致さんと、大地の上には置いて貰へん事に、變りて來るから、神が執念氣を附けるなれど、知恵と學とで出來た、今の世の人民の耳には、這入かけが致さんぞよ。一度に岩戸開きを致せば、世界に大變が起るから、時日を延ばして、一人なりとも餘計に改信さして、助けてやりたいと思へども、何の様に申しても、今の人民は聞入れんから、世界に何事が出來致しても、神はモウ高座から見物いたすから、神を恨めて下さるなよ。世界の神々様守護神殿、人民に氣を附けるぞよ。無間の鐘を打鳴して、昔の神が世界の人民に知らせども、盲目と聾者との暗黒の世であるから、神の誠の教は耳へ這入らず、獸の眞似を致して、牛馬の肉を喰ひ、一も金銀、二も金銀と申して、金銀で無けら世が治らん、人民は生命が保てん様に取違

致したり、人の國であらうが、人の物であらうが、隙間さへありたら略取ことを考へたり、學さへ有りたら、世界は自由自在に成る様に思ふて、物質上の學に深はまり致したり、女と見れば何人でも手に懸け、妾や足懸を澤山に抱へて、開けた人民の行り方と考へたり、恥も畏れも知らぬ許りか、他人は何んな難儀を致して居りても、見て見ん振りをいたして、吾身さへ都合が善ければ宜いと申して、水晶魂を惡神へ引抜かれて了ふたり、徴兵を免れようとして、神や佛事に願をかける人民、多數に出來て、國の事共一つも思はず、國を奪られても、別に何とも思はず、心配も致さぬ人民ばかりで、此先は何うして世が立ちて行くと思ふて居るか、判らんと申しても餘りであるぞよ。病神が其邊一面に霸を利かして、人民を殘らず苦しめ様と企みて、人民のすきまをねらひ詰て居りても、神に縋りて助かる事も知らずに、毒には成つても藥には成らぬものに、澤山の金を出して、長命の出來る身體を、ワヤに爲られて居りても、夢にも悟らん馬鹿な人民許りで、水晶魂の人民は、指で數へる程よりか無いとこまで、世が曇りて來て居りても、何うも此うも、能う致さん様に成りて居るくせに、弱肉強食の世の行り方をいた

して、是より外に結構な世の治方は、無いと申して居るぞよ。今の世の上に立ち
て居りて、今迄つこうに暮して居りて、神の御恩といふ事を知らずに、口先ば
かり立派に申して居りても、サア今といふ所になりたら、元來利己主義の守護神
であるから、チリチリバラバラに、逃げて了ふもの許が出て来るぞよ。今の人民
は、サツパリ悪魔の精神に化りて居るから、何程結構な事を申して知らしてやり
ても、今の今まで改信を能う致さんやうに、曇り切りて了ふたから神もモウ聲を
揚げて、手を切らな仕様が無いが、是丈神が氣を附けるのに聞かずに置いて、後
で不足は申して下さるなよ。神はモウ一限に致すぞよ。

今の人民は悪が強いから、心からの誠といふ事が無きやうになりて、人の國ま
で弱いと見たら、無理に取つて了ふて、取られた國の人民は、在るに在られん目
に遭はされても、何も言ふ事は出来ず。同じ神の子で有りながら、餘り非道い施
政で、畜生よりもモ一つ惨いから、神が今度は出て、世界の苦しむ人民を助けて、
世界中を耕掛け曳きならすのであるぞよ。今の人民は段々世が迫りて来て、食物
に困る様になりたら人民を餌食に致してでも、徹底的に行り抜くといふ深い仕組を

致して、神の國を取らうと致して、永らくの仕組をして居るから、餘程確りと腹
帯を締めて居らんと、末代取戻しの成らん事が出来して、天地の神々様へ、申譯
の無き事になるから、艮の金神が三千年餘りて、世に落ちて居りて、蔭から世界
を潰さんやうに、辛い行をいたして、經綸をいたしたので、モウ水も漏らさんや
うに致して有るなれど、神は其儘では何も出来んから、因縁ある身魂を引きよせ
て、懸りて此世の守護をいたすのであるから、中々大事業であれど、時節參りて、
變性男子と變性女子の身魂が、揃ふて守護が有り出したから、いろは四十八文字
の靈魂を、世界の大本、綾部の龍宮館にボツボツと引き寄せて、神がそれぞれ御
用を申し付けるから、素直に聞いて下さる人民が揃ふたら、三千年餘りての仕組
が、一度に實現て來て一度に開く梅の花、萬古末代萎れぬ花が咲いて、三千世界
は勇んで暮す神國になるぞよ。人民の天からの御用は、三千世界を治め、神の手
足となりて、吾身を捨てて、神の御用を致さな成らぬのであるから惡には従はれ
ぬ、尊い身魂であるのに、今の世界の人民は、皆大きな取違ひを致して居るぞよ。

明治三十二年：月：日

良の金神が出口直の手を借りて、何彼の事を知らずぞよ。今迄は世の本の神を、北の隅へ押籠めておいて、北を悪いと世界の人民が申して居りたが、北は根の國、元の國であるから、北が一番に善くなるぞよ。力の有る世の本の眞正の水火神は、今迄は北の極に落されて、神の光を隠して居りたから、此世は全然暗黒でありたから、世界の人民の思ふ事は、一つも成就いたさなんだので在るぞよ。是に氣の付く神も、人民も、守護神も無かりたぞよ。人民は北が光ると申して、不思議がりて、種々と學や知識で考へて居りたが、誠の神々が一所に集りて、神力の光りを現はして居ると申す事を知らなんだぞよ。モウ是からは、世に落されて居りた活神の光りが出て、日の出の守護となるから、其處邊中が光り輝いて、眩うて目を明けて居れんやうに、明かな神世になるぞよ。今迄の夜の守護の世界は、明の

烏と成りて来て、夜が明るから、それまでに改信を致して、身魂を研いて水晶魂に立歸りて居らんと、チリチリ悶える事が出来致すから、今年で八年の間、神は氣を附けたなれど、餘り世界の人民の心の曇りがきつき故に、何を言ふて聞かしても、筆先に書いて見せても誠にいたさぬから、出口直は日々咽喉から血を吐くやうな思ひを致して、世界の爲に苦勞をいたして居るのを、見て居る良の金神も辛いぞよ。胸に焼鐵あてる如く、一人苦みて居るぞよ。人民は萬物の長とも申し、豪さうに致して居るでは無いか。鳥獸でも、三日先の事位は知りて居るのに、人民は一寸先が見えぬ所まで曇りて居るから、脚下へ火が燃えて来て居りても、未だ氣が附かぬぞよ。能うも是だけ人民の靈魂も、曇りたものであるぞよ。障子一枚ままならぬ所まで精神を汚して置いて、何も判らぬ癖に神を下に見降して居る、人民の中の鼻高が、上へのぼりて、此世の守護をいたしても、一つも思ふやうに行きはいたさんぞよ。此世は、元の生神の守護が無かりたら、何程知識や學で考へても、何時までも世界は治まらんぞよ。一日も速く往生いたして、神の申す様に致さねば世界の人民が可哀想で、神が黙つて見て居れんから、今度は北か

ら良の金神が現はれて、世界を水晶の世にいたして、善と悪とを立別けて、善悪の懲戒を明白にいたして、世界の人民を改信させて、萬古末代動きの取れん、善一筋の世の持方を致すから、是迄の世とは打つて變りての善き世といたして、神も佛も人民も、勇んで暮す松の世、神世といたして、天の大神様へ御目に掛るのであるぞよ。夫れまでに一つ大峠が在るから、人民は速く改信いたして、神心に立還りて下されよ。神は世界を助けたさの、永い間の苦勞であるぞよ。昔の神世に立替へる時節が來たぞよ。今迄は日没が悪いと申したが、世が代ると日没が一番善く成るぞよ。日没に初めた事は、是から先の世は、何事も善き事なれば成就いたすぞよ。夫れも神をそつち除けにいたしたら、物事一つも成就いたさぬ世に變るから、何よりも改信致して、靈魂を研くが一等であるぞよ。時節が來たぞよ。モウ間が無いぞよ。

明治三十二年舊七月一日

龍門の寶を良の金神がお預り申すぞよ。龍門には寶は何程でも貯へてあるぞよ。岩戸開きが濟みて立直しの段になりたら間に合ふ寶であるぞよ。昔から此亂れた世が來るから、隠してありたのぢやぞよ。御安心なされ。良金神大國常立尊が、神功皇后殿と出て參る時節が近よりて來たぞよ。此事が天晴表に現はれると、世界一度に動くぞよ。モウ水も漏さぬ經綸が致して有るぞよ。開いた口が塞がらぬ、牛糞が天下を取るぞよ。珍らしい事が出来るぞよ。アンナものがコンナものに成りたと、世界の人民に改信致させる仕組であるから、チト大事業で有れども、成就いたさして、天地の大神へ御目に掛けるから、良の金神はカラ天竺までも鼻が届くぞよ。この仕組は永らく世に落ちて居りての、良の金神の經綸であるから、神々にも御存知ない事があるから、人民は實地が出て來る迄はヨウ承知を致さんぞよ。是でも解けて見せてやるぞよ。今度の二度目の天の岩戸開は、因縁の在身魂でない、御用には使はんぞよ。神の御役に立るのは水晶魂の選抜ばかり、

神が綱を掛けて御用を致さすのであるから、今迄世に出て居れた守護神は、思ひが大分違ふぞよ。是も時節であるぞよ。時節には何も敵はんぞよ。上下に復るぞよ。

良金神大國常立尊の三千年の經綸は、根本の天の岩戸開で有るから、惡の靈魂を往生さして、萬古末代善一つの世に致すのであるから、神の國に只の一輪咲いた誠の梅の花の仕組で、木花咲哉姫の靈魂の御加護で、彦火々出見尊とが、守護を遊ばす時節が参りたから、モウ大丈夫であるぞよ。梅で開いて松で治める、竹は邪神の守護であるぞよ。此經綸を間違はしたら、モウ此の先はどうしても、世が立ちては行かんから、神が執念う氣を付けて置くぞよ。明治二十八年から、三體の大神が地へ降りて御守護遊ばすと、世界は一度に夜が明けるから、三人の靈魂を神が使ふて、三人世の元と致して、珍らしき事を致さすぞよ。いろは四十八文字で、世を新つに致すぞよ。此中に居る肝腎の人に、神の經綸が解りて來て改信が出来たら、世界に撒配りてある身魂を、此大本へ引寄せて、神の御用を致さすから、左程骨を折らいでも經綸は成就いたすから、何事も神の申す様にして居

りて下されよ。今度の事は知識や學では到底可んから、神の申す事を素直に聞いて下さる身魂でないと、神界の御用には使はんぞよ。此の大本は外の教會のやうに、人を多勢寄せて、それで結構と申す様な所でないから、人を引張りには行つて下さるなよ。因縁ある身魂を神が引寄せて夫れ夫れに御用を申し附けるのであるぞよ。

大本の經綸は病氣直しで無いぞよ。神から頂いた結構な身魂を、惡の靈魂に汚されて了ふて、肉體まで病魔の容器になりて、元の大神に大變な不孝を掛けて居る人民が病神に憑かれて居るのであるから素の水晶魂に捻じ直して、チツトでも靈魂が光り出したら、病神は恐がりて逃げて了ふぞよ。此の大本は醫者や按摩の眞似は爲さんぞよ。取次ぎの中には、此の結構な三千世界の經綸を、取違ひ致して、病直しに無茶苦茶に骨を折りて肝腎の神の教を忘れて居る取次が多數在るが、今迄は神は見えて見ん振を致して來たが、モウ天から何彼の時節が參りて來たから、今迄の様な事はさしては置かんから、各自に心得て下されよ。是程事解けて申す、神の言葉を反古に致したら、已むを得ず氣の毒でも、天の規則に照して懲戒を致

すぞよ。今の神の取次は、誠と云ふ事がチツトも無いから、吾の目的計り致して、神を松魚節に致して、却て神の名を汚して居る、天の罪人に成りて居るぞよ。大本の取次する人民は、其覺悟で居らんと世界から出て來だすから、恥かしくなり、大本へは早速に寄せて貰へん事が出來いたすから、永らく神が出口に氣を付けさせたぞよ。もう改信の間が無いぞよ。神はチツトも困らねど、取次が可愛相なから。

良金神が表になると、一番に惡所遊びを止めさすぞよ。賭博も打たさんぞよ。家の戸締りも爲いでもよき様に致して、人民を穩かに致さして、喧嘩も無き結構な神世に致して、天地の神々様へ御目に掛けて、末代續かす松の世と致すぞよ。

明治三十四年舊三月七日

元伊勢のうぶだらひと、産釜の水晶の御水は、昔から傍へも行かれん尊い清き産水でありたなれど、今度の天の岩戸開に就いて、因縁のある靈魂に御用をさして、世を立直すには、昔の元の水晶の變らん水を汲りに遣らしてあるぞよ。良金神の指圖でないと、此水は滅多に汲りには行けんのであるぞよ。神が許可を出したら、何處からも指一本觸る者もないぞよ。今度の元伊勢の御用は、世界を一つに致す經綸の御用であるぞよ。もう一度出雲へ行て下されたら、出雲の御用を出來さして、天も地も世界を平均すぞよ。此御用を濟して下さらんと、今度の御用は分明かけが致さんぞよ。解りかけたらば速いぞよ。天の岩戸開きは水の守護と火の守護とで致すぞよ。岩戸開きを致すと申して居りても如何したら世が變ると云ふ事は、世に出て御出でる神様も御存知はないぞよ。肝腎の仕組は今の今迄申さぬと出口に申してあるぞよ。まだまだ在るぞよ。天の岩戸開と言ふ様な大望な事には、誰にも言はれん事があるのぢやが、其御用は出口でないと出來んぞよ。今度の御用をさす爲に、昔から生代り死代り、苦勞ばかりが爲して在りた、變性男子の身魂であるぞよ。此の變性男子が現はれんと世界の事が出て來んぞよ。神

柱くわい會いびら開らきは人民じんみんが何時いつまで掛かりても開ひらけんと申まをしてあるぞよ。神かみが開ひらいて見みせる
と申まをして、先さきに筆ふで先さきに出だしてあらうがな。時じ節せつが近ちか寄りたぞよ。
世界せかい一いち度どに開ひらくぞよ。一いち度どに開ひらく梅うめの花はな、金こん神しんの世よに致いたして早はやく岩いは戸と開ひらをいた
さんと、悪わるく申まをすでなけれども、此この世よは此この先さきは如何どう成なるかと言いふ事ことを御ご存ぞん知ちの
無ない神かみばかりであるぞよ。

（大正一二・四・二五 舊三・一〇 北村隆光再録）

第二章 三五神諭その三（一五四七）

明治三十四年舊六月三日

斯この世よの行ゆく先さきの解わかるのは、綾あや部べの大本おほもとの龍りゅう門もん館かたでないと、何なんぼ知ち識えきで考かんへて
も何なに程ほど學がくがありたとて、學がくがあるほど利り口こうがで出でて、解わかりは致いたさんぞよ。永ながくかか

りて仕組んだ此の大望、解りかけたら速いから、改信が一等であるぞよ。變性男子の因縁の解る世が参りて来たから、世界にある事を先繰りに、前途の事を知らせる御役であるぞよ。今度は世に落ちておいでる神々を皆世に上げねばならん御役であるから、順に御上りに成るぞよ。それに就いては世に出て御いでます萬の神様に、明治二十五年から申付けてあるが、是迄のやうな世の持方では行けんから、岩戸を開くに就いては、高處から見物では可けませんぞえと申して置いたが、時節が参りたから、一旦は世界に言ふに言はれん事が出来いたすぞよ。

明治三十五年舊七月十一日

永らく筆先に出して知らしてやりても、今の人民は疑強き故に眞に致さぬから、此中に實地を爲て見せてあるから、能く見て置かんと肝腎の折に何も咄しが無い

ぞよ。靈魂の調査いたして、因縁ある身魂を引寄して御用に使ふと申して、筆先に出してあらうがな。今度の二度目の天の岩戸開と申すのは、天の岩戸を閉める役と、開く役とが出来るのであるが、神の差添の種は、自己が充分苦勞をして人を助ける心でないと、天地の岩戸は劫々開けんぞよ。差添の種に成るのは、二十年からの筆先を腹へ締込みて置いたら宜いのであるぞよ。此中の結構な經綸が判りて來かける程、世界から鼻高が出て來るから、筆先で何麼辨解も出來るやうに書してあるから、調戲心で參りて赤恥かいて歸るものも出來るし、又誠で出て來るものもあるぞよ。目的を立てようと思ふて出て來るものもあるし、世間に解る程忙しくなるから、此寂しく致して誠を細かう判るやうに書してあるから、他の教會とは精神が違ふと申すのぢやぞよ。世界の鏡の出る所であるから、是迄に何程云ふて聞かしたとて、餘り出口を世に墜して御用が爲してありたから、疑ふ者計りで、此中の行ひがチツトも出來んゆゑ、誠の教も未だ今にさして無きやうな事であるから、此の闇の世に夜の明ける教を致しても、誰も眞に致さねど、もう夜の明けるに近うなりたぞよ。夜が明けると神の教通りに世界から何事も出て

來るから、世界は一旦は悪なるから、喜ぶものと悲しむものが出来るから、大本さへ信神致して居りたら善き事が出来るやうに思ふて、薩張り嘘ぢやつたと申してゐるなれど、出口の日々の願で、大難を小難にまつり替へた所で、何なりと神國の中にも夫々の見せしめは在るぞよ。是から先になりたら、斯様な事が在るのに何故知らせなんだと小言を申すなり、知らせねば不足を申すであらうし、亦知らせて遣れば色々と疑うて悪く申すし、人民の心が薩張り覆つてゐるから、善き事は悪く見えるし、悪きこと致すものは却つて今の時節は善く見えるが、全然世が逆さまであるぞよ。今の世界に立つ人は、一つも誠の善の事は致して居らざよ。良金神が表に現はれて世界の洗ひ替をいたすから、是からは何事も神から露見れて來るぞよ。今の世界の落ちてゐる人民は、高い處へ土持計り致して、年が年中苦しみてゐるなり。上に立ちてゐる神は悪の守護であるから、氣儘放題好き寸法。強い者勝の世の中でありたなれど見て御座れよ、是から從來の行方を根本から改正さして了ふて、刷新の世の行方に致すから、今迄に上に立ちて居りた神は大分辛う成りて來るから、初發から出口直の手と口とを藉りて、色々と世界

の靈魂みたまに申聞まをしきかしたら、近所きんじよの者ものが驚おどろいて、出口でぐちを警察けいさつへ連れ参まゐりた折をりに、警察けいさつで三千世界さんぜんせかいの大氣おほきちが違ちがひであると申まをしてあるぞよ。それでも氣違きちがひが何なにを申まをす位くらゐにより取りては居をらんぞよ。何なんでもない手てに合あふ者ものほか能よう吟味ぎんみを致いたさんのか、モチト大きな者ものを吟味ぎんみいたして世よの潰つぶれんやうに致いたさねば、此儘このままで置おいたら、警察けいさつの云いふ事こと共聞きく者ものが無なきやうになるぞよ。良金神うしと金のこんじんが現あらはれて守護しゆごをしてやらねば、神かみの國くには此状このなり態なりで置おいたら、全部さつぱり惡神あくがみに略取とられて了しまふぞよ。斯様かやうな時節じせつが参まゐりてゐるに、上かみに立たちておる守護神しゆごじんが先さきが解わからんから、岩戸いはとを開ひらいて先さきの判わかる世よに致いたすから、自己われの心こころから發根ほつこんと改信かいしんを爲するやうに成なるぞよ。良金神うしと金のこんじんが表おもてになると物もの事速ことはやいぞよ。

明治三十六年舊七月十三日

悪神の國から始まりて、大戦争が在ると申してあるが、彼方には深い大きな計畫をいたして居るなれど、表面からは一寸も見えん、良金神は日の下に經綸が致して在るぞよ。日の下は神國で結構な國ぢやと云ふ事は、判りて居れど、何を申しても國が小さいので、一呑に爲ておるから、今の精神では、戦争が始まりたら神國魂が些とも無いから、狼狽て了ふぞよ。是から段々と世が迫りて来て、世界中の大戦争となりて、窮極まで行くと、悪魔が一つになりて、皆攻めて来た折には、免ても敵はんといふ人民が、神から見ると九分まであるが、日の下はモウ敵はんと申す所で、神國魂の生神の本の性來を、出して見せて遣ると、神國魂は胸に詰りて吞めぬから悪神の守護神が、元の靈魂の力はエライものぢや、誠ほど恐いものは無いと申して、往生する所まで神國の人民は堪忍な、今度悪神が強いと見たら、皆それへ屬いて了ふから、ソコデ此の本に仕組である事を、神國の人民が能く腹へ入れて、御用を致さず身魂が二三分出來たら、其處で昔からの經綸の神が現はれて、世界を誠一つの神力で往生致さして、世界中の安心が出来るやうに致して、昔の元の神代に復すぞよ。邪神の侵略主義はモウ世が終結ぞよ。何程

人民に智慧學力が在りても、兵隊が何程澤山ありても今度は人民同志の戦争でありたら、到底敵はんなれど、三千年餘りの經綸の時節が來たので在るから、世界の中から攻めて來ても、誠には敵はん仕組が爲であるなれど、良金神、龍宮乙姫どの、日出の神が表はれんと、其處までの神力は見せんから、此の大本には揃ふて神力を積ておかんと如何爲様にも激烈うて、傍へは寄附かれん様な事が出來てくるから、身魂を能く磨いておけと申すのであるぞよ。身欲信仰して居る人民、そこへ成りてから助けて呉れと申ても其様な人民は醜しいから、傍へは寄せ附けんぞよ。能く神の心を汲取らんと、大本は天地の誠一つの先祖の神の經綸の尊い場所であるから、迂闊に出て來ても、チト異う所であるから、其處にならんと眼が覺めんから、眼醒しの在るまでに、腹の中の埃を出して置かんと、地下に成るから、執念言ふて氣を附るぞよ。

明治三十七年舊正月十日

良金神稚日女岐美命が、出口の守と現はれて、變性男子の身魂が全部現れて、斯世を構ふと餘り速に見透いて、出口の傍へは寄れん様に成ると申して在るが、何彼の時節が参りたから氣遣ひに成るぞよ。水晶の身魂でありたら、岩戸開きの折にも安心で何も無いなれど、一寸でも身魂に曇りがありたり、違つた遣方いたりしたり、混りがありたり致したら、直ぐその場で淘汰られて、ザマを晒されるぞよ。人民からは左程にないが、神の眼からは見苦しきぞよ。變性男子は大望な御役であるから、今度の御用をさす爲に、神代一代の苦勞がさしてありての事であるから何程でも此筆先は湧いて來るぞよ。岩戸開きの筆先と立直しの筆先とを、世が治まる迄書かすなり、斯世一切の事を皆書かせるから、何麼事も皆解りて來るから、誰も恥かしうなるから、改信いたせ、身魂の洗濯いたせよと、出口直の手で知らしてあるのを、疑うて居りた人民氣の毒が出來て來るぞよ。斯世が未に成りて、一寸も前へ行けんやうになりて、變性男子と女子とが現はれて、二度目

の天あまの岩戸いはとを開ひらく大望たいもうな御役おやくであるぞよ。今迄いままでの教をしへは魔法まっばふの遣方やりかたで金輪際こんりんざいの悪あしき世よの終をはりであるぞよ。

明治三十七年舊七月十二日

今いまの役員やくゐん信者しんじやは、今度こんどの戦争たたかひで世よが根本こつぽんから立替たてかはるやうに信しんじて、周章あわてであるけれど、世界せかい中の修齋たてなほしであるから、さう着々ちやくちやくとは行ゆかんぞよ。今度こんどの戦争たたかひは門口かどぐちであるから、其覺悟そのかくごで居をらんと、後あとで小言こごとを申まをしたり、神かみに不足ふそくを申まをして、折角せつかくの神徳しんとくを取外とりはうす事が出来しゆつたいいたすぞよ。變性女子へんじやうによしの筆先ふでさきは信用しんようせぬと申まをして、肝腎かんじんの役員やくゐんが反對はんたいいたして、書かいたものを残のこらず一所ひとところへ寄よせて灰はひに致いたしたり、悪魔あくまの守護神しゆごじんぢやと申まをして京きやう、伏見ふしみ、丹波たんば、丹後たんごなどを言觸ことぶれに廻まはりて神かみの邪魔じゃまを致いたしたり、悪神あくがみぢやと申まをして力一杯ちからいっぱい反對はんたいいたして、四方しほうから苦くるしめてゐるが、全然さつぱり自己われ

の眼の玉が眩んでゐるのであるから、自己の事を人の事と思つて、恥とも知らずに、狂人の眞似をしたり、馬鹿の眞似を致して一廉改信が出来たと申してゐるが、氣の毒であるから、何時も女子に氣を附けさすと、悪神奴が大本の中へ来て何を吐すのぢや、吾々は悪魔を平げるのが第一の役ぢやと申して、女子を獸類扱ひに致して、箒で叩いたり、鹽を振掛けたり、啖唾を吐きかけたり、種々として無禮を致してゐるぞよ。是でも神は、何も知らぬ盲聾の人民を改信さして、助けたい一杯であるから、温順しく致して誠を説いて聞かしてやるのを逆様に聞いて居れど、信者の者に言ひ聞かして邪魔を致すので、何時までも神の思惑成就いたさんから、是から皆の役員の目の醒める様に、變性女子の御魂の肉體を、神から大本を出して經綸を致すから、其覺悟で居るがよいぞよ。女子が出たら後は火の消えた如く、一人も立寄る人民無くなるぞよ。さうして見せんと此の中は思ふ様に行かんぞよ。明治四十二年までは神が外へ連れ参りて、經綸の橋掛をいたすから、後に恥かしくないやうに、今一度氣を附けて置くぞよ。この大本の中の者が残らず改信いたして、女子の身上が解りて來たら、物事は箱差したやうに進むなれど、

今のやうな慢心や誤解ばかりいたしておるもの許りでは、片輪車であるから、一寸も動きが取れん、骨折損の草臥儲けに成るより仕様は無いから、皆の役員の往生いたすまでは神が連出して、外で經綸をいたして見せるから、其時には又出て御出で成されよ、手を引き合ふて神界の御用をいたさすぞよ。今度の戦争で何も彼も埒が付いて、二三年の後には天下泰平に世が治まる様に申して、エライ力味やうであるが、其麼心易い事で天の岩戸開は出来いたさんぞよ。今の大本の中に唯の一人でも、神世に成りた折に間に合ふものがあるか。誤解するも自惚にも程があるぞよ。まだまだ世界は是から段々と迫りて来て、一寸も動きの取れんやうな事が出来るのであるから、其覺悟で居らんと、後でアフンとする事が今から見透いて居るぞよ。今一度變性女子の身魂を連出す土産に、前の事を概略書き残さして置くから、大切にいたして保存して置くが宜いぞよ。一分一厘違ひは無いぞよ。明治五十年を眞中として前後十年の間が岩戸開きの正念場であるぞよ。それまでに神の經綸が急けるから、何と申しても今度は止めては下さるなよ。明治五十五年の三月三日五月五日は誠に結構な日であるから、それ迄はこの大本の中

は辛いぞよ。明治四十二年になりたら、變性女子がボツボツと因縁の身魂を大本へ引寄して、神の仕組を始めるから、氣の小さい役員は吃驚いたして、逃出すものが出来て来るぞよ。さうなりたら世界の善惡の鏡が出る大本で在るから、色々の守護神が肉體を連れ参りて、目的を立てやうといたして、又女子の身魂に反對いたすものが現はれて来るなれど、惡の企謀は九分九厘で掌が覆りて、赤恥かいて歸るものも澤山あるぞよ。今の役員は皆抱込まれて了ふて、又女子に反對をいたすやうになるなれど、到底敵はんから往生いたして改心いたしますから、御庭の掃除になりと使うて下されと、泣いて頼むやうになるぞよ。腹の底に誠意が無いと欲に迷ふて大きな取違をいたして、チリチリ悶えをいたさな成らんから、今の内に胸に手を當てて考へて見るが宜いぞよ。もう是限り何も申さんから、此筆先も今度は焼捨てぬやうに後の證據にするが宜いぞよ。何方が取違であつたか判るやうに書かして置くぞよ。盲目聾が目が明いた積り、心の聾が耳が聞える積りで居るのであるから、薩張り始末が附かんぞよ。力一杯神界の御用をいたした積りで、力一杯邪魔をいたしておるのであるから、何うも彼うも手の出し様が無い

から、止むを得ず、餘所へ暫くは連参りて、經綸をいたすぞよ。今の役員チリチリバラバラに成るぞよ。

明治三十七年舊八月十日

天も地も世界中一つに丸め、枱掛ひいた如く、誰一人つづぼには落さぬぞよ。
種蒔きて苗が立ちたら出て行くぞよ。刈込になりたら、手柄をさして元へ戻すぞよ。
元の種、吟味致すは今度の事ぞよ。種が宜ければ、何んな事でも出来るぞよ。
(大正一二・四・二六 舊三・一一 於龍宮館 北村隆光再録)

第二三章

三五神諭その四(一五四八)

明治三十八年舊四月十六日

良金神國常立尊出口の守と現れて、二度目の天の岩戸開きを致すに就いては、昔の世の本から拵へてある因縁の身魂を引寄して、夫々に御用を申付けるぞよ。今度の御用は因縁無くては勉まらんぞよ。先になりたら金銀は降る如くに寄りて来るから、さうなりたら吾も私もと申して、金持つて御用さして下されと申して出て来るなれど、因縁なき身魂には何程結構に申しても一文も使ふ事は出来んぞよ。是から先になると金銀を積んで神の御用を致さして欲しいと、頼みに来るもの計りであれど、一々神に伺ひ致してからでない、受取る事は成らんぞよ。金銀に目を掛る事は相成らんから、何程辛くても今の内は木の葉なりと、草なりと食べてでも凌ぎて御用を致して居りて下さりたら、神が性念を見届けた上では何事も思ふやうに、金の心配も致さいでも善きやうに守護が致してあるぞよ。今が金輪際の叶はん辛いところであるから、茲を一つ堪りて誠を立抜きて下さりたら、神が是で善いと云ふやうに成りたら、樂に御用が出来るやうにチャンと仕組であ

るから、罪穢のある金は神の御用には立てられんぞよ。
いつも筆先で氣を付けてあるが、大本は良金神の筆先で世を開くところであるから、餘り靈學ばかりに凝ると筆先が粗略になりて、誠が却て解らんやうに成りて、神の神慮に叶はんから、筆先を七分にして靈學を三分で開いて下されよ。歸神ばかりに凝ると、最初は人が珍らしがりて集りて來るなれど、餘り碌な神は出て來んから、終には山子師、飯綱使、惡魔使と言はれて、一代思はくは立たんぞよ。思はくが建たんばかりか、神の經綸を取違ひ致す人民が出來て來て、此の誠の正味の教をワヤに致すから、永らく氣を付けて知らしたなれど、今に靈學が結構ぢや、筆先ども何に成ると申して一寸も聞入れぬが、どうしても諾かな諾くやうにして、改信さして見せるぞよ。神の申す事を反いて何なりと行りて見よれ、足元から鳥が飛つやうな吃驚が出來るぞよ。世間からは惡く申され、神には氣障と成るから、何も成就いたさずに大きな氣の毒が出來るのが見透いておるから、其れを見るのが可哀相なから、毎度出口の手で神が知らせば、肉體で出口直が書くのぢやと申して御座るが、茲暫く見て居りたら解りて來て、頭を逆様にして歩

かなならん事が出来するぞよ。誰も皆歸神で開きたいのが病癪であるから、一番にこの病癪を癒して遣るぞよ。心から發根と癒せば宜いなれど、如何しても肯かねば激しき事をして見せて眼を開けさしてやるぞよ。狐狸野天狗などの靈魂に嘲弄にいられて、夫で神國の御用が出来ると思ふのか。夫でも神國の人民ぢやと思ふて居るのか。畜生の容器にいられて夫を結構と思ふのか、神界の大罪人と成りても満足なのか。譯が解らんと申しても餘りであるぞよ。斯うは言ふものは靈魂は何時も申す通り、世界一切の事が寫るのであるから、此大本へ立寄る人民は是の遣方を見て、世界は斯んな事に成りておるのかと改信を爲るやうに、神からの靈魂が拵へて在るのであるから、誤解をいたさぬやうに御庇を取りて下されよ。他人が悪く見ると、全部自己の事が鏡に映りておるのであるから、他人が悪く見えるのは、自己に悪い所や靈魂に雲が掛りて居るからであるから、鏡を見て自己の靈魂から改信いたすやうに、此世の本から御用の靈魂が拵へてありての、今度の二度目の天の岩戸開きであるから、一寸やソツトには解る様な浅い經綸でないから改信いたして靈魂を研くが一等であるぞよ。世の本の誠の

生神は今迄は物は言はなんだぞよ。世の替り目に神が憑りて、世界の事を知らせねば成らぬから、出口直は因縁ある靈魂であるから、憑りて何事も知らせるぞよ。世が治まりたら神は何も申さんぞよ。狐狸や天狗ぐらゐは何時でも誰にでも憑るが、この金神は禰宜や巫子には憑らんぞよ。何程神憑に骨を折りたとて、眞の神は肝腎の時でないと思はんと憑らんぞよ。何も解らん神が憑りて参りて、知つた顔を致して種々と口走りて、肝腎の仕組も解らずに、天の岩戸開の邪魔をいたすから、一寸の油断も出来んから、不調法の無いやうに氣を付けてやるのを、野蠻神が何を吐す位により解りて呉れんから、誠の神も苦勞をいたすぞよ。神懸で何も彼も世界中の事が解るやうに思ふて居ると全然量見が違ふぞよ。神の申す中に聞いて置かんと、世間へ顔出しが出来んやうな、恥かしき事が出来たすぞよ。この神一言申したら何時になりても、一分一厘間違はないぞよ。髪の毛一本程でも間違ふやうな事では、三千年かかりて仕組んだ事が水の泡になるから、そんな下手な経緯は世の元から、元の生神は致して無いから、素直に神の申す事を肯いて下されよ。世界の神、佛事、人民を助けたさの永らくの神は苦勞であるぞよ。誰に因ら

ず慢心まんしんと誤解とりちがひが大怪我おほげがの元もとと成なるぞよ。

大正元年舊八月十九日

大國常立尊おほくにとこたちのみことが天晴表面あつばれおもてになりて守護しゆごにかかると、一旦いつたんは神かみの經綸しぐみどほ通りに致いたすから、改信かいしん致いたして神心かみこころに成なりて居をらんと、これから、人氣ひとぎの悪いわる所ところは何處どこでも飛火とびひがいたすから、今度は是迄これまでの見苦みぐるしき心こころを全然さつぱり捨てて了しまふて、産うぶの精神こころに成なりたらば、安全あんぜんな道みちが造つくり替かへてあるから、靈魂みたまを研みがいて善よい道みちへ乗のり替かへるやうに仕組しくんであれども、靈魂みたまに曇くもりが在ありては善よい道みちへ乗替のりかへたとて、辛つらうて御用ごようが出來できんから、發根ほつこんの改信かいしん、腹はらの底そこからの改信かいしんでない、誠まことの御用ごようは出來できんぞよ。龍宮様りゅうぐうさまを見て皆みな改信かいしんをいたされよ。昔むかしから誠まことに欲よくな見苦みぐるしき御心おこころで在ありたなれど、今度こんどの天あまの岩戸開いはとびひらきには欲よくを捨てて了しまはねば、神界しんがいの御用ごようが勤つとまらんといふ事ことが、

一番に早く御合點が参りたから、龍門のお寶を殘らず良金神に御渡し遊ばして、活潑な御働きを神界で一生懸命になりて、力量も充分に有るなり、此の方の片腕に成つて、今度の天の岩戸開の御用を遊ばすから、他の守護神も龍宮様の御改信を見て、一日も早く自己の心の中を考へて改信なされよ。大國常立尊が今表になりた所で、神界の役に立てる靈魂は一つも無いが、能くも是だけ曇りたものであるぞよ。もう神は構はんから、何彼の事を急速にいたして後の立直しに掛らんと、世界中の大事であるから、解らぬ守護神に何時までもかかりて居りたら、世界の人民が皆難澁をいたして、往きも戻りも成らんやうに成りて、戦争も濟みたでも無し、止めも刺さん事になりて、世界中の大難澁と成るから、是迄耳に蛸が出来程注意であるが、何彼の時節が迫りて來て、動きもにじりも出來ん事に世界中が成るから、諄う守護神人民に氣を附けるぞよ。

神國の人民に元の神國魂が些とありたら、茲までの難澁は無いなれど、誠一つの御魂により明されず、肝腎の事を任して爲せる事も出來ず、テンで經綸が解りて居らんから、神が使ふ身魂が無いぞよ。此の方が世界中の事をいたさなならん

から、何彼の事が一度になりて忙しうなると申すことが、毎度筆先で知らしてあらうがな。良に成りたら神靈活機臨々發揮日月と現はれて、三千世界の良を刺すぞよ。其折りに間に合ふやうに、早うから有難がりて、大本へ来て辛い修行をして居りても、肝腎の處が能く解りて居らんと、善い御用は出来んぞよ。何うなりとして引着いて居りたら、善い御用が出来ると思ふて居ると、大間違であるぞよ。良金神が初發から一言申した事は一分一厘違はんぞよ。途中から變るのは矢張り靈魂に因縁が無いのぢやぞよ。因縁のある身魂は截りても斷れん、如何な辛い目をいたしても左程苦しい事は無いぞよ。因縁性來と申すものは、エライものであるぞよ。それで今度は因縁の在る身魂が集りて来て、辛い辛抱をいたして、天地の光を出して呉れんならん。變性男子と變性女子との身魂を、茲まで化して神の御役に立てるぞよ。變性男子と女子の身魂が誰も能う爲ぬ辛抱をいたして、此世には神は無きものと、學で神力をないやうに仕て居りたのを、此世に神が有るか無いかと云ふ事を、三千世界へ天晴と天地の神力を表はせて見せて、此の先は神力の世に致すから、是からは學力で、何麼事を致しても、世の本の根本の生神の

神力には敵はんから、今の中に悪神のエライ企みを碎いて了ふから、一日も早く往生いたすが得であるぞよ。

今度の戦争は人民同志の戦争ではないぞよ。國と國、神と邪神との大戦争であるから、悪神の策戦計畫は人民では誰も能う爲ん仕組であれど、世の本の生神には敵はんぞよ。充分戦ふた所で金の要るのは程知れず、人の減るのも程は判らんぞよ。けれども出かけた船ぢや。何方の船も後方へは退けんから、トコトンまで行くぞよ。今迄の悪の守護神よ、神の國を茲までに自由にいたしたら、是に不足はもう在るまいから、充分に敵對うて御座れよ。神力と學力との力較べの大戦争であるから、負たら従うて遣るし、勝つたら従はして、末代手は出しませぬと申すとこまで、往生をさせてやるぞよ。何程學力がエラウても、神力には勝てんぞよ。大きな見誤ひを爲て居りたと云ふ事が後で氣が附いて、死物狂を致さうよりも、脚下の明い中に降伏致す方が宜いぞよ。永引く程國土はチリチリと無く爲りて了ふぞよ。邪神の企謀は何麼計略も爲てあるなれど、悪では此世は立ては行かんぞよ。神の經綸は善一つの誠實地の御道に造り代へてあるから、氣の附いた守

護神は、善の道へ立歸りて安心なされよ。惡の身魂は平げて了ふから、早う覺悟を致さんと、もう一日の日の間にも代るから、是迄のやうに思ふておると、みな量見が違ふぞよ。毎度出口直に兵糧をとつて置かねば成らんといふ事が、諄う申して在らうがな。米が有ると申して油斷をいたすで無いぞよ。人民は伶俐なものに在るなれど、先のチツトモ解らんもので在るから、筆先で何も知らすから、此筆先を大切にいたさんと、粗末にいたしたら、其場で變るやうに厳しくなるぞよ。この筆先は世界の事を、氣もない中から知らしてあるから、疑うておると後で取返しの出來ん事になるぞよ。後の後悔は間に合はんぞよ。

大正三年舊七月十一日

大國常立尊が表に現はれて日出の守護となるから、人民が各自に力一杯氣張り

て爲て来た事が、皆天地の神から爲せられて居りたと申す事が、世界の人民に了解する時節が参りて来たぞよ。日出の守護になると變性男子の靈魂が、天晴世界へ現はれて次に變性女子が現はれて、女島男島へ落ちて居りた昔からの生神ばかりが揃うて天晴世に現はれて、この泥海同様の世界へ水晶の本の生神が揃うて、三千世界の岩戸開を致すから、天地の岩戸が開けて松の世、神世と相成るぞよ。綾部の神宮坪の内の本の宮は出口の入口、龍門館が高天原と相定まりて、天の御三體の大神が天地へ降り昇りを爲されて、この世の御守護遊ばすぞよ。この大本は地からは變性男子と變性女子との二つの身魂を現はして、男子には經絲、女子には緯絲の意匠をさして、錦の旗を織らしてあるから、織上りたら立派な模様が出て来ておるぞよ。神界の意匠を知らぬ世界の人民は色々と申して疑へども、今度の大事業は人民の知りた事では無いぞよ。神界へ出てお出ます神にも御存知の無いやうな、深い仕組であるから往生いたして神心になりて神の申すやうに致すが一番伶俐であるぞよ。まだ此先でもトコトンのギリギリ迄反對いたして、變性女子を悪く申して、神の仕組を潰さうと掛かる守護神が、京、大坂にも出て来るなれ

ど、もう微軀とも動かぬ仕組が致して神が附添うて御用を爲すから、別條は無いぞよ。變性女子の靈魂は月と水との守護であるから、汚いものが参りたら直に濁るから、譯の解らぬ身魂の曇りた守護神は傍へは寄せんやうに、役員が氣を付けて下されよ。昔から今度の天の岩戸開の御用致さす爲に、坤に落してありた靈魂であるぞよ。此者と出口直との靈魂が揃ふて御用を致さねば、今度の大望は、何程伶俐な人民の考へでも物事出来は致さんぞよ。此大本は世界に在る事が皆映るから、大本に在りた事は大きな事も小さい事も、善き事も悪しき事も、皆世界に現はれて来るから、變性女子をねらふものが是からまだまだ出来て来るから、確りと致して居らんと此中は治まらんぞよ。大事の仕組の身魂であるから、惡の靈がねらひ詰めて居るから、何處へ行くにも一人て出す事は成らんぞよ。變性女子は人民からは赤ン坊なれど、神が憑りたら誰の手にも合はん身魂であるぞよ。昔の元から見届けてありての、今度の大望な御用がさして在るぞよ。人民は表面だけより見えんから、何時も大きな取違ひを致すが、是も尤もの事であるぞよ。永らく大本へ来て日々御用に使はれておるものでも、女子の事は取違ひ致して、未

だに反對致しておる位であるから、何にも聞かぬ世界の人民が取違ひをいたすのは、無理も無いぞよ。斯う申すと亦譯の解らぬ守護神の宿りてゐる肉體の人民が、肉體心を出して、出口は變性女子に抱込まれて居ると申すであらうが、其様な事の解らぬ艮金神出口直でありたら、三千年餘りての永らくの苦勞が水の泡に成るから、滅多に見違ひはいたさんぞよ。人民の智慧や學や考へで判るやうな淺い仕組は致してないぞよ。何方の身魂が一つ缺けても、今度の經綸は成就いたさんのであるから、世の本の根本から仕組で、色々と化かしてをれば、自己の靈魂が汚いから、豎からも横からも汚う見えるのであるぞよ。變性男子の身魂も變性女子の身魂も、三千世界の大化物であるから、靈魂に曇りの有る人民には見當が取れんぞよ。此大化物を世界へ現はして見せたら、如何に惡に強い守護神も人民も、アフィンとして吃驚いたして、早速には物も能う言はん事が出來するぞよ。昔の根本の世の本から末代の世まで、一度あつて二度ないと言ふやうな、大望な神界と現界の岩戸開きであるから、アンナものがコンナものに成りたと申す經綸であるから、人民では見當は取れん筈であれども、改信いたして神心に立復りた人民に

は、明白に能く判る仕組であるぞよ。世の變り目には變な處へ變な人が現れて、變な手柄をいたすぞよと、明治三十一年の七月に筆先に書いて知らしてありたぞよ。時節が近寄りたぞよ。

(大正一二・四・二六 舊三・一一 於龍宮館 北村隆光再録)

第二四章 三五神諭その五(一五四九)

大正四年舊十一月二十六日

大國常立尊が三千世界の、上中下と三段に分けてある靈魂を、それぞれに目鼻を付けて、皆を喜ぶやうに致すのは、根本の此世を創造へるよりも何程氣骨の折れる事ぢや、人民では分らん事であるぞよ。初發の惡の靈魂は惡の事なら何んな事でも出来るから、茲まで世界中を惡で搦みて了ふて、善と云ふ道は通らぬやう

に致して来た悪神の、頭を露はして、トコトン往生を爲せて、又次に中の守護神を改信さして、下の守護神も續いて改信させねば神世には成らんぞよ。下の守護神が一番に何彼のこと解らんねど、改信を致さねば、何うしても改信いたすやうに、喜ばして改信させねば、叱る計りでは改信の出来ぬ守護神も在るなり、何も解らん守護神の如何にも成らぬドウクツは天地の規則通りに致して、埒宜く致さねば仕様はモウ無いぞよ。此の先で何時迄も改信の出来ぬ悪魔に永う掛りて居りて、岩戸開きの出来んやうな邪魔を致した守護神は、氣の毒が今に出来致すぞよ。是丈け氣を付けて知らして居るのに、改信の出来ん悪魔に成り切りて居る靈魂の宿りた肉體は、可哀想でも天地から定まりた規則通りの成敗に致すぞよ。もう何時までも解らんやうな守護神を助けて置いたら、世界が總損害に成りて、茲まで神が苦勞いたした骨折が水の泡に成りて了ふぞよ。夫れでは永らく神が苦勞いたした甲斐が無くなりて、天の大神様へ申譯が立たんなり、神は守護神人民を助けたいののは、胸に一杯であるから、もう一度氣を付けて置くから、何事が出て来てても神に不足は申されまいぞよ。是からは悪神の守護神の好きな事も、悪き

事も出来んやうに、天地から埒を附けるから、何處を恨む事も出来ず、自己の心を恨める事も出来んやうになるぞよ。天地の先祖の神は、善の守護神も惡の守護神も皆を喜ばしたいと思ふて、色々と永らく氣を附けたなれど、ドウクツの蛆蟲同様の醜しき聞解の無いものは、一處へ集して固めて灰にして了ふから、惡いものに惱められて生命を取られるやうな肉體は、蛆蟲同様、惡神の眷族と、も一つ下な豆狸といふやうな論にも杭にもかからんものに弄びに遇うて居るのは、肝腎の神の綱の切れて居る身魂であるぞよ。こんな守護神の宿りて居る肉體は取拂ひに爲て了ふて此世界の掃除を初めるぞよ。

天地の先祖の苦勞の解らん身魂は、蛆蟲同様であるから、斯んな身魂は世の汚穢と成るから、神界の經綸通りに致して埒能く岩戸を開かな、後の立直しが中々大望であるから經綸通りにして見せるぞよ。さう致すと神は善一つなれど、何も解らん世界の人民が惡の守護神に引かされて、矢張り良金神は惡神でありたと申すぞよ。細工は流々仕上が肝腎であるぞよ。天地の神の御恩も判らぬやうな、畜生より劣りた、名の附けやうの無いものは、末代の邪魔になるから、天地の規則

通り規めるから、惡の守護神の中でも改信の出來たのは、今度の岩戸開きに焼拂ひになる所を救けてやるぞよ。蛆蟲の中からも救かるべき身魂が在れば擇出して善の方へ廻して遣るぞよ。

天の大神様が、いよいよ諸國の神に、命令を降しなされたら、良金神國常立尊が總大將となりて、雨の神、風の神、岩の神、荒の神、地震の神、八百萬の眷屬を使ふと、一旦は激しいから、可成は鎮まりて世界の守護を爲せるなれど、昔の生粹の神國魂の活神の守護と成りたら、此中へ來て居る身魂に申附けてある事を、皆覺えて居るであらうが、一度申した事は其様に致すから、神の申す事を一度で聞く身魂でない、充分の事は無いぞよ。もう神からは此の上人民に知らせる事は無いから、大峠が出て來てから、如何様でも改信をしますで赦して下されと何程申しても、赦す事は出來んぞよ。是程大望な昔からの仕組を今になりて變へる様な事を致して居りたら、二度目の天の岩戸開きの大きな經綸が成就致さんぞよ。根本から大洗濯を致して、末代世界の口舌が無いやうに致して、神界の害をする靈魂が、學で此世を暗闇にして了ふて、正味のない教やら、やりかたは、世の大

本もとからの教をしへでないから、途とちう中ちゆうから出で來きたものは、末まつ代だいの世よの遣やり方かたには用もちゐんぞよ。

今いまの上うへに立たちて居をる守しゆ護ご神じんは科が學くほど結けつ構こうなものは無ないと申まをして、渡わたりて來これん靈みたま魂まが、神かみを抱だき込こみて、好すき寸すつ法ぽふに致いたして、此この先さきをモひと一ひとつ惡あくを強つよくして、惡あくで末まつ代だい建たてて行ゆかうとのエライ目もく的てきでありたなれど、もう惡あくの靈みたまや學がくの世よの終をはりと成なりたぞよ。本もとの神かみ世よへ戻もどりて、天てんと地ちとの先せん祖ぞが末まつ代だいの世よを持もたねば、他ほかの靈みたま魂までは此この世よは續つづかん、口く舌ぜつの絶たえると云いふ事ことは無ないぞよ。

大おほく國くに常とこ立たち尊のみことが變へん性じやう男なん子しの靈みたま魂まの宿やどりて居をる肉にく體たいを借かりて、末まつ代だいの世よを受う取けりて、世よの本もとの生き粹すゐの誠まことの生い神がみばかりが表おもてに現あらはれて、天てん地ちの先せん祖ぞの御おて手つ傳だひで、數かずは尠すくないなれど神しん力りきは御お一ひと柱ちゆうの生い神がみの御お手て傳だひが在あり出だして、靈みたま魂まの神かみが何なに程ほど澤たく山さんでも、本もとの生い神がみの力ちからには敵かなはんから、同おなじ様やうな事ことを申まをして細こま々まと今いまに續つづいて知しらして居をるなれど、途とちう中ちゆうに出で來きた枝えだの神かみやら、渡わたりて來きて居をる修しう業げふなしの利われ己よ主義しの遣やり方かたの守しゆ護ご神じんでは、肝かん腎じんの事ことは解わかりは致いたさんぞよ。誠まことの事ことの解わかる大おほ本もとへ出でて來きて、【いろは】からの勉べん強きやうを致いたさねば、學がくは金かねを入いれた丈だけの力ちからは出でるなれど、天てん

から貰うた靈魂に附いた生來の力でないから、物質の世の間は結構でありたなれど、もう物質の世の終りとなりたから、今迄の學では二度目の天の岩戸開きには些少も間に合はんぞよ。

大正四年舊十二月二日

おほくとこたちのみことへんじやうなんし
大國常立尊變性男子の靈魂が現はれて、三千世界の三段に別けて在る御魂を、
夫れ夫れに立替へ立別けて、目鼻を附けて、先づ是で樂ぢやと申すやうに成るのは、
は、大事業であるぞよ。二度目の天の岩戸開は、戦争と天災とで濟むやうに思ふて、
今の人民はエライ取違ひを致して居るなれど、戦争と天災とで人の心が直るのなら、
埒能う出来るなれど、今度の天の岩戸開は、其んな容易い事でないぞよ。
昔からたてかへは在りたなれど、臭い物に蓋をした様な事ばかりが仕て有りたの

で、根本からの動きの取れんたてかへは、致して無いから、これ迄のやりかたは、身魂は尚悪くなりて、總曇りに成りて居るから、今度は一番に、靈魂界の岩戸開であるから、何に付けても大望であるぞよ。是程曇り切りて居る、三千世界の身魂を水晶の世に致して、モウ此の後は、曇りの懸らんやうに、萬古末代、世を持ちて行かねば成らんから、中々骨の折れる事であるぞよ。

天地の大神の思ひと、人民の思ひとは、大きな違ひであるから、何に付けても、今度の仕組は、人民では汲み取れんぞよ。人民一人を改信させるのにも、中々に骨が折れようがな。今度の二度目の天の岩戸開は、昔の初まりから出来て居る、靈魂の立替立直して在るから、悪い靈魂を絶滅して了ふてするなら、容易く出来るなれど、悪の靈魂を善へ立替へて、此世一切の事の行り方を替へて、神法をかへて、新つの世の純粹の元の水晶魂にして了ふのであるから、今の人民の思ふて居る事とは、天地の大違ひであるから、毎度筆先で氣を付けてあるぞよ。

あやべの大本の中には、世界の人民の心の通りが、皆に仕て見せてあるぞよ。世界の鏡の出る所であるから、世界に在る實地正末が、皆にさして見せて在るか

ら、色々いろいろと心配しんぱいをいたして居をるなれど、何どんなかがみも仕して見みせて在あるから、世せ界かいが良よくなる程ほど、この大本おほもとは善よくなるぞよ。今いまではモチツト、何事なにごとも思おもふやうに無ないのであるぞよ。

世せ界かいの事ことが、皆みな大本おほもとに寫うつるから、夫それで、此この中なかから行おこな状なひを善よく致いたさんと、世せ界かいの大本おほもととなる、尊たふとい所ところであるから、何事なにごとも筆ふで先さき通どほりに爲して行ゆかねばならんぞよ。是これまでの世よのやりかたは、神かみの國くにでは用もちゐられん、邪あく神がみの極ごく惡あくのやり方かたに、變かはりて了しまふて居をるのを、盲めくら者つんぼのやうな世せ界かいの人民じんみんは、知しらず知しらずに、させられて居をりたのであるから、分わからんのは尤もつともことの事ことであるぞよ。誠まことの神かみが抱だきこ込まれて、神かみの精神せいしんが狂くるふて居をるのであるから、人民じんみんが惡わるう成なるのは當あたり然まへであるぞよ。

モ一ひとつ此この先さきを惡あくを強つよく致いたして、この現なり状じょうで世よを建たてて行ゆくどいらい仕しく組みをして居をるなれど、モウ惡あくの靈みたまの利きかん時じ節せつが循めぐり環りてきて、惡あく神がみの降わた服じやういたす世よになりて來きたから、吾われの口くちから吾われが企たくみて居をりた事ことを、全さつ然ぱり白はく状じやういたす世よになりたぞよ。

世せ界かいの御み魂たまが、九く分ぶまで惡あくに化なりて、今いままで世よを持もち荒あらして來きた守しゆ護ご神じんに、改かい

信しんの出来できかけが、何どの様やうにも出来できらんから、神かみも堪かん忍にん袋ぶくろを切きらして、一作いつさくに致いたせば八は九く分の靈みたま魂たまが悪わるく成なるし、改かい信しん致いたさす暇まが、モウ無ないし、是これ程ほどこの世よに大たい望もうな事ことは、昔むかしから未まだ無ない、困こん難なんな二に度ど目めの天あまの岩いは戸と開ひらであるのに、何なにも分わからぬ厄やく雜ざ神かみに使つかはれて居をると、何なにも判わからんやうになるぞよ。

まことの行ぎやうも致いたさずに、天てん地ちの先せん祖ぞを無な視くして、悪あくのやりかたで世せ界かいの頭かしらになりて、此この先さきを悪あくをモ一ひとつ強つよく致いたして、まぜこぜで行やりて行ゆくことの初し發はつの目も的てき通とほりに此この所こまではとんと拍びやう子しに面おも白しろい程ほどの上ほり來きたなれど、此この神しん國こくには深ふかい經し綸ぐみが世よの元もとから致いたして在ありて、九く分ぶ九く厘りんまで來きたぞよ。

悪あく神がみの仕し組ぐみも、九く分ぶ九く厘りんまでは來きたなれど、モウ輪りん止どまりとなりて、前さきへ行ゆく事ことも出で來きず、後あとへ戻もどる事ことも出で來きるのが、現いま今まの事ことであるぞよ。仕し放はう題だいの利わ己れ主よ義しの行やり方かたで、末まつ代だいの世よを悪あくで建たてて行ゆくことの目も的てきが、今いままでは面おも白しろい程ほどののぼれたなれど。

神かみの國くにには、チツト外ほかの御み魂たまには判わからん經し綸ぐみが爲してあるから、人ひとも善よし、吾われも善よし、上下うへした揃そろふて行ゆかねば、國くにの奪とり合あひを爲するやうな、見み苦くる敷しい性しやう來らいでは、世よは永なが久くは

續かんぞよと申して、筆先に出して、氣を付けてあるぞよ。

斯世は善と惡とが有りて、何方でこの世が立つかと言ふことを末代續かせねば成らん世であるから、何事も天地から爲してあるのであるぞよ。吾が爲て居るのなら、何事も思ふたやうに行けんならんに、何うしても行けんのが、神から皆爲せられて居る證據であるぞよ。善の道は、苦勞が永いなれど、此の先は末代の世を續かすので中々念に念が入るぞよ。

善の行は永いなれど、善の方には、現界幽界に何一つ知らん事の無い様に、世の元から行が爲してあるから、此先は、惡の仕放題に行無しに出て來た守護神が辛くなるぞよ。如何な事も爲ておくと、何事も堪れるなれど、行無しの守護神に使はれて居ると、世の終ひの初まりの御用は勤まらんぞよ。

善と惡との變り目であるから、惡の守護神はヂリヂリ悶える様になるから、一日も早く改信致して、善の道に立歸らねば、モウこれからは貧乏動きも爲さんぞよ。善の守護神は數は尠いなれど、何んな行も爲してあるから、サア今と云ふ様に成りて來た折には、何程烈しきことの中でも、氣樂に神界の御用が出来るから、

一厘の御手傳で、神の本には、肝腎の時に間に合ふ守護神が拵へてありて、世界の止めを刺すのであるぞよ。神の國は小さうても、大きな國にも負は致さんぞよ。神國は世界から見れば、小さい國であれど、天と地との、神力の強い本の先祖の神が、三千世界へ天晴と現はれて、御加勢あるから、數は少うても、正味の御魂ばかりで、何んな事でも致すぞよ。何程人數が多うても、何の役にも立たぬ蛆蟲計りで、善い事は一つも能う爲ずに、邪魔計りを致すから、世界の物事が遅くなりて、世界中の困難であるが、未だ氣の附く守護神が無い故に、何時までも筆先で知らすのであるぞよ。

天地の御恩も知らずに、利己主義で茲まで昇りつめて來た惡の守護神に、改信の爲せかけが出来ないので、何事も遅くなりて、總損害に、上から下までの難澁となるから、明治廿五年から、今ぢや早ぢやと申して、引掛戻しに致して、氣附く様に知らしても、元からの思ひが大間違で在るから、世界の岩戸開の九分九厘と成りた所で、ジリジリ舞ふ事が見え透いて居るから、氣を附けるぞよ。天地の先祖の、思ひの判りて居る守護神と人民は、今に無いぞよ。是程暗がり

の世の中へ、世の元の正眞の水火神が揃ふて表はれても、恐い計りで、腰の抜け
るものやら、顎が外れて早速に物も能う言はん様な守護神や、人民が澤山出来る
許りで、神の目からは間に合ひさうに無いぞよ。

判りた御魂の宿りて居る肉體でありたら、何んな神徳でも授けるから、此神徳
を受ける御魂に使はれて居りたら、一荷に持てん程、神徳を渡すから、其貰ふた
神徳に光りを出して呉れる人民で無いと、持切りにしては天地へ申譯が無いぞよ。

大正五年舊十一月八日

あまり此世に大きな運否があるから、口舌が絶えんから、世界中を拵掛を引
て、世界の大本を創造た、天と地との先祖の誠で、萬古末代善一つの道で世を治
めて、口舌の無い様に致すぞよ。天は至仁至愛眞神の神の王なり、地の世界は根

本の國常立尊の守護で、神國の、萬古末代動かぬ神の道で治めるぞよ。吾好しの
行り方では、此世は何時までも立たんぞよ。この世界は一つの神で治めん事には、
人民では治まりは致さんぞよ。惡神の仕組は世が段々と亂れる計りで、人民は日
に増に、難澁を致すものが殖える許りで、誠の神からは目を明けて見て居られん
から、天からは御三體の大神様なり、地は國常立尊の守護で、龍宮様の御加勢で、
元の昔の神の經綸通りの松の世に立替致して、世界中を助けるのであるから、中々
骨が折れるぞよ。モウ時節が近よりたぞよ。用意をなされよ。脚下から鳥が立つ
ぞよ。天地の先祖の神々を粗略に致して、神は此世に無い同様にして東北へ押込
めて置いて、世界の大将に成りて、惡の血統と眷屬の何も知らぬ惡魔を使ふて末
代世を立て様と思ふて、エライ經綸をして居れど、世の本からの天地を創らへた、
其儘で肉體の續いてある、煮ても焼いても引裂いても、ビクともならん生神が、
天からと地からと兩鏡で、世界の事を帳面に附け止めてある同様に、判りて居る
から、モウ神界には動かぬ仕組が致してあるから、世界の人民は一人なりと、一
日も早く大本へ参りて、神の御用を致して、世界中を神國に致す差添へに成りて

下されよ。上下揃ふて神國の世に世界中を平均すぞよ。

今の世界の人民は、現世に神は要らんものに致して、神を下に見降し、人民よ
リエライものは無き様に思ふて居るが見て御座れよ、岩戸開の眞最中に成りて來
ると、智慧でも學でも、金銀を何程積みて居りても、今度は神にすがりて、誠の
神力でないと大峠が越せんぞよ。今度は神が此世に有るか無いかを、解けて見せ
て遣るから、惡に覆りて居る身魂でも善へ立ち返らな、神の造りた陸地の上には、
居れん様になるから、改信を致して身魂を能く研いて居らんと、何彼の時節が迫
りて來たから、萬古末代取戻しの成らん事が出來致すから、今に續いてクドウ氣
を附けるのであるぞよ。是丈けに氣を附けて居るのに聞かずして、吾と吾身を苦
しめて最後で改信を致してもモウ遅いぞよ。厭な苦しい根の國底の國へ落される
から、さう成りてから地團太踏みてジリジリ悶えても、そんなら赦してやると云
ふ事は出來んから、十分に落度の無いやうに、神がいやになりても、人民を助け
たい一心であるから、何と云はれても今に氣を附けるぞよ。

これからは筆先通りが、世界に現はれて來るから、心と口と行ひと三つ揃ふた

誠まことでないと、今こんど度かみ神かみから持もたす荷に物もつは重おもいから、高たか天あま原はらから貰もらふた荷にが持もてん様やう
な事ことでは、餘よ所そから人ひとが澤たく山さん出でて來きだすから、其その時ときに恥はづかしう無ないやうに、腹はら帶おび
を確しつり締しめて居をらんと、肝かん腎じんの寶たからを取とり外はずす事ことが出來できるぞよ。今こんど度は此この大おほ本もとに立た寄ちよ
る人じん民みんに、神かみからの重おも荷にを持もたすから、各めん々めに身み魂たまを十じふ分ぶんに研みいて置おいて下くだされ
よ。ドんナ神しん徳とくでも渡わたして、世せ界かいの鑑かがみに成なる様やうに力ちからを附つけてやるぞよ。改かい信しんと申まを
すのは何なに事ことに由よらず、人にん間げん心しんを捨すてて了しまふて、知ち識しや學がくを便たよりに致いたさず、神かみの申まを
す事ことを一ひとつも疑うたがはずに生うまあか赤こ子この様やうになりて、神かみの教をしへを守まもる事ことであるぞよ。靈み魂たま
を研みぐと申まをすのは、天てんから授さづけて貰もらふた元もとの靈み魂たまの命めい令れいに從したがふて、肉にく體たいの心こころを捨す
て、本ほん心しんに立たち返かへりて、神かみの申まをす事ことを何なに一ひとつ背そむかん様やうに致いたすのであるぞよ。學がくや知ち
識しや金かねを力ちからに致いたす内うちは、誠まことの靈み魂たまは研みぐて居をらんぞよ。

この天あまの岩いは戸と開ひらきを致いたすには、學がくでも、俐り巧かうでも、知ち識しでも、金きん銀ぎんでも、法は律りつで
も、行ゆかんぞよ。兵へい隊たい計ばかりの力ちからでも行ゆかず、今いまの政せい治ちの行やり方かたでは、猶なほ行ゆかず、
今いま迄までの色いろ々いろの宗しう教けうでも猶なほ行ゆかず、今いまの學がく校かうの教をしへでも行ゆかず、根こん本ぼんの天あまの岩いは戸と開ひらき
あるから、今いまの人じん民みんの思おもふて居をる事こととは、天てん地ちの相さう違みであるから、世せ界かいの人じん民みんが

誠にいたさんから神は骨が折れるのであるぞよ。天地の間の只の一輪咲いた梅の花の經綸で、萬古末代世を續かすのであるから、人民には判らんのも尤もの事であるぞよ。

九つ花が咲きかけたぞよ。九つ花が十曜に成りて咲く時は、萬古末代しほれぬ神國の誠の花であるぞよ。心の善きもの、神の御役に立てて、末代神に祭りて此世の守護神といたすぞよ。此世初まりてから、前にも後にも末代に一度より無い、大謨な天の岩戸開であるから、一つなりとも神の御用を勤めたら、勤め徳であるぞよ。それも其人の心次第であるぞよ。神は無理に引張りは致さんぞよ。

是だけ蔓りた惡の世を治めて、善一つの神世に致すのであるから、此の變り目に辛い身魂が多人數あるから改信々々と一點張りに申して、知らしたのであるぞよ。早い改信は結構なれど、遅い改信は苦しみが永い許りで、何にも間に合はん事になるぞよ。良金神で仕組致して、國常立尊と現はれて、善一つの道へ立替るのであるから、經綸通りが世界から出て來だすと、物事が早くなるから、身魂を磨いて居らんと、結構な事が出て來ても、錦の旗の模様が、判らんやうな事では

成らんぞよ。今迄苦勞いたした事が、水の泡になりてはつまらんから、
大本の辛
い行を勇んでいたす人民でありたら、神が何程でも神力を授けるから、
ドウゾ取
違ひをせぬやう慢心の出ぬ様に心得て居りて下されよ。世界の神、佛、
耶、人民
の爲に、神が永らく苦勞を致して居るぞよ。

(大正一二・四・二七 舊三・一二 於龍宮館 北村隆光再録)

第二十五章 三五神諭その六(一五五〇)

大正六年舊二月九日

神の國には、世の根本の大昔から、天地の先祖が仕組が致してあるので、
二度
目の天の岩戸開は末代に一度より爲られぬのであるから、何に附けても大謨な事
であるぞよ。肝腎の事は、あとへ廻はして何も知らぬ厭な方の神や、
下劣の守護

神が大事の仕組も知らずに、利己主義の經綸でここまでトントン拍子に出て来たなれど、九分九厘といふ所で往生致さなならん世になりたぞよ。

九分九厘の御魂が天地の御恩といふ事が判りて来たなれば、現世は斯んな惨い事に成りはせんなれど、盲目や聾と同じ事で、全然暗黒界であるぞよ。今の守護神と人民とは岩戸開の手傳致すどころか、大きな邪魔を致すぞよ。悪の方から見れば、誠の方が悪に見えて、悪の方が善く見えるので、何事も皆逆様ばかりより出来るのであるぞよ。

悪の守護神が大本の中へ這入りて来て、何彼の邪魔を致すから、氣ゆるしは些とも出来んから、物事が遅くなりて、世界中の苦しみが永うなると申す事が毎度筆先に出して知らしてあるぞよ。大本には、世界の事が映るから、大本の中の様子を見て居りたら、世界の事の見當が、明白に判りて来るぞよ。筆先に一度出した事は、チト速し遅しは在るなれど、毛筋も違はん事許りであるから、皆出て来るぞよ。靈の本の國と申しても、惨い事に成りて居るのを、知りて居る守護神も、人民も、誠になさげ無いほど尠いから今の世界の困難であるぞよ。神國魂と申し

て威張りて居れど、神國魂の性來はチツトも無いやうに惨い事になりて居るぞよ。
世界を一つに丸めて、神國の世に致すには、此世を拵へた天と地との根本の眞
で治める時節が参りて來たから、明治二十五年から今に續いて知らしてあるぞよ。
世界の今度の大戦争は世界中の人民の改信の爲であるぞよ。まだまだ是では改信
が出来ずに、神の國を取る考へを致して居るぞよ。神の國は神の誠の守護致して
ある國であるから、何程邪神に神力が澤山ありたとて、知識や學がありたとて、
神國には到底も叶はん仕組が世の本から致してあるから、九分九厘で掌を返して、
萬古末代潰れぬ守護を致して三千世界を丸めて人民を安心させ、松の世、仁愛神
の世、神世といたして、天地へ御目に掛ける時節が近うなりたぞよ。天地の間に
一輪咲致梅の花、三千世界を一つに丸めて一つの王で治めるぞよ。惡神のしぐみ
は、今迄はトントン拍子に來たなれど、九分九厘でもう一足も先へも行けず、後
へも戻れず、行きも歸りも成らんといふのが、今の事であるぞよ。茲へ成りた所
で、惡神の頭が充分改信を致して、善へ立返りて、善の働きをいたさんと、世界
中の何も知らん人民が、此先でエライ苦しみを致すぞよ。此の大本の中にも、惡

の身魂みたまの守護神しゅごじんが化ばけて來きて居をるが、もう化ばけを現あらはして、皆みなに見みせてやるぞよ。

大正七年舊正月十二日

三千世界さんぜんせかい一度いちどに開ひらく梅うめの花はな、良金神うしろのこんじんの守護しゅごの世よになりたぞよ。明治二十五年めいぢにじふごねんから出口直でぐちなほの手てを借かり口くちを借かりて知しらした事ことの、實地じつちが現あらはれる時節じせつが近寄ちかよりて來きたぞよ。今迄いままでの世よは惡神あくがみの霸張はばる世よで何事なにことも好すき寸法すつぽふ、利己主義われよしの行やり方かたで、此この世よを亂みだして來きたが、モウ是これからは昔むかしの元もとの生神いきがみが世よに現あらはれて、三千世界さんぜんせかいを守護かまふやうに時節じせつが參まゐりたから、思おもひの違ちがふ守護神しゅごじん人民じんみんが大多數たつびつに出來でて來くるぞよ。今こん度の二度目にどめの天あまの磐戸いはとびら開ひらきは、惡あくの身魂みたまが毛筋けすぢの横巾よこはばでも混まじりてありたら成就じやうじゆいたさぬ大謨たいもうな末代まつだいに一度いちどより爲しられん神界しんかいの經綸しぐみであるから、茲ここまで惡神あくがみの霸張はばりた暗黒くらがりの世よを生粹きつすゐの水晶すいしやうの如やうな明あきらかな、何時いつまでも變かはらぬ神世かみよに致いたさねば成な

らぬから、神も中々骨の折れる事であるぞよ。

昔の三口ク様の純粹の、何時になりても變らぬ其儘の祕密の經綸の凝結で、未
代動かん巖に松の仕組、何神にも解らぬ様に爲てある善一つの誠の道であるから、
途中に精神の變るやうな身魂では出來も致さず、判りもせぬぞよ。此世の元を創
造へて、世界中の一切の事、何一つ知らんといふ事のない身魂でないと、今度の
二度目の天の岩戸開は、世界を創造へるよりも、何程骨が折れるか知れんぞよ。
限り無しの潰されぬ末代の經綸、天の岩戸開といふことは、爰まで惡神が覇張り
て、モ一つ奸賢しこう人民をいたして、未だ未だ惡神の力を強くして、善神の道
は立てさせぬ如うに體主靈從主義で貫く、仕組を致して居るから、神國の人民は
餘程魂を研いて、水晶魂を元に研いて光を出して置かねば、萬古末代邪神の自由
に爲られて了ふぞよ。

昔から露國へ上りて居りた惡神の頭目が、モ一つ向ふの國へ渡りて、人民の頭
を自由自在に、吾の思惑どほりに惡を働き、世界中の大困難を構はず、何處まで
も暴れて暴れて暴れまはして世界を苦しめ、又露國を自由に致して吾の手下に附

けて、今に神國へ出て來る經綸を致して居るが、そんな事にビクつく如うな守護神、人民でありたら到底續きは致さんぞよ。是から神が蔭から手傳ふて軍隊に神力を附けて與るから、今度は大丈夫であれども、國と國同士が戦争は到底叶はんと申して、可い加減な事で仲直りを致して、一腹になつて、今度は押詰めて來るから、守護神も人民も腹帯を締て掛らな、萬古末代取返しの出來ん事になるぞよ申して、明治二十五年から出口直の手を藉り口を藉りて、知らして置いた事の實地が、迫りて來たぞよ。邪神は惡が強いから、ドコ迄も執念深う目的の立つ迄行り通すなれど、九分九厘と云ふ所まで來た折に、三千年の神が經綸の奥の手を出して、邪神を往生いたさすので在るから、大丈夫であれども、罪穢の深い所には罪穢の借錢濟しが在るから今の中に改信を致さんと、神國にも酷しい懲罰が天地から在るぞよ。靈主體從主義の行り方で、末代の世が立つか、體主靈從の施政方針で世が末代續く乎、今度は善と惡との力量比べであるから、勝ちた方へ末代從うて來ねばならぬぞよ。それで神界は茲まで煉に煉たので在るぞよ。

この先に善一つの誠の道を立貫かねば、斯世に安住て貰へんやうに酷しく成る

から、爰まで永らく言ひ聞かしたので在るぞよ。善と悪との境界の大峠であるから、爰まで充分に煉らねば、悪の性來には聞けんから、今の今まで煉りたのであるが、チツトは腹へ浸み切りて居る身魂が在るであらう。爰まで言ひ聞かしても判らん如うな身魂は、體能く覺悟をいたさんと、是迄のやうな心で居りたなら、又天地を汚して了ふから、善へ心底から従ふ身魂で無いと、今迄の如うな心の人民が在りたら總損害になりて、モ一つ遅れるから、良金神も助けて遣る事も出来ず、天の御三體の大神様へ申譯が無いやうな事になりて來るから、止むを得ず氣の毒でもモウ經綸どほりに致すぞよ。天の岩戸開が段々と近寄りたから、是までの如うな事には行かんから、一か八かと云ふ事を、悪の頭に書いて見せて置くがよいぞ。今の番頭のフナフナ腰では、免ても恐がりて、コンナ事を書いて見せて遣るだけの度胸はありは致すまいなれど、神の申すやうに致したら間違は無いぞよ。一の番頭の守護神が改信が出来たら、肉體に胴が据わるなれど、到底六ヶ敷いから、今に番頭が取替へられるぞよ。モウ悪の頭の年の明きであるから、悪い頭から取拂ひに致すぞよ。何事も時節が一度に参りて來て、世界中の困難が到來

すると云ふ事が、毎度申して知らした事が實地になりて、一度に開く梅の花、追々分らなんだ事が明白に判りて来て、キリキリ舞を致さな成らん、夜の目も眠られん如うな事に成ると申して置いたが、一度筆先に出した事は皆出て来るぞよ。能く念を押して置くぞよ。念に念を押して、クドイと云はれて復念を押してあるから、モウ是からは神界の事情も能く解る様に一度に成りて来るから、誠で無いと、此先は誠一つの善の道が拵へて在るから、一日も早く善の道へ立復りて、神國魂に捻ぢ直して下されよ。惡の世は齡が短いから、體主靈從の身魂が大變困む事が出来るから、明治二十五年から怒られる程申して在りたぞよ。人民は男も女も腹帶を確り締めて掛らんと、一旦は堪れん如うな混雜になるぞよ。

明治二十五年から煩いと申して怒られもつて、今に岩戸開の筆先を書かして居るぞよ。何時までも同じ事に間々に細々能く判る様に抜目の無い様に知らしたなれど、ソナ事が在るものかと申して、今に疑うて居る人民許り、實地が出て来て青白い顔をして、腰が抜けて足も立たず、腮が外れて足が上に成り、頭が下に成りて、ソコラ中を又タクラな成らん事が出て来るぞよと知らして在るが、モウ

近うなりて來たぞよ。惡の昇るのは迅いなれど、降るのも亦速いぞよ。善の分るのは手間が要るなれど、善の道の開けたのは、萬古末代の榮えであるから、爰まで惡開けに開けた世界を、根本からあらためて、今後は體主靈從主義といふ様な醜しき世は無い如うに致すのであるから、是ほど大望な事は末代に一度ほか爲られんのであるから、神も中々骨が折れるぞよ。是程世界中が曇り切りて居る世の中を、水晶に致すのであるから、骨が折れるのも當然であるぞよ。斯の極惡の世の岩戸を開いて、末代口舌のないやうに、大神様の善一つの世に、立直しをいたさねば、世界の苦舌が絶えんから、人民の心が惡なる許り、何時になりても國の奪り合ひ計りで、治まりは致さんぞよ。

神の國は本が靈主體從であるから、誠に穩かにありたなれど、世が逆様に覆りて今の状態であるぞよ。薩張り上下へ世が覆りて了ふて、神國に惡神が渡りて來て、上から下まで醜しさと云ふものは、天地の誠の神からは、眼を開けて見る事が出来んぞよ。斯世を結構と申して大きな取違ひを爲て居りて、良いと云ふ事も悪いと云ふ事も、可非の判らん見苦しき世が、一旦は出て來ると申す事は、地球

を創造へる折から良く判りて居るので、外の身魂では能う爲もせず解りも致さんぞよ。一輪の火水（言靈）の經綸がいたして在りて先が見え透いて居るから、爰まで辛い事も堪り詰めて來られたのであるぞよ。今度の二度目の岩戸開きは、知識でも學でも機械でも、世界中の大戦ひには、手柄は出來んぞよ。何程惡の頭でも到底是からの世は今迄の行方では行かんと云ふ事に氣が附いて、綾部の大本へ今の内に願ひに來る守護神でありたら、善一つの道へ乗替へさして、末代の世を構はして、毛筋の横巾も惡の性來の混りの無い結構な神代に助けて遣るから、早く改信なされよ。何程我を張りて見ても時節には叶はんぞよ。善一筋の純粹で末代の世を立てて行く結構な仕組の解る世が参りて來たから、爰までに知らしても未だ今に成つて疑うて居る守護神や人民許りで、可憐相なもののなれど、モウ神からは人民に知らせ様が無いから、何時までも邪魔を致す極惡の頭から平げると云ふ事を、永らく筆先で知らしてある通りに、時節が迫りて來るぞよ。餘り何時までも高上りをして居ると、時分の過ぎた色花の萎れる如く、今日の閒にも手の掌が覆るぞよ。今の中に發根からの改信が一等であるぞよ。疑

うて居りて何事が出来しても神はモウ知らんぞよ。

悪の靈を抽抜いて元の水晶の靈と入替へて遣ると申して、爰まで知らして在るなれど、餘り世界の靈魂が悪澁とうて手に合はんから、皆の靈魂が悪シブト性來に成り切りて居るから、言ひ聞かした位に聞く如うな優しい靈魂はありはせんぞよ。今の人民は悪のやり方が良く見えるのであるから、何程言ひ聞かしても聞きはせぬぞよ。困つたものであるぞよ。是ほど良い國は無いと心に錠を降して了ふて居るから、何程實地の事を言ひ聞かしても、逆様計りに取るから、助けてやり様が無いぞよ。是れもモチト先に成りたら、大きな取違ひを致して居りたと云ふ事が、上へあがりて覇の利いて居りた神に自然的に判りて來るぞよ。今迄の様に自分好しの目的は、トントン拍子には行かぬ如うになるぞよ。

世界の人民確り致さんと、今に大變な事になりて來るから、何れの國も危ないと申して、彼方此方へと狼狽へまはりて、行く所に迷ふぞよ。神道を守護致す誠の所は、綾部の大本より外には無いぞよ。綾部は三千年餘りて、昔からの神の經綸の致してある結構な所であるから、大本の教を聞いて居る守護神は餘程シツカリ

いたして居らんと、油斷が在りたら肝腎の經綸を他國から取りに来るぞよ。何程
奪らうと致しても神が奪らしは致さんなれど、物事が遅れるだけ世界の困難が永
びくから、充分に覺悟をいたして正勝の時の御用を勤めて下されよ。三千世界の
鏡の出る大本であるぞよ。今の人民は神がいつまで言ふて聞かしても、人を威す
位にほか能う取らんから、一度にバツイても間に合はんぞよ。俄の信心は役に
立たぬから、常から信心いたせと申して爰まで氣を附けてあるぞよ。善の行り方
と惡の行り方を末代書いて遺す綾部の大本であるから、變性男子の書いた筆先
を、坤金神が變性女子と現はれて説いて聞かして、守護神人民に改信を致さず御
役であるから、世界の人民よ、眞の事が聞き度くば綾部の大本へ参りて來て、細々
と聞かして貰ふたら、世界の事が心相應に解りて來て世界に何事ありても驚きは
致さんやうになるぞよ。

昔からの極惡神の頭が神國の人民を一人も無いやうに致す仕組を爲て居るなれ
ど、神國にも根本から動かぬ經綸が致して在るから、國も小さいし、人民も尠い
なれど、初發から一厘と九分九厘との大戦ひで在ると申して、何時までも同じや

うな事を書かして在る通り、口で言はしてある事がドチラの國にもあるから、神力と學力との力比べの大戦ひであるから、負た方が従はねば成らんと申して、筆先に出してある通り、實地に實現て來るから、此先で神から不許と申す事を致したり、吾の一方で行らうと思ふても、世が薩張り變りて了ふから、是までの事はチツトも用ゐられんぞよと、度々氣を附けてあるのに、聞かずに吾の我で行きたら、彼方へ外れ、此方へ外れて、一つも思ふ様には行かんぞよ。素直にさへ致せば何事も思ふやうに箱差した様に行くのが神代であるぞよ。今の人民は餘り我が強いから、是迄は神の申す事も聞かずに、守護神の自由に一力で思惑に行けたのは、地の上に誠と申すものが無かりたから、世に出て居る方の守護神が、惡神の大將に氣に入る様な悪る力がありたなら、何處までも上げて貰へる世と成りて居りたから、惡い事の仕放題、惡神の自由で在りたなれど、モウ時節が廻りて來たから、其時節の事を致さな世は立ちては行かんぞよ。今迄は物質の世でありたら、學が茲まで蔓りて、學力でドンナ事でも九分九厘までは成就いたしたなれど、モウ往生いたさなならん如うに成りて來たぞよ。茲に成るまでに惡の守護神を改

信しんさして、助たすけて遣やりたたいと思おもふて、明めい治ぢ廿じふ五ご年ねんから深ふかい因いん縁ねんのある出で口くち直なほの身み魂まに知しらさしたのであるなれど、吾われ程ほど豪えらいものは無なきやうに思おもふて、チツトも改か信しんの出で來きん罪ざい人にんばかり、神かみも是これには往わつ生じやういたさな仕し様やうがないぞよ。現このよ世よの鬼おにを平たひらげて、世せ界かいの物ものに安あん心しんを致いたさすぞよと云いふ事ことが初しよ發ぱつに筆ふで先さきにかかしてあるが、世せ界かいの大おほ洗せん濯たくを致いたして、元もとの水すい晶しやうの身み魂たまやら天てん地ちの大おほ神かみの教をしへどほりの世よに致いたして、天てんに坐います御ご三さん體たいの大おほ神かみ様さまに、御おん目めに懸かねば成ならぬ御おやく役やくであるぞよ。來おいで來おいでと松まつの世よを待まちて居をりたら、松まつの世よの始はじまりの時じ節せつが參まゐりて來きたなれど、肝かん賢じんの惡あくの性しやう來らいの改かい信しんをいたして貰もらはんと、何いつ時つまでも頑がん張ばるやうな事ことでは、此この世よは水晶すいしやうにならんから、ドウシテも聞きかねば聞きくやうに致いたすより仕し様やうは無ないぞよ。世せ界かいには代かへられんから、此この先さきの規き則そく通どほりに制せい配ぱいを致いたさねば御ご三さん體たいの大おほ神かみ様さまへ申まをし譯わけがないから、二に度ど目めの天あまの岩い戸と開ひらをいたしたら、惡あくの性しやう來らいは微み塵ちんも無ない如やうに洗あらひ替かへして、巖いはに松まつの動うごかぬ世よにいたす世せ界かいの大おほ橋はしと成なる尊たふとい所ところであるから、餘あまり何いつ時つ迄まで疑うたがふて居をると、天てん地ちの大おほ神かみ様さまへ大おほきな御ご無ぶ禮れいになるから、今いま一いち度ど氣きを附つけておくから素す直なほに致いたすが徳とくであるぞよ。

(大正一二・四・二七 舊三・一二 北村隆光再録)

(昭和一〇・六・一五 王仁校正)

}\

靈界物語 第六〇卷 眞善美愛 亥の巻

終り